

# 人であらざる の道

-はじまりの代行人形-



幹谷 セイ  
Illustration ハルソラ

### 登場人物

ノイエ・アルペイト

...主人公。自分の恩人・レインを待ち続ける少年。剣術最強。

レイン・セーヴィラ

...人形師の少女。リノオールを作り出した天才。冷静沈着。

リノオール

...レインによって作られた少女の姿の代行人形。天真爛漫。

ショーン・アルペイト

...ノイエの兄。人形師。頭脳明晰。毒舌。虚弱。

スノー

...町で唯一の医者。人命第一。

ナオミ

...町に常駐する女警官。出世欲の権化。

エニルダ・セーヴィラ

...レインの祖父。人形学を提唱した人形師の権威。

クラウンマーチ

...エニルダが生み出した執事の姿の代行人形。傲慢。

人形師狩り

...町の人形師を次々と殺害する謎の怪人。

## プロローグ

### 出会いと別れ

あの頃の俺は、まだとても小さかった。

体も心も魂も、その目に映る全てのものさえも。

それは、七年前。

長い夏が終わり、短い秋が始まろうとしていた。

「――この世界に存在する、あらゆるものには、魂が宿っているの。人間、動物、植物はもちろん、水や空気、この町を形作っているレンガ一つ一つだって、ちゃんと命を持っているのよ」

赤レンガを綺麗に並べ、積み重ねて形成された町並み。

どこかから伸びてきてレンガにまとわりついている、蔓草の細い茎やハート型の緑葉が、単調な町並みに新鮮な彩りを加えている。

まるで、<sup>おとぎ</sup>御伽話の舞台にそぐわしい、単調で小綺麗な町。

その一角で、幼くかん高い、楽しそうな声が響く。

まるで高名な演説者のように胸を張って、見知らぬ女の子が、延々と講釈をたれていた。

「無機質なものたちの魂を成長させ、意志を持たせる。その魂を抜き取り、疑似の媒体に移しかえることによって、新たなる生命を生み出せる。それが、魂学の根本的な概念なの」

紫がかった光沢を持つ、長い黒髪。

瞳は紫色の輝きを持つ、大きな宝石みたいだ。

女の子は赤を基調とした、レースやフリルのたくさんついたドレスを身に纏<sup>まと</sup>って、艶やかな光沢のある赤色の靴を履いていた。

お金持ちのお嬢様、を彷彿とさせる風貌だった。

「でもね、魂学そのものは、人知を越えた奇跡の所業。偉大なる自然が作り出した命を抜き取ってしまうなんて、同じく自然に作られた存在である人間には、とうてい不可能とされているの。仮にできたとしても、神を冒瀆する許されない行為なんですよ。興味はあるけれど、罪なのね。それを侵さないことが、世界の秩序を守るっていうことなのよ。だから、魂学の多くは確立されながらも、一部を除いて禁忌の学問とされているの」

少女は、十歳くらいだろうか。しかし、その小さな唇から放たれる、とめどない言葉の数々は、おおよそ、そんな歳頃の子供が口にするものとは思えないほど、難解で複雑で、大人びたものだった。

この娘は、とても頭がいいのだろう。俺なんか想像もつかない未知なる世界を熟知し、その世界を軸に生きている。

だから、少女が紡<sup>つむ</sup>ぐ多くの言葉の意味は、当時の俺には、さっぱり理解できなかった。今ですら、理解できるか怪しい。

俺が心中で首を傾げているなんて、全く気付く気配もなく、女の子は話し続ける。

「だけどね。人間が自分の手で作り出したものに宿る魂ならば、人間にも育てて取り出すことができるのよ！ 人間が、人間のために初めて作り上げた、人にもっとも近い、人であらざるもの――」

少女は、腕の中に大事に抱きしめていたものを、勢いよく俺の目の前に突き出した。

「それが人形よ！ 人形に宿った魂を大事に育てると、やがて意志を持ち、人格を形成し、人間そっくりになるの。言葉も話せるし、体も動かせるようになる。あたしたちと変わらないくらい高度な存在に進化するのよ！」

少女曰く、人形の魂に関する概念だけを魂学から分離させ、特化させたものを「人形学」と呼<sup>いわ</sup>

ぶそうだ。

「あたしは文字が読めるようになってから、ずっと人形学をお勉強してきたわ。その結果、ようやく、生み出すことができたの！」

俺の眼前につきつけられたのは、布で作られた女の子の姿の人形だった。

太い毛糸で作られた、長い赤い髪。赤いボタンのくりっとした瞳。糸で縫いつけられた口は、にっこり笑顔を浮かべていた。

少女と同じく、赤を基調とした豪勢なドレスに身を包んでいる。

大切にされているのだと、一目で分かった。

「この子、リノオールって言うの！ あたしがずっと大事に可愛がってきたお人形よ。この子の魂が今日、やっと人格を形成するに至ったの。すごいでしょ？ あたしが自分の手で生み出した、初めての魂なのよ！」

興奮して、かん高い声を放つ女の子。

その手に持つ人形――リノオールが、主人の声に反応して首を動かし、見上げた。

両手をピョコピョコと、上下に動かした。

人形には糸やゼンマイ、その他身体を自動で動かせる要素は、何もついていない。

女の子が操っていないことは、明白だった。

自分の意志で、この人形は動いているのだと、素人目に見ても分かった。

自然と、納得した。この人形は「生きて」いるのだと。

俺には否定する理由も確証もなかった。

人であらざる人――リノオールは、嬉しがっているみたいだった。

自分の魂を作ってくれた、女の子が喜んでいる姿を見て。

「今日は、リノオールが成長したお祝いの日なの！ その記念すべき日に、偶然あたしの前に居合わせたあなたは幸福だわ。一緒に、この奇跡をお祝いしましょうよ！」

「悪いけど、そんな気分じゃないから」

曇り空の下。

周囲の住宅に比べると、わりと小さな建物の玄関の前。

レンガ作りの階段に腰掛けていた俺は、目の前の少女を見上げ、にべもなく誘いを断った。

少女は笑顔のまま、しばらく固まっていた。

向かい合う俺達の間を行き交う空気に、すさまじい温度差が生じ、会話の熱が一気に冷えていく。

まだ秋の始まりだというのに、木枯らしが吹き荒れているみたいだ。

唇を尖らせ、少女は不服そうな反論の視線を俺に向けてくる。

だが、俺はそんな態度を気にするでもなく、むしろ周囲が涼しくなって、ほっとしていた。

さっきまでの、熱気が渦巻く陽気な空気は、気持ちの沈んだ今の俺には、ちょっと暑すぎた。

「何よ。気分でもないくせに、あたしのお話を、じっと熱心に聞いてたっていの？」

「別に熱心に聞いてたわけじゃないよ。君がいきなり僕の目の前に現れて、一人で勢いよく喋り続けていただけじゃないか」

俺の気力ない反論に、少女は「まあ」と呆れた声を上げた。

「あなた、ずいぶんと荒んだ魂を持っているのね。せっかくのリノオールのお祝いが台無しだわ。何があなたの魂を病ませているの？ どうしてそんなに落ち込んでいるの？ 偶然とはいえ、ここで出会ったのも何かの縁なもの。お話くらい聞いてあげるわよ？」

俺はしばらく、その言葉を頭の中で反芻させていた。

なんとなく上から目線なのは気に食わないが。

何かの縁、というのは、良い響きだと思った。

それに、心の中で <sup>わだかま</sup> 蟠っている、この苦しい想いを誰かにぶつけられたら、誰かに聞いてもらえたら、と思っていたところだったし。

俺は一息吐いて、話し始めた。

「……お兄さんが、酷い熱を出しているんだ。お医者さんの話だと、もう長くないかもって」

口に出しても、決してすっきりする話ではなかった。

だが、一度口をついて出してしまった以上、最後まで吐き出さなければ、後味が悪い。

「お兄さんは体が弱いから、一度病気になると、なかなか治らない。治ってもまた、すぐに病気に罹<sup>かか</sup>ってしまう。いつも死と戦っているんだよ。……でも、今度は負けてしまうかもしれない」

体が震えだした。

寒さとは違う。これは絶望だ。

絶望が俺の体を蝕むように、震えさせるんだ。

俺はぎゅっと、自分の体を抱きしめた。

「僕はお兄さんが大好きだ。だからお兄さんが死んでしまったら、どうすればいいんだろう……。そう考えると、怖くて怖くてたまらないんだよ」

「どうすればいいのかわからないから、怖く感じるのね。そう思う理由は、途中で考える行為を放棄してしまっているからだわ」

俺の話聞き終えた少女は、すかさず感想を述べた。

「多くを知り、学び、得たものを組み立てる。考えて考えて、可能性を突き詰めて研ぎ澄ませていく。そうすればいつか必ず、自ずと納得のいく答は見えてくるものよ。あなたはそこに辿り着

く前に、諦めてしまっているだけ」

その感想は、どちらかというところ批評、批判に近かった。

話せと言われたから話したのに、なぜ故に俺がそんな否定的な言葉を返されなければならないのか。

そんな他人の個人論を聞かされるために、俺は心の内を明かしたわけではない。

まるで悩む俺自身を否定されているかのような、小馬鹿にされている気さえした。正直、腹が立つ。

「だって、仕方がないじゃないか！ お医者さんにもどうにもならない病気なんて、僕が何をどうしたって、治してあげられるわけがない。いくら考えたって、答は同じだ。僕には何もできないんだよ」

発散する場所のない苛立ちを、俺は少女にぶつけた。

怯えるように、リノオールがビクリと体を震わせた。

対して、少女は動じもしない。

「何もできない魂なんて、この世にはないわ。全ての命は役割を持っているからこそ、この世界に存在しているのだから。お医者さんの真似事がうまくできないからって、挫折する必要なんてないのよ。あなたには、あなたにしかできない役目があるのだから。視点を変えて、それを探してみてもどうかしら」

落ち着いた、物静かな口調でそう言った。

俺は体の力が抜けた。

同時に、今まで抱えていた苛立ちや怒り、恐怖が、憑き物が落ちたみたいに体内から消えて、なくなっていった気がした。

同時に気付いた。

この少女は、自分の頭の良さを笠に着て、俺を批判してバカにしていたわけじゃないのだと。

本当に、俺を心配してくれているのだという、真実に。

「自分にしかできない役目って、何？ 君にもあるの？ 君はそれを、ちゃんと分かってるの？」

憤ってあたり散らした態度が、急に恥ずかしくなる。だが謝る勇気もなく、俺は話を逸らした。

「もちろん。人形学の概念を作り出したのは、あたしのお祖父さまなの。その卓越した人形師としての知識、技術を受け継いでいくことこそが、あたしの役目」

彼女は愛おしそうに、人形を優しく抱きしめる。

「この、リノオール<sup>エージェント・ドール</sup>の魂を完璧に育て上げ、人形師の英知の結晶—— 代行人形 を作り上げる。それがあたしの望みであり、すべき役目なのよ」

「代行人形……？」

「そう。人間そっくりに進化を遂げた人形の魂を、それにふさわしい姿の媒体に移し変えることで、完璧な`生きた人形、を作り上げるの。まだ、誰も成し遂げていない、人形師の永遠の夢なのよ」

少女は笑顔で続ける。

「今日は、リノオールに人格が生まれた日。つまり。あたしの大きな使命であり、大きな夢が、最初の一步を踏み出した日なの。そんな素敵に、立ち止まって怯えているあなたを見ているなんて、しのびないわ。……ねえ、あなたも今日を、最初の記念日にしてみてもどう？」

「記念日？」

俺が首を傾けると、少女は大きく頷いた。

「あなたが、あなたにしかできない役目を探し始める、最初の日よ。これから少しずつ、見つけていけばいいわ。あなたが、大好きなお兄さんのためにしてあげられる、何かを」

お兄さんのためにしてあげられる何か。

ずっと憧れていた。乞うていた。

素敵な言葉だと思った。

「――そうだね。何もしないうちから、諦めるなんて良くないよね。もう一度、考えるよ。僕にしかできないやり方で、お兄さんを助けてみせる」

「その調子よ。お互い、がんばりましょうね」

そう言って、少女は俺に微笑みかけてくれた。

心が無性に、暖かく感じた。

直後。通りの向こうから、微かに大人の声が聞こえた。その声に、少女は敏感に反応する。

「お祖父さまが呼んでる。もう行かなきゃ」

「待って！」

駆けだしていこうとする女の子を、俺は慌てて呼び止めた。

「あの、また会えるかな？ 今度は元気になったお兄さんにも、一緒に会ってくれる？」

別れる前に、とにかく聞いておきたかった。

だが、少女の返事は、否定の首振りだった。

「あたし、今日でこの町とお別れするの。ずっと遠くに行っちゃうのよ」

「遠くに……？」

ショックな言葉だった。せっかく知り合えたのに、もう会えないだなんて。

「寂しがらなくてもいいのよ。生きていれば、いつかまた会えるかもしれないでしょう？」

俺の心証を読みとったらしい。

少女は優しく、諭してくれた。

「あたしは将来、人形師になるの。だから大きくなったら絶対、この人形の町——ロノステラに帰ってくるわ。だからいつか、きっと会いましょう。その時には、あなたのお兄さんも紹介してね」

そう言い残して、少女は俺に手を振り、声のした方向に駆けていった。

少女はその声の主に、こう呼ばれていた。

——レイン、と。

その名前を、俺はしっかりと記憶に刻み込んだ。

彼女と過ごした、ほんのわずかな時間。

彼女と交わした、ほんのわずかな会話。

当時の瞬間を思い出す度に、俺の心は熱く高揚し、その瞬間が、もう終わってしまったのだと気付く度に、苦しくて胸が締め付けられそうになった。

興奮と虚脱が交互に訪れ、俺を襲う。

それが恋心だと気付いたのは、それからずっと後のことであって。

その時にはもう、俺の初恋はその相手と共に時の彼方へと流され、手の届かない場所へと運ばれてしまっていた。

だが、いつかそれを引き戻せる日がやってくると、俺は信じ続けてきた。

生きていれば、いつか必ずまた会える。

少女——レインの言葉が手綱たづなみたいに、俺の想いを引き留めてくれていた。

あれから、七年経った。

俺は現在も、この町で生きている。

彼女の帰還を待ちわびながら。

## 一章 人形師狩り捕獲作戦

広場に佇む女の子

レンガ造りの小さな町、ロノステラ。

通称「人形の町」と呼ばれるその町には、色々な音が満ち溢れていた。

広場を歩いていると、必ず耳に入ってくる。

木を削る音。

皮をなめす音。

象牙を磨く音。

ミシンの針が動く音。

それは町中に点在する、人形を作る工房の中から聞こえてくる。

人形師たちがあらゆる道具、材料、技法を用いて、人形を作っている音だ。

その音を聞く度に、今日も休むことなく人形が生み出されているのだなど、実感できる。

心地よい音に身を委ねながら辺りを見渡せば、たくさんの人形たちに囲まれていることに気付かされる。

作られた人形たちは、町の大通りに構えられている多くの店舗に、商品として並べられる。

そのほとんどが、露店だ。

誰にでも見える場所に綺麗に陳列された人形たちの、鮮やかに彩られた優美な姿は、道をゆく人々の目にとまり、長く安らぎと感動を与え続けている。

この町で作られる人形たちには、人を惹きつける不思議な力があるのかもしれない。

一つ一つ、丹精込めて作られた珠玉の人形たちが出迎えてくれる町の中は、いつも大勢の人々で溢れていた。

町に住む人。人形を求めてやってくる。近隣、遠方の人々。

いろんな人たちが集まって、祭りのように賑やかな毎日。  
「人形たちに囲まれていると、まるで夢の中にいるようだ」と、誰かが言っていた。

本当に、その通りだったのかもしれない。

そう思えるほどに、現在のこの町は、楽しい夢から醒めたあとの、退屈な現実みたいだった。



初夏の空気を漂わせる、ロノステラの町。

それは、とある昼下がりの出来事。

「あう……。お人形さん、いないよ？」

大輪の花を上から見下ろしたような模様で彩られる、レンガ作りの丸い広場。

そのど真ん中で、途方に暮れた様子で立ち尽くしていたのは、蜜を求めて迷い込んできた蝶。

ではなく、小さな女の子だった。

赤みを帯びた長い髪は、縦巻きに整えられている。

そよ風に軽やかになびく、フリルのたくさんついた深紅のワンピースを着た、可愛らしい女の子だ。

女の子は広場を囲んで設置された露店の前を、オロオロしながら歩き回っていた。

時折、「すみません」とか。「お人形さん、いませんか」とか。

泣きそうな声で、必死に呼びかけている。

だが、返事をするものは、誰もいない。

それも当然。この広場には人っ子一人、人形一体、いやしないのだから。

露店には灰色の幕が掛けられ、完全に閉店の様相を呈<sup>てい</sup>している。

女の子はしょんぼりと頭を項垂れ、広場のど真ん中でたった一人、立ち尽くしていた。

昼飯の調達から戻ってきて、たまたまその側を通りかかった俺は、その少女の姿を、じっと見  
ていた。

愛らしい顔に悲痛な表情を浮かべる子供を見かけて、そのままシカトを決め込めるほど、俺は  
良心の荒んだ人間ではなかった。

「人形を買いに来たのかい？」

声をかけると、女の子はこちらへ向き直り、俺を見上げて、コクリと頷いた。

「残念だけど、今はどこの店も閉まってるよ」

俺は辺りを見回し、息を吐いた。

数日前から、町の中にある人形を売る店という店が、一斉に看板を下ろしていた。

いつまでこの状態が続くかは、分からない。無期限の閉店だ。

その情報は町の外にも手早く広がり、今現在、人形を求めて町を訪れる人は皆無となっていた  
。

そのため、本来ならば埋め尽くすほどの客が集まっていたであろうこの広場も、今は閑古鳥の  
独壇場と化してしまっている。

この女の子はきっと、その話を知らなかったのだろう。

町では見かけない子だ。きっと、人形であふれる美しい町の広場を一目見ようと、遠くの土地  
からはるばるやってきたに違いない。

タイミングが悪かった、残念だったと言うだけなら容易いが。

可哀想な現実だった。

「どうして、ないの？ お人形さんのお店、たくさん」

やりきれない様子で、俺に問いかけてくる女の子。

俺は少し、その理由を教えるべきか躊躇<sup>にためら</sup>った。

「あんなこと、を、いたいけな小さな女の子に、正直に語ってもいいものだろうか。

暗く重い。大人の事情。

それを口で説明して、ちゃんとこの子に納得してもらえるのだろうか。

そう考え、悩んでいる最中。

都合よく、それが通りかかった。

俺たちの立ち尽くす広場を横切り、白い布で包まれた担架が、事務的に運ばれていく。

運んでいる連中は、蒼い制服を身にまとった、二人の警察官だった。

.....また、犠牲者が出たのか。

俺は重苦しい感情に押し潰されそうになった。

しかし、この情景は。俺が詳しく語らずとも、雰囲気<sup>きょうき</sup>で理解を得てもらうには、格好のものと判断した。

俺はその担架を目で追いながら、女の子に説明した。

「ここ最近、人形を作っている人たちが、次々とああな<sup>あな</sup>ってしまってるんだ。だから、人形を作れなくなって、店も開けられなくなってしまったんだよ」

女の子は、去っていく担架を不思議そうに見つめている。

「お人形を作るひと、おねんねしてるの？」

うーん。やっぱり、あれを見ただけで事態を察することは、子供には無理だったか。

「そう、眠ってるんだ。ずっと起きない眠りだ。あの人は、死んでしまったんだよ。だからもう二度と、人形を作れないんだ」

俺はそう補足してみたが、女の子には、よく分からなかったみたいだ。

きっと、死というものがなんなのか、イメージできないのかもしれない。

だから、その言葉を耳にしたところで、恐怖も哀しみも感じないのだろう。

小さい頃から常に、大切な人を死へ追いやるものの脅威に晒されてきた俺とは、育ち自体が違うのだ。

もちろん、それが普通だろうし、普通であってほしいものだが。

「人形、見たいんだよな？」

心に重くのしかかる、嫌な気持ちを振り払い、俺は女の子に尋ねた。

そりゃ、あんなに熱心に探していたのだから、その答は聞くまでもないだろうが。

「うん、見たい！」

即答する女の子に、俺は笑いかけた。

「じゃあ、うちに来ないか？　すぐそこだし、俺の兄貴が人形師をやっているから、家にはたくさん人形があるんだ」

女の子は宝石みたいな赤い目を輝かせて、大きく頷いた。

決まりだ。俺は女の子と一緒に、自宅に戻ることにした。

俺の隣でスキップしながら、楽しそうについてくる女の子。

そう言えば、まだお互いに名前も知らないなと思い立ち、歩きながら自己紹介をした。

「俺はノイエ・アルペイトっていうんだ。君は？」

「あのね、あたしはね。リノオールっていうの！」

リノオール。

はて。どこかで聞いたような。

懐かしい響きの名前。

しかし、過去のうっすらとした記憶と、隣を歩く女の子の容姿をうまく重ねることができず、俺はそれ以上、深く考えるのをやめてしまった。

だが、その名前が生じさせる既視感が気のせいではなく、聞き覚えのあるものであった事実を、少し後に驚くべき形で認識することになるだなんて。

この時は思いもよらなかった。

## 路地裏の人形師

広場を出ると、レンガでできた背の高い家々に挟まれた、細い路地に繋がっていた。

そこから少し奥へ進めば、その右手に俺の自宅が見えてくる。

いつもは通行人もほとんどなく、静かな路地なのだが……。

今日は少し<sup>ひとけ</sup>人気も多く、賑わっている。

広場がああの有様だからだろう。その騒がしさがとても新鮮で、懐かしく感じた。

後で分かったことだが、路地がやけに騒がしいその理由は、俺が知っているものと知らないもの、二通り存在していた。

まず最初に、野次馬たちがこんな狭い路地裏に集まっている、俺の知るに及ばない理由から確認する。

俺の家より手前、道を挟んで斜め向かいに建っている、大きな家。

その玄関先で仁王立ちしている、一人の警官の姿が目にとまり、俺は立ち止まった。

小柄な警官だ。金色の髪は短く、瞳は碧い。鋭い顔つきをしていたが、組んだ腕の上で、はちきれんばかりに盛り上がっている巨大な胸が、女であることを露骨に示している。

「こんちわ、ナオミさん」

俺はその女警官に、軽く挨拶した。

「やあ、アルペイトの弟君。こんにちわっす」

ナオミ警官も、俺に挨拶を返してくるが、その表情はぶっきらぼうの一語だ。

元より、警察の人間に愛想なんて求めちゃいないので、別に不平も文句も浮かんではこなかったが。

ただの形式的な会話、という感じだ。

ナオミ警官は、この町の治安維持を任せられ、大陸中央部の大都市アイルゴにある警察組織の本部からやってきた駐在さんだ。

彼女はこの町へ派遣された当初から、島流しに遭っただの左遷<sup>させん</sup>を食らっただのと、悲観的なグチをよく陰でこぼしていた。

それも無理はない。この小さな町は平和で穏やかそのもの。警官の力が必要となりそうな事件なんて、起こる気配すら見せない僻地<sup>へきち</sup>なのだから。

事件が起こればいい、なんて不謹慎な発言を警官がするわけにはいかないが、出世を目的に警官となった彼女としては、自分がバリバリと活躍できるような騒動が起こってもらいたいというのが、日々の本音だ。

そのため、ここ連日、ナオミ警官は少々、機嫌がよろしい。

表情はいつもと変わらず無愛想を貫いているが、内側から滲み出ている高揚的な感情は、完全には隠しきれていない。

「最近、すごく楽しそうだよな。ナオミさん」

ちょっと茶化して言ってやると、ナオミ警官は眉を<sup>ひそ</sup>顰めた。

「楽しいとは何ですか。今この町は、大変な事態に見舞われているというのに、不謹慎な。自分がいったい、何を楽しんでいるって言うんですか？」

「その大変な事態を、大いに楽しんでいるように見えるけど？ 平和な町を<sup>けだる</sup>気怠そうにパトロールしていたときよりも、そこでじっと立ってる今のほうが、生き生きしているぜ？」

「し、失礼な。自分はいつでも手抜きなく、精神誠意込めて、町の治安をお守りしているっす！」

とか言いつつも、軽く咳払いして、

「……まあ、この町では最近、過去に類を見ないような凶悪な事件が多発しているのは事実っす。今まで以上に捜査と治安維持に力が入っているかもしれない、と判断されても、否定できないっすけどね」

遠回しではあるが、いつもより自分のテンションが上がっているのだと認めた。

お堅くて気難しそうに見えるが、以外と単純で素直な人だ。

だからこそ、頼りないけれど信頼は持てると、俺は判断している。

俺は彼女の立っている場所に<sup>そび</sup>聳える、レンガの家屋を見上げた。

「さっき、担架で運ばれていく人を見たけど。この家の人？」

訊ねると、ナオミ警官は頷いた。

「そうっす。人形師のラドクリフさんっす。今朝方、作業部屋で大量の人形に埋もれて殺されている姿が発見されたっす。心臓を一突きっすよ。部屋の窓が割られているため、進入者があったことは間違いなさそうっすね」

「なるほど。家を出る時から近所が騒がしいと思っていたけれど、原因はこの家か」

この路地に集まってきた人々の多くは、騒ぎを聞きつけて殺人事件の現場を覗きにきた、野次馬たちだったのか。

「ご近所さんなのに、気付いてなかったっすか」

「今日は朝から、色々忙しかったからさー。それどころじゃなかったんだよな」

呆れるナオミ警官に、俺は苦笑いを浮かべた。

「でも、この様子じゃ、まだ犯人は捕まってないみたいだな」

「ぐう、情けない話っすが、犯人がどこの誰なのか、目星すらついていないのが現状なんすよお。うへへ」

苦々しい顔をしつつも、ナオミ警官の声は浮かれて弾んでいた。

ぐうの音しか出ない苦境を、意外と楽しんでいる。

言い換えれば、これからまだまだ調査のやり甲斐がある、という意味だから。

「でも、今まで立て続けに起こっている人形師連続殺人事件。手口からして、みーんな同じ奴の仕業に違いないとは、分かっているっす」

犯人の目星はつかないが、事件に関係ありそうな怪しい人影は、度々目撃されているという。

その情報だけを頼りに、警察は必死で心許ない捜査を続けているらしい。

「ろくな手掛かりも残さずに次々と犯罪を繰り返すなんて。憎らしい奴っすよ、まったく」

そんな警官泣かせの謎の怪人。確か通り名がついていたはずだけど。

「何て呼ばれていたっけ。その人形師ばかり狙う、凶悪な殺人鬼」

「そいつを、僕らはこう呼んでいるんだよ。――人形師狩り、とね」

女警官とは違う、男の声が返事をしてきた。

被害者の住居だった建物の中から姿を現した、白っぽい人影。

黒い鞆を手に持った、空色の髪と瞳を持つ、白衣を着た若い男だ。

その男が視界に入るや否や、ナオミ警官は姿勢を正して、ピシッと敬礼する。

「お勤めご苦労様っす、スノー先生！」

背の高い男は視線を落とし、彼女を見る。

そして、童顔の表情に優しげな笑みを浮かべた。

「君も、警護ご苦労様。ナオミちゃん」

労いの言葉をかけられて、女警官ナオミは硬い表情を保ちながらも、ほんのり頬を紅潮させていた。

先生、と呼ばれたこの男――スノーは、医者だ。

普段は町医者として人々の健康を気遣う身分であるが、こういう死者が出る事件が起こると、町で唯一の医師として、検屍に駆り出されるのだそうだ。

今日もまた、さっき運ばれていったラドクリフ氏の死因調査を、警察に依頼されていたのだろう。

後片付けを終えて、今ようやく、出てきたというところか。

「しかし、いつまで続くんだろうね。人形師狩りの凶行は」

げんなりした様子で、スノー医師は息を吐く。

「医者としては、仕事が増えていいんじゃないの？ 検屍って報酬も高いらしいし」

俺が口を挟むと、彼は困ったような笑みを浮かべる。

「仕事をするなら、やっぱり生きた人間を診たいものだね。こう連続で死人ばかり相手にしていたんじゃ、さすがに気分が萎<sup>な</sup>えるよ」

「そりゃ、ごもつともだ」

「医者<sup>の</sup>の使命は、限りなく多くの命を救うことにある。というのが、僕の信念だからね。死んでしまった人の姿を見ても、自分の無力さに打ちのめされるだけなんだよ。たとえ、僕の力ではどうにもならなかった命であってもね」

スノー医師は、患者第一な精神の持ち主だ。

非常に無欲で仕事熱心な人だと、俺は認識している。

そんな人の口から出てくるからこそ、そんな偽善めいた言葉にも、正当性と真実味が生まれる。

とはいえ、犯人は別に、無力な医者が絶望する様を見たくて、こんな犯行に及んでいるわけではないだろう。

——人形師狩り。

仮称してそう呼ばれる謎の殺人鬼は、数週間前に突如として、この町で猛威を振るい始めた。

その姿をはっきりと見たものは、誰もいない。若いのか中年なのか、男なのか女なのか。

何も分からないのが今の現状であり、かつ、奴の不気味さを誇張させる要素となっている。

黒いマントで全身を覆い、昼夜問わず人気のない路地を徘徊しているとも噂される。

その仮の名前が示すままに、奴が襲って命を奪う相手は、決まってこの町で技を磨く、人形師ばかりなのだった。

殺された人形師の数は、知られているだけで既に、二桁に達しようとしている。

ひょっとしたら、人知れず命を奪われてしまっている者もいるかもしれない。

この町の支えとも言える人形師たちを次々と殺していく、人形師狩りなる謎の存在。

いったい、奴は何者で、何のためにこんな凶行を繰り返しているのだろうか。

「ただの人形嫌いな変質者の犯行。と考えるのが、一番楽っすけどね」

犯人について、根拠のない考察を巡らせるナオミ警官。

そんな軽率で安楽なことばかり考えているから、最近の警察は云々と、周囲にグチられるのだ。

とは流石に、口には出さなかったが。

「もしくは、その逆かもしれないね。熱狂的で狂信的な、人形好きの変質者の仕業かも」

スノー医師も考察に加わる。

犯人が変質者である、という特徴は、二人の間では既に決定事項になっているみたいだ。

「それはどうっすかね。だって、人形師狩りは人形師を殺した後、被害者の作った人形を全てぶち壊していくじゃないっすか。人形好きの人間が、そんな残酷な行為をしますかね」

「それはまあ、確かにね。でも。殺された人形師たちには、抵抗した痕跡がっさい、ないんだ。犯人と対峙したからには一瞬でも逃げようとしたり、反撃しようとしても、おかしくないはずなのに。だから人形好きだということを被害者がよく知っていて、目の前にいても安心できる人物だったんじゃないかな。そんな奴の仕業じゃないかと、僕は思うんだけど」

色々犯人に対して意見を出してみるのはいいが、何も分かっていない以上、どれもこれも推論の域を出ないし、正解と照らしあわせることもできない。

この二人には、名探偵みたいな職業はさっぱり向いていなさそうだ。もちろん、俺もだが。

「犯人が分からない以上、人形師は殺人鬼に狙われないように、大人しくしているのが一番ってわけだな」

俺が思った結論を言うと、確かに、と二人は頷いた。

「そうだね。大事なのは奴に目を付けられないことだ」

「極力、自分の素性を隠し、人形作りとは無関係だという態度でいることが、一番賢明だと思うっす」

続いてそう告げたナオミ警官の瞳が、突然、鋭く俺を射抜いた。

「……っというお話を、ぜひお兄さんにも、ちゃんと言って聞かせてあげてくれないっすかね。弟君」

ナオミ警官は、俺から視線を外した。

憎々しげな目で次に見つめた場所は、俺の背後。

普段から人気のないこの通りが、いつもよりも賑わっている理由。一つは先述した通り、人形師狩りの起こした殺人事件のせいなのだが、もう一つは俺の後ろの、騒がしい軒先に原因があった。

「……あー！ お人形さんが、いっぱい！」

俺の側で、指を咥えて退屈そうにしていたリノオールが、とっても嬉しそうに目を輝かせる。

振り返ると、こぢんまりとした貧相な家屋——俺の自宅ですが何か？ ——の玄関前に、ずらりと並べられた、たくさんの人形が視界に入り込んできた。

まるで舞踏会に赴く、紳士淑女の団体みたいに、きらびやかに着飾った人形の集団たちが、道行く人々を見下ろしていた。

人形の大きさは、手の平サイズのものから本物の人間くらいのものまで、さまざまだ。

大きいものとなると、体の作りも表情も本物の人間そっくりに、精巧に作られている。

身に纏った色とりどりの衣服は、まるで極彩色の花が咲き乱れているかのようだ。

小規模な人形の祭典。

そんな情景を彷彿とさせるその場所には、どこからか噂を聞きつけてやってきた人々が集まり、人形を買い求めたり観光気分で見ていると、楽しげな賑わいを見せている。

この町の人たちは、殺人鬼が怖くて、人形を見たり買ったりする余裕もないのかと思っていたが。

やっぱり根っからの人形好きが多いのだろう。店を開いている場所があると分かるや否や、こうやって危険を省みず、人形を求めてやってくる。

そんな人たちの隙間を縫って、悲鳴に近い歓喜の声を上げながら、リノオールはたくさんの人形の元へと駆けていった。

軒下に置かれた木箱の中に、盛りだくさんに詰め込まれた、小さな可愛い布人形。その一つを持ち上げて、愛おしそうに抱きしめる。

「その人形が気に入ったかい？ お嬢ちゃん」

突然声をかけられ、リノオールは驚いた様子で顔を上げる。

陳列された人形の一体が、話しかけてきた。

そんな風を感じたかもしれないが、そうではない。

人形たちに埋もれるようにして石段に腰掛けている、一人の男がいた。

声を発したのは、その男だ。

男の髪は灰色。同色の濃い瞳が眼鏡の奥で微笑んでいる。

血色の悪い肌のせいで、顔は病的に青白い。

くたびれたシャツを見事に着こなした、くたびれた男。

「安くしとくよー？ どう、一つ？」

「こんな小さな子供から金をせびるなよ。ショーン」

俺が歩み寄って口を挟むと、男はこちらを見上げて、ニヤリと笑う。

「この子、お前が連れてきたのか？ ノイエ」

「ああ。人形の露店を見物に来たみたいなんだけど、今はあのザマだからな。広場でがっかりしていたから、案内してきた」

「なーるほど。我が弟は実に親切な奴だ。どうせなら、もっと金ヅルになりそうな奴を連れてきてくれたら嬉しかったんだが。まあ、今日くらいは人形を心から愛でてくれるお客様に、無償で楽しんでもらうのも悪くない」

男は勢いよく立ち上がり、リノオールの前に膝を突いた。

彼女と目線を合わせて、にんまりと笑う。

「お嬢ちゃんは運がいい。今朝、久しぶりに店開きしたばかりなんだ。ようこそ、人形師ショーン・アルペイトの工房へ。今のこの町じゃ、まともに人形を見られる場所は、俺の店くらいだ。ゆっくりしてってくれよ」

しばらく、その顔を見つめて啞然としていたリノオールだったが、目の前の男が悪い奴でも怪

しい奴でもないと本能的に察したのか、すぐに馴染んでにっこりと笑い返した。

人形師ショーン・アルペイト。

年齢は二十歳。俺より三つ歳上の、血の繋がった兄だ。

ショーンは子供の頃から人形の構造、進化に興味を持っていた。

その好奇心を形に変え続けた結果、今ではそれなりに優秀な技量を誇る人形師として、世間に認められている。

天才肌で、非常に聡明な頭脳の持ち主ではあるのだが……。

「ぐはあ、いかん。急に激しく動いたから、立ちくらみが……」

非常に体が弱い。

ちょっと肉体に負荷がかかると、こんな風によろめいてしまったり、体調を崩して寝込んだりする。

極端に虚弱な体質は、アルペイト家に代々受け継がれる遺伝的なものなのだそう。だが、改善は不可能ではない。俺のこの体も、昔はショーンに負けないくらい弱かったが、今ではそれなりに体力を付けて、かなり克服してきたのだから。

しかし、こいつはイマイチ、体を鍛える努力をしてこなかったせいで、今尚、こんな調子なのだった。

「ダメだよ、ショーン君。あんまり長い時間、外にいちゃ。また体を壊しちゃうよ」

スノー医師がやってきて、注意する。

お得意さま、とも言えるほど付き合いのある、この患者を気遣っての注進だ。

へろへろになって地面に手と膝を突いているショーンだったが、スノー医師の姿を見るなり、ケツと舌を打つ。

「余計なお世話だね。俺は今日という日を心待ちにして、ここ数日大人しく引き籠ってたいんだ。少しくらい、ハメ外したって、いいだろうがよー！」

自分を心配してくれている人間に対して、ずいぶんな物言いだ。

と、初見の人なら思うかもしれない。

しかし、こんなやりとりは日常茶飯事だ。

「それだけ憎まれ口を叩けるなら。体のほうは今のところ、大丈夫そうかな？」

スノー医師も馴れたもので、お得意の愛想笑いを浮かべている。

本当に人がいいよな、この医者。俺なら一発、軽く殴っているところだ。

「体は大丈夫でも、命のほうは大問題っすよ！」

そんなスノー医師の横から槍を挟む、怖い顔をした女警官。

「何のために、町中の人形に関わる店を全て閉めさせていると思ってるんすか！ こんなに大々的に自宅の前に人形を飾って、自分が人形師だと周囲に触れ回る真似をするだなんて！

人形師狩りに殺してくれと言っているようなもんじゃないっすか！」

ナオミ警官が憤るのも、無理はない。

さっき話していた、人形師が人形師狩りから身を守るためにするべき防衛策と、全く逆の危険な行為を、とことんやっているわけだから。

町中の人形の露店や、人形師の工房での仕事が休業状態に陥っている理由は、警察がこれ以上、人形師狩りの犯行に付け入る隙を与えないためにとの配慮から、休むように指示を出しているからだ。

にもかかわらず。ショーンの今日の行いは、警察が行っている被害縮小のための努力を全て、粉々にぶち壊しているも同然だった。

「はあー？ その人形師狩りを、未だに捕まえられない、能なしの警官殿が何を言い出すかと思えば」

しかしショーンは、ナオミ警官の剣幕に物怖じする気配も、罪悪感を覚えている様子もない。

逆に対抗心満々で、突っかかる。

「ほーら、お嬢ちゃん。君が楽しみにしていた、お人形さんのたくさんいる町並みを台無しにしちゃった奴は、あの愛想のないお姉さんなんだよー。悪い人だねー。酷いことするよねー、まったく」

ナオミ警官を指さして、リノオールに陰口を叩き出す。

「警察を悪人呼ばわりとは、何事っすか!? いたいけな子供に間違っただ知識を植え付けないでもらいたいっす！」

実に幼稚な反抗だが、単純な女警官を怒らせるには、充分だったらしい。

続いて、ナオミ警官をじーっと見ていたリノオールが、「お姉さん、わるいひとー！」とか言っちゃったもんだから。

ナオミ警官はショックを受けて、滝のように涙を流す始末。

「ぬおおお、あんまりっす！ 自分は、一警官として町の平和を守るために日夜努力しているというのに。非協力的な態度の住民にことごとく妨害されて、拳句の果てに子供にまで暴言を吐かれるなんて……！」

「そりゃ、非協力的にもなるだろう。人形師はろくに仕事もできず商売あがったりだわ、町の経済状況は悪化の一途を辿るばかりだわ。それだけやってもなお、人形師狩りは捕まる心配すらないし。警察の信用なんて、ガタ落ちに決まってるじゃねーか。真にこの町のためを思うなら、とっとと殺人鬼を捕まえてみせるべきじゃないのかねえ」

肩をすく竦め、ショーンは半笑いで嫌味全開の言葉を放つ。

語尾に「ま、無理だろうけど」と付け足して。

ナオミ警官はキッとショーンを睨みつけた。

「素人は、気楽にものを言ってくれるっすね！ 人形師狩りがどこの誰なのかも、どこに潜んでいるのかも、さっぱり分からないから、こんなにも悪戦苦闘してるんじゃないっすか！」

「フッ、馬鹿め。見つけられないなら、向こうから出てくるように仕向ければいいだけだろうが。俺がただ工房を閉めさせられた腹癒せに、自分の家の前でこんな危険な営業を、おっぱじめたどでも思っているのか？」

意味深なショーンの言葉に、俺は驚いて視線を向ける。

「え、違うの？ 俺ずっと、反抗期バカのつまらん抵抗だと思ってた」

「ノイエ君。頼むから、俺のかっこいい解説に水を差すのは止めような。いまいいところだから！」

諭すように俺を一喝し、む噎せながら咳払いをし、気を取り直してショーンは続ける。

「全ては、俺が今まで、練りに練ってきた作戦の一環なのさ。家の前に大量の人形を並べたのは。人形師狩りをおびき出すためだ。これだけ目立ってりゃ、人形師狩りは俺の命を狙って、のこのことやってくるだろうからなあ」

「んなっ！ そ、それじゃあ、あなたは罠になるために、派手な振舞いをして犯人を待ち構えていたんですか!? そんな危険な！」

信じられないと言った様子のナオミ警官だが、ショーンは大本気だ。

俺が今朝から、ご近所の殺人事件という大事件にすら気付けなかったほどに忙しかったという理由も、朝早くから、この軒先に並んでいる人形達を家の中から運び出すために、こき使われていたからに他ならない。

「危険は承知。だがこうでもしなきゃ、事態は何も進まない。いつまでも命の危険に晒されるからと言って身を潜めているなんて、いい加減、飽きたんでな」

こんな傍若無人な人間でも、最近では警察の指示通り、人形作りを自粛して、家で大人しくしていたのだが。

そろそろ鬱憤が溜まってきたそうで、とにかくこの退屈な日々を何とかしたかったのだろう。

「分かるか、俺のこの苛立った気持ちだ。ここ数日の俺の日記はすごいぞー？ 人形師狩りと警察に対するグチでびっしりだ。ほれ、見てみろよ」

見せびらかすようなものではないだろうが。

ショーンは堂々たる表情で、懐から取り出した日記帳を広げ、ナオミ警官とスノー医師に中身を見せた。

しばらく固まったまま、ショーンの日記を読んでいた二人だったが、くわっと目を開いたのち、次第に表情を強張らせ、歪めていった。

何が書いてあったのか、俺には見えなかったが、彼女を怒らせるように仕向ける要素が、ふんだんに詰め込まれた内容だったのだろう。

ナオミ警官は怒りに満ちた大声を張り上げた。

「馬鹿馬鹿しい！ 何でもかんでも自分の思い通りになると思ったら大間違いっすよ！ 誰が何と言おうが、人形師狩りの捕獲は、我々警察組織の仕事っす！ 一介の人形師に出る幕なんてありません、いいかげん大人しくなさい!!」

「そうだよ、危険すぎる。今の現状をどうにかしたいという気持ちはとても良くわかるけれど、

警察に任せておくべきだよ」

スノー医師までが、少し怒り気味にそう言い放った。

その反応に、ショーンは不満そうに反論する。

「知ったことか。お前らの指図は受けねーよ。俺は俺の好きなようにするんだ。役立たずの警察に任せてたら、この町は滅んじゃう」

「キー！ 言ったっすね！ こっちだって、たとえ義務であろうと、あんたみたいな非協力的な町民を守るなんて願い下げっす！ そんなに死にたいなら、お好きにどうぞ！ あんたの身に何が起こったって、自分はぜーったい助けないっすからね！」

ついに堪忍袋の緒を切らしたナオミ警官は、目の前の人形師を見放す発言をはっきりと告げ、縁切りを宣言して踵を返す。

ナオミ警官達の背後では、さっきまで人形を見ていた客達や、騒ぎに気付いて集まってきた野次馬たちが様子を見守っていた。

その人達にも、ナオミ警官の怒声は飛ぶ。

「ほら、あなたたちも、散るっす！ いつまでもこんな場所にいたら、人形師狩りに襲われるかもしれないっすよ！」

彼女の大声に、人々は蜘蛛の子を散らして去って行った。

ナオミ警官は、肩をいからせ、早足で人々を追い立て、路地から姿を消した。

複雑な表情を浮かべつつ、スノー医師も後に続いた。

その背姿を見ながら、ショーンは腹立たしそうに舌を打つ。

「ったく、頭の固い警官だな。俺がうまい具合に人形師狩りを捕まえても、あいつの手柄にはしてやんないからな」

そう悪態をついて、側で立ち尽くしていた俺とリノオールに視線を向ける。

「今日はもう店じまいだ。ノイエ、お前も、その子を家だか宿だかまで、送ってやれ」

「ああ。でも、お前は一人で平気か？」

俺は、この傍若無人な兄を案じる。口は達者だが、実態は体力も腕力もないへ口へ口人間だ。

完全に一人になってしまったときに、万が一、人形師狩りにでも襲われたら。

あっという間に、その命は奪われるだろう。

俺のそんな危惧もお構いなしに、ショーンは軽いノリで、軽く手を振った。

「気にすんな。調子が戻ったら部屋に入るし。心配ない」

なので俺は頷き、リノオールに手を差し伸べる。

「じゃあ、そろそろ帰ろうか。リノオール」

「もうちょっと、お人形さん見たいよう」

ごねるリノオールを見下ろし、俺はそっと、口の前で人差し指を立てた。

首を傾げながらも、静かになった少女の手を引き、俺はコツコツと、レンガを靴の裏で踏み鳴らしてその場から去った。

## 人形師狩り

静寂が訪れた、町の裏通り。

侘しい風に吹かれて、一人で玄関先に腰を据える人形師――ショーン・アルペイト。

彼の他には、人の気配などまったく感じられない。

なのに、その場所には、ショーン以外に動くものの存在があった。

カタリと、そいつの動く音は風の音に掻き消されてしまうほど、微かなものだった。

だからショーンも、気づいた素振りはなく、ボーッと通りを眺めている。

その姿を視界に捉え、動き出した `そいつ、は、黒いフード付きのマントで全身を隠し、魔法使いみたいな出で立ちで、さも当然と言わんばかりに、人形たちの中に紛れこんで、じっとしていた。

怪しい人物は、人形を飾っていた台から、そろりと身を降ろす。

その顔には、無表情な人形の顔をした仮面。マントから突き出した、手袋を嵌めた手には、太く鋭い短剣が握られていた。

謎の人物は気配もなく、静かにショーンの背後に歩み寄る。

ショーンは相変わらず、通りを見ている。

謎の人物はそんな鈍そうな人形師の背中に、短剣の狙いを定めた。

切っ先を突き降ろそうとした、直前。

「残念だが、俺は殺せないぜ。殺人鬼」

突如。ショーンが横目に背後を見上げて、ニヤリと笑った。

驚いて怯む、マントの人物。

その一瞬の隙が、命取りとなった。

俺は背後から横風ぎに、握りしめた杖を、その人物の横腹に叩きつけた。

横へと吹き飛ぶ殺人鬼。

地面に倒れたその身体にもう一撃食らわせようと、俺は杖を振りかざす。それを<sup>しな</sup>姿やかな動き<sup>かわ</sup>で躲し、怪人は宙を舞う。

マントを<sup>ひるがえ</sup>翻しながら、ふわりと軽やかに、音もなく地面に着地する。

それと同時に聞こえてきた、複数の足音。

異質な珍入者を取り囲むようにその場へ集ったのは、さっき怒って帰って行ったはずのナオミ警官とスノー医師、そしてリノオールだった。

「こ、こいつが人形師狩り!？」

その姿を凝視するや否や、ナオミ警官は表情を恐怖に歪める。

「人形に化けて、紛れ込んでいたのか」

スノー医師も冷静を装っているが、こめかみからは汗が流れている。

「まあ、そういうわけだ。考えてもみろ。今までの被害者がなぜ、ことごとく無防備に、何の抵抗もせず、あっさりと殺されていたかを」

ショーンは楽しそうに笑い、人形師狩りを凝視する。

「殺される直前まで、全く気付かなかったからだよ。殺人鬼が自分のすぐ近くに、それも自分が作った人形たちの中に紛れ込んでいた、なんてな！」

人形師の家には、たいてい自分で作った人形を飾って保管しておく部屋が存在する。

その場所は、人形をこよなく愛する人形師にとっては、この世で最も安心できる空間なのだと、ショーンに聞いた記憶がある。

「人形師にとって一番心を許せる存在は、両親や恋人よりも、自分の作った悪意なき人形たちなんだよ。人形師狩りに命を狙われる身に陥ったとき、人形師たちは人形に囲まれることで、唯一の安らぎを得ていたに違いない。その心理を逆手にとって、お前はその安息の場所を地獄に変えたんだ。残酷な真似をしやがって」

相変わらず薄ら笑いを浮かべるショーンだったが、目は笑っていなかった。

人形師狩りに向けられる怒りや憤りが、灰色の瞳の中で刃物の如く、輝いて見えた。

「お前のやり口に気付いたから。俺は自分の作った人形たちを外に並べて、偽物をすぐ見つけられるようにして待ってたんだよ。この殺し方に絶対の自信を持っているはずのお前が、必ず人形に紛れて俺の命を狙ってくると確信してな！」

つまり。ショーンは犯行のからくりをいち早く見抜いて、逆に人形師狩りを罠にかけた、というわけだ。

「見知らぬ人形が一体増えていたのも確認済みだったし、俺はお前に気付かないふりをして、お前が動き出す時を待っていたってわけだ」

「だが」とショーンは続ける。

「お前も俺の周りに誰かがいたら、警戒して出てこないだろう？ だからひと芝居打って、周囲を無人にしてやったんだよ。動きやすくなっただろう？ うまく引っ掛かってくれて、助かったぜ」

さっき見せびらかしていたショーンの日記には、この一連の作戦内容と、それに協力を求める文面が記されていたのだった。

ナオミ警官とスノー医師は、その内容を見て、ショーンの台本通りに行動したにすぎない。

仲違いして帰ったフリをし、すこし遠くの路地に隠れて一部始終を見ていたわけだ。

もちろん、俺とリノオールも。

そのことに人形師狩りは気付かず、ショーンが一人きりになったと思って正体を現した、という寸法だ。

「へええ、こいつは驚いた」

表情のない、人形の顔をした真っ白な仮面。

その奥から発せられる、くぐもった不気味な声。

人形師狩りは肩を上下に揺らし、嘲るように笑っていた。

「人形師なんて、いい歳してお人形遊びに夢中になっている馬鹿共ばかりかと思っていたが、お前みたいに頭の切れる馬鹿も、いるんだなあ」

誉めているのか貶しているのか分からない贅辞を述べる人形師狩り。きっと後者だろうが。

「正体がばれちゃったのは、計算外だな。まだまだ殺さなきゃいけねえ人形師はたくさんいるってのに。これから殺り辛くなっちゃうぜ！」

仮面からその表情は読みとれないが、口調からして相当、ご立腹のご様子だ。

そんな犯罪者の感情を知ってか知らずか。たぶん知らなかったんだろうが。

勇気を振り絞って一歩、奴に近寄った者がいる。

ナオミ警官だった。

「やい、人形師狩り！ お前の目的は何なんすか！ こんなに次々と、人形師ばかりを狙って殺して、いったい、どうするつもりっすか！」

「ああ？ 目的なんて、説明するまでもねえ。ただ人形師どもが邪魔だから殺す。それだけだ」

殺気を込めて、人形師狩りはナオミ警官に向き直る。

ナオミ警官は一瞬怯んだが、恐怖に負けじと踏みとどまり、歯を食いしばっていた。

「人形師は人形を作る。作って作って作り続けて、やがては人形の魂をも作りあげる。そして魂

を育てて、いずれ「<sup>エニエント・ドール</sup>代行人形」を完成させてしまう。だから、その前に殺すのさ」

「代行人形……？」

その名を初めて聞いた様子<sup>の</sup>ナオミ警官は、頭に疑問符を浮かべている。

「何すか、それは？」

「人形の町に住んでいるくせに、そんなことも知らねえのか。なら教えてやるよ。代行人形ってのが、どういうものか」

人形師狩りは、自分の顔を覆う仮面に手を掛ける。

そして、勢いよく剥ぎ取った。

「ひいっ！ な、ななな……」

上擦った悲鳴を上げるナオミ警官。

彼女でなくても、そいつの顔は、驚愕し、恐怖するしかない代物だった。

仮面の下に隠れていた顔は、茹でた卵みたいにツルツルの表面に、簡単な目と口を描いただけという、単純で質素な表情をしていた。

大きく見開かれた目。裂けそうなほど開いた、笑った口。

あからさまに手書きだと分かる描き方が、余計に不気味さを醸し出している。

人形の仮面の下<sup>の</sup>素顔もまた、人形のそれだった。

この顔を見て、こいつを人間だと認識できる奴は、きっといないだろう。

「よーく目に焼き付けときな！ 俺様こそが、噂に名高い進化した人形、代行人形だ！」

「へええ。人形師狩りの正体は、命を持った人形だったってわけか」

その姿に、俺たちが驚愕している中。ショーんだけは楽しげに口笛を吹く。

「こりゃすげえ。どうりで、警察がどんなに頑張っても、手懸り一つ見つけれないわけだ」

確かに。根っから犯人を変質的な「人間」と決め込んでいた警察の捜査方法では、こいつの正

体に辿り着くなんて、不可能に近かっただろう。

そもそも人形が自分の意志で勝手に動くということ自体、一般人には想定外の出来事だ。

実際、ナオミ警官は突きつけられた真実が、理解の <sup>はんちゅう</sup> 範疇 を越えてしまったらしく、言葉を失って固まっている。

「だが。お前が人によって作られた代物だとすると、疑問点が出てくるなあ」

ショーンは人形師狩りを目利きするように観察し、ちょっと首を傾けて見せた。

「お前は、自分の意志で人形師狩りになったのか？ それとも、お前の作り主が、そうさせているのか？」

人形師狩りの体が、ピクリと動いた。

表情が全く変化しないから分かり辛いのが、その不気味な笑顔では表せない、不機嫌な感情を抱いている気がした。

「.....そんなこと、知ったって意味ないだろう」

人形師狩りは暑苦しい黒マントの中から、すっと手を出した。

白い手袋を嵌めたその手に握られている獲物は、鋭利な短刀。

こいつの得意とする武器なのだろう。

今までに、多くの人形師の血を吸ってきた刃。

そう考えると、背筋がゾクリとした。

「お前は今から、俺様に殺されるんだからな！」

短刀を構え、切っ先をショーンに向ける。

周りに他の人間がいても、もうお構いなしだ。

何といっても、この場に集まっている連中は、みんな足が竦んでしまって、ろくに動くことさえ、ままならないのだから。

自分の脅威となる存在は、この場にはいないと踏んだのだろう。そんな余裕の人形師狩りに対して、ショーンは顔色一つ変えない。

「余裕な態度じゃねえか、兄ちゃん。随分とお体が弱いみたいだが、そんなヨロヨロで、俺様から逃げきれるとでも思ってんのかい？」

挑発して、バカにした態度を見せる人形師狩りだったが、ショーンは怒るでもなく、奴を嘲笑ってみせる。

「おいおい、俺を見くびるんじゃないよ。逃げる必要がどこにある？俺がなぜ、今日という日を選んでお前を罠に嵌めた<sup>は</sup>とっているんだ？」

自信に満ち溢れたショーンの発言に、人形師狩りは少し怯んだ。

「どういう意味だ。今日なら、俺様を倒せる秘策がある。とでもいうのか？」

「その通りだ。普段の俺ならば、到底お前なんかには敵わなかつただろう。だが今日からは、ひと味違う！」

ショーンはバツと駆け出し、素早く俺の背後に逃げ隠れた。

「学校が長期休暇に入ったからな。俺の代わりに戦ってくれる弟が、ずっと家にいるんだもんね！ さあ行け、ノイエ！俺の剣となり、人形師狩りを倒せ！」

人形師狩りは、しばし呆然と立ち尽くしていたが、無性に腹が立ったらしく、怒鳴り散らした。

「他力本願かよ！情けない奴だな、お前！」

呆れも度を超すと、怒りに変わるらしい。

「へへん、何とでも言え！自力だろうが他力だろうが、お前を倒せりゃ何でもいいんだよ！」

俺の後ろという安全地帯に逃げ込んだ安心感からか、ショーンは言いたい放題の情けない本音暴露大会を始めた。

「ノイエを倒さなきゃ、俺を殺すなんて、夢のまた夢だぜ。だが、こいつは強え一ぞ、通ってる学校でも一、二を争う剣術使いだ。ナメてかかったら、痛い目みるぞ」

「……おもしれえじゃねえか。その自慢の弟もろとも、血祭りに上げてやらあ！」

人形師狩りの持つ短刀が、俺に向けられた。

ショーンの挑発は、うまく人形師狩りの狙いの的を切り替えさせた。

俺はすっと、杖を両手で構えた。

「ほう、やる気満々かい。兄貴思いの、いい弟だなあ。そいつを守るために、自ら殺人鬼の餌食になるってのか。人間のくせに、まるで見えない糸で、そいつに操られる人形みたいな奴だな」

嫌味のふんだんにこもった、人形師狩りの挑発。

それに乗ることもなく、俺は軽く受け流した。

「別に、こいつの言いなりになって、お前を倒そうとしてるわけじゃないさ。お互いに利害の一致があったから、ショーンの考えた作戦に協力した。それだけだ」

「利害だと？」

「ショーンは自由に創作活動をするために、お前を始末しなきゃならない」

「まあ、それは理屈の通った動機だな。だが、人形師でも何でもないお前が、なぜ俺様を倒したがる？」

「俺はずっと、`ある人、がこの町に戻ってくる時を待っている。その人はきっと、人形師になっているはずだ。だが、お前みたいな物騒な奴にこの町を彷徨<sup>うろつ</sup>かれちゃ、いつまでたっても怖くて戻ってこれないだろう？」

今でも脳裏をよぎる、あの女の子の姿、言葉。

――いつかまた、会いましょう。

その `いつか、を確実に作り出すため。

もう一度、あの優しい笑顔に再会するために。

「あの娘が安心して歩ける町を取り戻す。そのためにも、お前は邪魔なんだよ」

「ふうん。それがお前の戦う理由か。いいぜ。その夢、俺様がぶっ潰してやる。お前の心臓と一緒にな！」

音もなく地面から飛び上がり、踊りかかってくる人形師狩り。

俺は自分の腕と自分の武器を信じ、攻撃を待ち受ける！

――勝負は、一瞬でついた。

## 二章 彼女、との再会

### 武器を失くして

なぜだ。なぜ、こんなことになったんだ。

「オラオラ、さっきまでの威勢の良さは、どこに行ったんだ、小僧！」

めちゃくちゃ楽しそうに追いかけてくる、外道な人形師狩りから逃れるために、俺は今、レンガが織りなす口ノステラの町中を、がむしゃらに駆け抜けていた。

「さっきの決め台詞は、俺様の聞き間違いだったかねえ!? 誰が一、二を争う剣術の使い手だって? 一、二を争う逃げ足の早さ、の間違いじゃねーのか？」

あの野郎、調子に乗って、人を小馬鹿にしゃがって。

相手は熟練された剣の使い手というわけでは、決してなかった。

俺の腕ならば、十分に勝てる相手だったはずなのだ。

それなのに、今の俺は武器を失い、抵抗する術もなく、ひたすら奴から逃げ続けている。

なぜ、こんなことになったのか。

.....思い出すだけでも情けない。



戦いの始まった時。

踊りかかってきた人形師狩りが振り降ろした短刀は、俺の持っていた杖を、スパッと真っ二つにした。

俺は何度も瞬きを繰り返す。困惑、動揺。

いったい、どうなっているんだ？

これが俺の普段から愛用している仕込み杖——中に細い刃の仕込まれた長剣——だったならば、こんなに簡単に折れるはずがないのに。

慌てて杖の切り口を凝視する。

中はただの木であり、刃物が嵌<sup>はま</sup>っている痕跡なんて、これっぽっちもなかった。

「おいション、どうなってんだ!? 俺の杖じゃねーぞ、これ！」

俺は確かに、ションの座っていた場所の側に杖を置いて、買い物に出た。

そして間違いなく、その置いておいた杖を掴んで、人形師狩りに奇襲を仕掛けたはずなのに。

なぜ、その杖が偽物にすり替わっているんだ。

「んんっ!? あれー? それは俺が人形に持たせるために作った、ただの杖 何でこんなところに……はあっ! ま、まさか……」

そう言った後、顔中から汗を拭き出させ、ションはしばらく考える——フリをしていたに違いない。

俺に対して何と言いつてもすれば良いものかと、それを必死に脳内から捻出している顔だった。

だって、原因なんて、それほど考え込まなくても、はっきり分かっているのだから。

「……人形を飾り付けるときに、間違えたんだなあ。お前の武器は、この人形たちの誰かが持っているんだ」

俺はバツと、並べられた人形を見上げる。

黒いスーツを着こなした、紳士な姿の人形が何体も何体も飾られているが、その全てが、似たような杖を握っていた。

人形たちは非常に爽やかに、「さあ、どれが君の杖か当ててごらん? あっはっは」とか言わんばかりの笑顔を浮かべている。

「探せるか、こんなに沢山あるのに! どうしてくれんだよ、この状況！」

「すまん! これは俺の致命的なミスだあっ！」

ろくな言い訳も思いつかなかっただけで、素直に許しを乞うてきたが、吃驚するほど許す気に

なれなかった。

だが、ここで言い合っている間も、事態が好転しそうにはない。

もう既に、取り返しのつかないところまで、事態は悪化しているのだから。

俺は体中から汗を流しながら、前を見る。不気味な笑顔を浮かべた人形師狩りが、短刀の腹で自分の掌を叩きながら、こっちを見ていた。

「どうした、何かトラブルか？」

俺たちの動揺に気付いて、気を遣って待っていた。

こいつ、ひょっとしていい奴？

「あの、ちょっとタイムいいかな？ 用事を思い出して。すぐに済むから」

「嫌だね。何だか知らんが、戦う気がねーなら、さっさと死ね」

俺は、相手が待っている隙に自分の杖を探そうと思ったのだが、人形師狩りはそう吐き捨てて、切りかかってきた。

俺は紙一重で攻撃を躲す。

やっぱり、前言撤回。

こいつ、全っ然、いい奴じゃなかった！

「ちょっと、待って！ 相手は丸腰の人間なんだぞ、そんな無防備な相手に襲いかかるなんて、卑怯だろうが！」

俺が抗議すると、人形師狩りは堂々と言い放った。

「お前は俺様を、誰だと思っているんだ？ 間抜けな丸腰の人形師どもを、卑怯な手を使いまくって殺してきた殺人鬼だぜ？」

「そうでした！」

誇りもプライドも持っていないような奴に、良心を期待する台詞で訴えかけても、無駄だった。

人形師狩りは、再び俺に剣を向けてくる。

「武器を持たねえ奴をいびるのは大好きだし、俺様の十八番だ。小僧、お前はひと思いにや殺らねえぜ？　じっくり、いたぶってやる」

「くっ、悪趣味な奴だな。恥知らず、人でなしめ！」

「そうとも。俺様は人間の道德倫理には囚われない。だって人形なんだから！」

俺は舌を打つ。

こいつはもう、誰のペースに乗るつもりもないようだ。

かといって、丸腰では戦っても勝てる見込みがない。

「ション、この場は任せたぞ！」

俺はションにそう指示を送り、駆け出した。

「ノイエ！　どうする気だ!？」

「逃げながら考える！」

言い捨てると返事も待たずに、俺は路地の向こうに走った。

ここには、ションや役に立たない医者や警官、加えて無関係な女の子までいる。

下手に暴れては、周囲に被害が及ぶかもしれない。今はこの場の安全確保が優先だ。

幸か不幸か、今のこいつの狙いは、完全に俺一人みたいだし。俺がこの場を離れれば、奴は俺について来るだろう。

そうすれば、少なくとも俺がやられても、一時的にこの場所を守ることができる。時間を稼いでいる間に、ションは非難するなり、新しい打開策を考えるなり、できるだろう。

元凶はションとは言え、俺が人形師狩りを仕止められなかったのは自業自得なのだから。その失態のせいで周りに迷惑はかけられない。

落とし前は、自分自身でつけないと。

俺はひとまず、逃げる動作に集中することにした。

「鬼ごっこか！　久しぶりに血が<sup>たぎ</sup>滾るぜえ！」

滾る血なんて、流れていないだろうに。

なんてツッコむ暇もなく、人形師狩りは、俺を追って走ってくる。

俺は全速力で、町の中心部へと駆けていった。

● ○ ●

そんな経緯で、今もこうして町中を逃げ回っているわけだ。

過去の失敗を悔いている暇はない。

とにかく今は、あの人形師狩りを何とかする方法を探さなくては。

と思うものの、正直、何も浮かんでこない。

ただ、追いつかれないように奴を撒きながら、複雑な路地を駆け回るだけで精一杯だ。

しかし、相手は人形。おそらく、疲労なんてものとは全く縁のない存在と思われる。

このまま走り続けても、先にバテるのは俺だろう。

実際、もう既に息が上がってきている。

俺は虚弱体質を改善するために体力はつけてきたが、持久力のほうは、いまいち自信がない。

「オラ小僧！ どこに行きやがった！ 逃げても無駄だぜ、すぐ捕まえてやるからなあ！」

どこかから聞こえてくる、人形師狩りの声。

そう遠くはない。

このままでは追いつかれる。

もつれそうな足を何とか前に押し進め、狭い暗い路地に行く。

すると、突然。眼前に立ちはだかる人間の姿が見えた。

俺は驚いて立ち止まる。

相手も驚いた顔で立ち止まった。

灰色がかった少し長めの黒い髪を、後ろで一つに束ねている。黒いズボン。同色のベストの下は、腕まくりした白いシャツ。

濃い灰色の瞳をこちらに向けている、長身の男。

つーか、俺じゃねえか。

「何だ、鏡かよ。脅かしやがって」

大きく息を吐いた。

目の前には、俺の身長よりも大きな鏡が、少し斜めを向いた角度で立てかけられていた。

鏡の真正面、ぶつかる寸前の場所に来るまで、その存在に気付かないとは。

さらに、鏡に映った自分自身の姿に驚くほど、余裕がなくなっているとは。

非常に情けない有様だ。

俺は少し、<sup>あとずさ</sup>後退った。

鏡の角度の加減だろう。俺の姿は鏡の中から消えた。

この路地は、直角に曲がっている。

両方向から人が歩いてきたときに、ぶつかってしまう事故がよく発生するため、防止策として大きな鏡が、角のところへ斜めに張り付けてあるのだった。

この鏡があれば、自分の進行方向から誰かが近付いてくると、相手の姿がはっきり見えるし、向こうからも近付く俺の姿が見える。

もしも、向こう側から人形師狩りがやって来れば、こちらはすぐに気付いて逃げられる。でも、向こうからも俺の姿は丸見えだ。逆に背後から来られでもしたら、全く分からないだろう。

鏡なんてあっても、今のこの状況、はっきり言って、何の役にも立たない。

兎にも角にも、奴に見つかる前に逃げないと。

重い体を何とか動かそうとした時。

突如、俺の背後から、頭を挟み込むように、二本の白い手が、にゅーっと伸びてきた。

そして、一本の手が、がしっと俺の肩を掴み、もう一本の手が、口を塞いだ。

「なっ!？」

俺はものすごい勢いで、後ろに引っ張られる。

体力が尽きかけていたせいで、まったく抵抗できなかった。

「見つけたぞお、小僧一」

それとほぼ同時に、すぐ側で聞こえる、人形師狩りの嬉しそうな、不気味な声。

見つかった。いや、捕まった!？」

「手間取らせやがってえ。覚悟しやがれえ!!」

逃げきれなかった。

何も抵抗できずに。俺は人形師狩りに殺されるのか。

成すがままに後ろへ引きずられながら、俺は恐怖のあまり、堅く目を閉じた。

## 迷宮のレイン

死、とは、非常に冷たいものだ。

命を失った人間の体は冷たくなり、堅くなり、そして重くなる。

だが、俺の体は、まだ温かかった。

人形師狩りに捕らえられ、あの短刀で命を奪われたと、そう思っていたのだが……。

ガチャン、バリン。

激しく響く、何かが割れる音が路地に響く。

「ちっ。何でえ、鏡かよ！」

同時に、忌々しげな声が辺りにこだまする。

人形師狩りの声だ。

察するに、奴は路地の向こう側から俺を見つけて、殺そうとした。

だが、それが鏡に映った虚像であるという事実に、割るまで気付かなかったのだろう。

だとすると、俺は人形師狩りの毒牙にかかったわけでは、なさそうだが。

もし違うのなら――。

背後から俺を捕まえ、引っ張った白い手は、いったい誰のものなんだ？

自分が死んでいないという事実が、俺の閉じかけた意識を現実に戻す。

記憶がはっきりしてくると同時に、俺は今、自分の体が地面に横たわっていることに気付いた。

その上半身が、何か温かい、柔らかいものに包まれている感触にも。

驚いて起きあがろうとするが、何かにかっちりと体を押さえつけられていて、うまく動かせない。

かろうじて、首は上下に動く。

頭を上にあげ、その目に映ったものを見て、心臓が飛び出しそうになった。

俺の体を押さえつけているものは、白い、細い腕。

その腕の持ち主は、上に「美」をつけなければ非常に失礼に当たるのではないかと思われるほど、可憐な少女だった。

紫の光沢を放つ、長い黒髪がさらりと俺の顔にかかる。

年齢は俺と同じくらいだろうか。十六、七歳の少女。

何の因果か、その場に座り込んでいた彼女の腕に、俺は強く抱きしめられていたのだった。

香水だろうか。優しい香りがする。衣服を隔てているとはいえ、その柔らかい体に押しつけられた俺は、全身から火を噴きそうだった。

あくまで偶然だ。偶然なんだけれども。俺の顔がうまい具合に彼女の胸の谷間に押し込まれてしまっている。

どうしたもんだろうか、これは。

普通に考えると、一刻も早くこの体制から立ち退かなくてはならないはずなのだが。体が思うように動かない。

少女も、俺をしっかり抱いて離さない。

何が何だか分からず困惑していると、どこか遠くで、鐘の鳴る音が聞こえた。

よく響く鈍い音が、数回。

町に定刻を知らせる、鐘の音だ。

それに反応してか、美少女はピクリと体を震わせる。

加えて更に、俺を抱きしめる腕に力を込めてくる。

「何でえ、もう時間切れかよ。……小僧！ 聞こえているな!? まだ近くにいるんだろう!? 命拾いたな、次に会ったときは、絶対に殺すからなあ！」

人形師狩りは捨て台詞を吐き、どこかへと去っていったらしかった。

しばらくして、完全に敵がいなくなったと、本能的に感じ始めた頃。

ようやく、美少女は俺を解放してくれた。

俺は反射的にバツと体を起こし、彼女から距離を置く。

そうして、初めて気付く。

その場所が、鏡のあった通路から少し後ろへ戻ったところにある、別の狭い路地だと。

「良かったね。あいつ、行っちゃったみたい」

落ち着いた、物静かな声。

俺は思わず、少女を凝視する。

紺色の長いスカートと、白い清楚なブラウスを身に纏った、可憐な少女だった。

とても大人びていて、知的な雰囲気醸し出している。

「あ、あの。ひょっとして、俺のことを助けて……？」

俺は訊ねた。声がすっかり上擦ってしまった。

彼女は俺に向かって、にっこりと微笑んだ。

「路地の陰で、ずっとあなたが追いかけている様子を見ていたの。このままじゃ捕まってしまうと思ったから。……迷惑だったかしら」

「いやいや、とんでもない！ おかげで助かったよ、ありがとう」

顔の熱もとれ、緊張も興奮もだいぶ収まってきた。

冷静さを取り戻し、俺は彼女に礼を述べる。

いろいろと、予想外な出来事から解放されて、安心したのも束の間。

美少女は四つん這いになり、ずっと俺の側に寄ってきて、じーっと俺の顔を見つめ始めた。

宝石のような紫の瞳が、鋭く俺を射る。

顔と顔が、くっつきそうなほど近い。

また、俺の顔に高熱が宿る。

「な、何か……？」

なんとか声を絞り出す。

すると彼女は「やっぱり」と、小さく囁いた。

「あたし、すごく小さい頃に、あなたと会った記憶があるわ。とっても久しぶり」

「え……？」

俺は動揺する。いつ、どこでこんな美少女と、お近付きになったというのだろう。

全然、記憶がないんだが。

「……覚えてなくても、無理はないわね。たった一度、偶然会っただけで、お互いに名乗りもしなかったもの。でもあたし、覚えているの。あなたの雰囲気、あの時と、ちっとも変わってないわ」

寂しそうに、美少女は笑う。

俺に全く心当たりがない様子なのを、少し残念がっているみたいだ。

その顔を見ると、ものすごく罪悪感がこみ上げてくる。

これはもう、嘘をついてでも久しぶり、とか言っておいたほうがいいんだろうか。

なんて悶々と考えながら、俯きがちな彼女を見る。

しかし、ふと俺は、その白い可憐な顔から、幼い頃の懐かしい面影を見出した気がした。

「……まさか、レインか？」

俺は無意識に問うていた。

ほとんど期待に近い疑惑だったのだが、彼女は驚いた表情で俺を再度、凝視した。

「あたし、あなたに名乗ったかしら？」

「いや。でも昔、連れの人がそう呼んでいたから、知ってた。覚えていた、のほうがいいかな」

その反応からすると、やっぱり彼女の名前は――。

「本当に、本当にレインなんだな？」

少女は頷いた。

その瞬間、俺はとてつもない感動を覚えた。

「帰ってきたんだな！ 俺もずっと、君に会いたかったんだ！」

思わず、俺は彼女――レインの肩を掴んでいた。

俺の勢いに、レインは目を <sup>しばた</sup>瞬かせて、驚愕していた。

でもすぐに順応した様子で、少し頬を赤らめて、可憐に笑った。

「思い出してくれたのね。嬉しいわ」

「いつ、この町に戻ってきたんだ？」

「昨日、帰ってきたばかりなの。お祖父さまに呼ばれてね」

七年前。

レインを呼び戻し、連れていった人物が祖父だったのだろう。

おぼろげな影しか、記憶に残っていないが、偉大な人形師だと言っていた。

「本当は、家から出るなって言われてたんだけど。久しぶりに町の中が見たくて、こっそり出てきちゃったの」

「一人で？」

「ううん。連れがいたんだけどね、途中ではぐれちゃって。小さな女の子を見なかった？ 赤い髪と目をしているの」

その特徴、俺には大いに心当たりがあった。

「その子、リノオールって名前じゃないか？」

「知っているの？」

「ああ。今、うちにいるよ」

「あなたの家に？ .....リノオールは、あなたに懐いているの？」

突然の問いかけに、俺は少し考える。

「そうだな。嫌われてはいないと思うけれど.....。素直な、いい子だったし」

なぜそんな質問をするのか、よく分からなかったが、レインは「そう」と、少し物思いに耽<sup>ふけ</sup>った、でも嬉しそうな表情を浮かべていた。

「迎えに行くわ。あなたの家に、お邪魔してもいい？」

「もちろん。歓迎するよ。俺たちが初めて会った場所だしな」

俺は立ち上がり、レインの手を引いて起こした。

「ありがとう。……そうだ、あなたの名前、まだ聞いてなかったわ。教えてくれる？」

柔らかな微笑で、レインは尋ねてくる。

拒む理由はない。即答した。

「ノイエ・アルペイトだ。よろしく」

「じゃあ、あたしも改めて。レイン・セーヴィラです。よろしくね」

そして、堅く握手を交わした。

## 敗北と別れ

レインと話したいことは、山ほどあった。

でも何から話せばいいか分からなかったのも、とりあえずレインと再会するきっかけとなった、人形師狩りの起こした事件について、歩きながら話した。

レインが安全にこの町に戻ってこられるようにするために、果敢にも人形師狩り退治に挑んだ、なんて理由は、思いっきり追いかけられ、おまけに彼女に助けられた手前、格好悪くて口には出せなかったが。

「――そんな経緯で、人形師狩りから逃げ回っていたの？ 災難だったわね」

「まあ、色々な不幸が重なってね。本当なら、もっと効率よく戦えたんだけどさ」

「でも、その不幸のおかげで、あたしはあなたに会えたんだもの。あの殺人鬼に、感謝しているわ。不謹慎かもしれないけど」

「いいや。俺も同感だな」

なんて、いい感じに会話を弾ませながら、複雑に入り組んだ路地を正確に抜け、俺は再び、自宅のある通りへと戻ってきた。

逃げ出す前と変わらず、家の前には大量の人形が飾ってあり、その側で見覚えのある面子が、輪になっていた。

俺たちが歩み寄ると、いち早く、スノー医師が俺の帰還を喜んでくれた。

「やあ、ノイエ君。無事だったんだね、良かった」

「人形師狩りは、どうなった？」

続いて、石段に腰掛けていたショーンが尋ねてくる。

「時報の鐘が鳴ったら、時間切れとか言って、どっかに逃げちまったよ」

「そうか。逃がしたのは惜しいが、被害が出なくて何よりだ。まあ、終わりよければ全てよし、だな！」

はっはっは、とショーンは笑う。

俺はその胸ぐらを掴む。

「お前にだけは、言われたくねえな！ 誰のせいで、俺が無様に追いかけて回されなきゃならなかったと思ってんだよ！」

「落ち着こう、ノイエ君！ もう済んだ話じゃないか、俺も反省してるじゃないか！ ところで、こちらはどなた？」

憤る俺をうまく受け流そうと、ショーンはレインに視線を向ける。

まだ言ってやりたい文句は山ほどあったが、やむなく、その流れに乗ってやり、彼女を紹介した。

出会った経緯を、簡潔に話して聞かせる。

もちろん、助けられた時の具体的な状況なんて、口が裂けても言えないから、内緒だが。

「――まあ、そういうわけで。危ないところを助けてくれた、レイン・セーヴィラさんだ」

「おお。そりゃ、どうも！ 弟がお世話になって。兄のショーン・アルペイトです」

ショーンは嬉しそうに、彼女に握手を求める。

レインは少しはにかみながら、手を差し出した。

「セーヴィラって言うと、ひょっとしてあの人形師、エニルダさんの？」

そう尋ねたのは、スノー医師だ。レインは頷く。

「ええ。エニルダは、あたしの祖父です」

「やっぱりそうか。僕は彼の主治医をしているものですから。時々、お話は聞いてましたよ」

「そうでしたか。祖父がお世話に……」

レインはスノー医師とも握手を交わす。

「ほおお、あの伝説の人形師の孫ねえ」

ショーンは感心する。対して俺は、首を傾げる。

「レインの爺さんって、そんなにすごい人なのか？」

「まあ、人形学を世間に提唱して、人形師の礎を築いたって点では、すごいだろうな」

と、ショーンが珍しく、他人を好評価している。

続けてスノー医師が、説明を補足する。

「世界で初めて、<sup>エージェント・ドール</sup> 代行人形 を作った偉人だよ。今はその代行人形を従えて、一人で静かに、人形の魂の研究をしながら暮らしているんだ」

「へええ、そりゃすごい」

そう言えば、レインは昔から、その爺さんを尊敬していると言っていたな。

祖父の技術を受け継ぐために、人形師になるんだとか。

そんなレインは興味深そうに、辺りに飾られた人形を見回していた。

「あなたも人形師なんですね。とても素敵な人形たち」

「いやいや、それほどでも、ありますよ」

褒められて喜ぶこの人形師は、謙虚という言葉を知らない。

「さて。では、弟君も無事帰還したことですし。人形師狩りの脅威も、一応は去ったということで」

そこで話を切り替えるように、ナオミ警官が口を挟んだ。

警察官として、俺の安否を案じて、帰りを待っていてくれたらしいが。

本心では、何だかじっとしてられなくてウズウズしている、といった空気を醸し出していた。

「自分はこれより、警察署へ戻って、人形師狩り対策の作戦会議っす！ 奴の正体が人形、という大きな手がかりを得たんすからね。もはや逮捕も、時間の問題っすよ！」

そう言う理由で、早く帰りたかったみたいだ。

今日の出来事は大きな収穫だったろうから、意気込みの凄まじさも無理はない。

「俺のお陰だぜ、感謝しろよ」

ボソリとショーンに恩着せがましく言われ、ナオミ警官は一瞬怯む。

「ぐっ。重大な情報の提供は感謝するっす！ けど金輪際、あんな危険な真似はしないこと。奴が捕まるまでは、玄関先も片付けて、大人しくしているっすよ！」

そう言い残し、ものすごい勢いでナオミ警官は去っていった。

その後ろ姿は、先刻にも増して生き生きして見えた。

「警察にとって、人形師狩りが人間ではないという事実は、大きな収穫だっただろうね。これで、今までよりもっと、捜査が進むんじゃないかな」

スノー医師は警察の今後の活躍に期待を寄せている様子だ。

対して、ショーンは肩を竦める。

「甘いな。人形師狩りは、ただの人形じゃないぞ。代行人形だ」

代行人形――。

その言葉を、強調するように吐き出す。

「代行人形とは、人間の「代わり」を務めさせるために作られた、魂を持つ人形のこと。魂の成長具合、媒体となる体の完成度次第では、人間の群の中に混じっていても、誰も気がつかない存在にもなり得る。人形師狩りだって、変装して顔を隠し、人混みに紛れちまえば、人形だなんて分からなくなるだろう。だから相手の正体を知ったところで、何も進展しないと思うぜ」

「そうかな？ でもやっぱり、人形は人形でしょう。いくら人に紛れても、周囲はその違和感に気付くんじゃないかな」

ショーの説明に納得がいかないのか、スノー医師は反論する。

「そう単純には、いかないと思うわ。人は人の中に紛れる代行人形の存在に、きっと気付けない」

二人の間に口を挟んだのは、レインだった。

「なぜ、そう思うんです？」

不思議そうに視線を向けるスノー医師に、レインは楽しそうに笑い返した。

「あなた方だって、気付いていないではありませんか」

それと同時に、人形たちの隙間から飛び出してきた、小さな陰。

レインの探していた連れの女の子、リノオールだ。

どこに行っていたのかと思いきや、人形たちの中で隠れて遊んでいたのか。

「あっ、レインだー！」

レインの姿を見つけたリノオールは、嬉しそうに彼女へ駆け寄る。

そして、レインのスカートに抱きつく。

「心配したのよ、リノオール。急にいなくなるから」

レインは叱るが、あまり怒っている風に感じない。

リノオールも怒られているとは思っていないのか、笑顔で「ごめんなさい」と返した。

「あなたの妹さんですか？」

スノー医師の質問。

そう訊きたくなるのも、無理はない。

並んでみると、二人の面影は、とてもよく似ていた。

俺も今、気付いたんだが、リノールの姿は、初めて出会った幼い頃のレインに、そっくりだ。

レインは笑って首を横に振り、

「いいえ。この子は、あたしが生み出したんです」

俺はピクリと体を震わせた。

「生み出したって、まさか子持ち ちょっと待て、父親は誰……」

聞き捨てならない言葉に、俺は我を忘れてレインに食ってかかった。

「落ち着けノイエ！ 年齢的に無理がある」

しかしショーに首根っこを掴まれ、未遂に終わった。

それを見たレインはまた、楽しそうに笑う。

「面白いことを考えるのね、ノイエ君って。リノールは、あたしが作った代行人形よ。小さいときからずっと育ててきた、大切な存在」

愛おしそうな瞳で、レインはリノールを見つめる。

俺の中に、過去の記憶が鮮明に蘇る。

「あー！ そうか、あの時連れていた、命を持った人形。確か、リノールって……」

そう、俺と初めて出会った時、レインが抱きしめていた人形の名だ。ちょうどその日が、リノールに人格が生まれた日なのだと、嬉しそうに話していた様子を、思い出した。

「あの人形が、こんな姿になるのか。すごいな……」

俺は、目の前の小さな女の子を、まじまじと見つめた。

「成長したリノールに合わせて、新しく体を作って、魂を移したの。子供の頃のあたしを模してね」

「こいつは、やべえな。全く気付かなかった。やるね、あんた」

ショーも頭を掻きながら、表情を引き攣らせていた。

いっばしの人形師でありながら、リノオールの正体に気付けなかった事実が、かなりショックだったのだろう。

言われて触れてみると、リノオールは冷たいし、呼吸をしていない。

だが、表情は自在に変わるし、動きも驚くほど柔軟で、自然だ。

これは、その存在を熟知していなければ、正体を暴くことは至難の業に違いない。

レインは周りの驚く様子に満足したらしく、微笑んでいた。

「こんな風に、媒体の完成度如何では、代行人形は人間の中に溶け込んで生活することができません。長く一緒にいれば僅かな違和感に気付くかもしれませんが、一見では見分けがつかないでしょう？」

「確かに、そのようですね」

反論の余地はない。スノー医師も、納得して認めた。

「リノオールが、とてもお世話になったみたいで。感謝します」

頭を下げるレイン。リノオールも真似をして、ペコリとお辞儀した。

「いやなに。いい子でいましたよ、とっても。人形を愛でてくれる者なら、人間だろうが人形だろうが、いつでも大歓迎です」

ショーンは笑う。

その歓待の言葉に安心したレインは、ゆっくり頭を上げる。

だが、その表情からは笑顔が消え、堅い、真剣なものになっていた。

「あの、アルペイトさん」

「ショーンさんで結構ですよ？」

「では、ショーンさん。お世話になりついでに、あたしの願いを聞いてもらえませんか？」

「お願い？ どういった？」

「……リノオールを、引き取っていただきたいのです」

突然の申し出に、ショーンも俺も、驚いて表情を歪める。

「この人形たちを見れば分かります。ショーンさんは立派な人形師。心から人形を愛せる、素晴らしい方だと。……あなたなら、リノオールを大切にしてくれると確信しました」

俺とショーンは、顔を見合わせる。

なぜ急に、レインがそんな頼みを切り出したのか。

全く分からず、互いに困惑していた。

しばらくして、ゆっくりと、ショーンが言葉を返す。

「……代行人形は、ただの人形とは違う。物みたいに簡単に受け渡しをしてもいい存在ではないと、あなたもよく分かっているはずでしょう？」

リノオールを手放すことは、いわば親が子供を棄てるのと同じ意味を持つ。

レインにとって、リノオールは今までの生涯をかけて作り上げてきた、大切な人形のはずだ。

その所有を放棄するなんて――。

彼女は、決してそんな状況を望んで言っているのではないだろう。それは、後悔が滲み出ている、強ばった顔からも明らかだった。

だが、本気であることも間違いないらしく、強い決意が、綺麗な瞳の中で輝いている。

「もちろん、承知の上です。でも。あたしにはもう、リノオールを守る力も、時間もないのです。一刻も早く、この子だけでも安全に暮らせる場所を探さないで」

押し迫った口調。辛そうな表情。

レインとリノオールが、身の危険に晒されている――とでも言いたいのだろうか。

いった、何が彼女を、こんなにも追いつめているのだろう。

その理由を、尋ねてみようとした矢先。

「レインお嬢様、お迎えにあがりました」

突如、そいつは気配も足音もなく、この場に現れた。

俺達は驚いて、一斉に声のしたほうに向き直る。

細身で長身の体に、黒い燕尾服を纏い、絹糸みたいな真っ白の長髪を、後ろで束ねている。非常に整った顔立ちの、若い男が立っていた。

「君は、クラウンマーチ？ なぜこんなところに」

スノー医師が、その男に声を掛けた。

クラウンマーチと呼ばれた、変わった名前の男は、医師を見て丁寧にお辞儀をする。  
「スノー先生。最近、我が主の体調が思わしくありません。また往診をお願いいたします」

「あ、ああ、分かったよ」

「知り合いか？ 先生」

俺が尋ねると、スノー医師は頷いた。

「……彼は、クラウンマーチ。さっき話していた、人形師エニルダさんが世界で初めて作った代行人形だ。作り主であるエニルダさんの、身の回りの世話を全てしているんだよ」

「こいつが、代行人形……？」

リノオール同様、一見ただけでは、人形とは思えない。

完璧な外見を呈していた。

ショーンも目を細めて、じっとその人形を観察している。

「僕はすぐにでも行けるよ。クラウンマーチ」

「いいえ。今日は我が主も色々と用事がございます。明日の朝、いらしてください」

鞆を手に、歩み寄ろうとするスノー医師を、クラウンマーチは制止する。

その滑らかな動作や言葉遣いは、非常に場慣れした使用人のものだが、顔はまったくの無表情だ。

声色も、どこか機械的で冷たい印象を受けた。

「本日は、先生をお呼びに参上したのではないのです。この方を連れて帰ることが、私の使命」

クラウンマーチはずっと、レインに手を差し伸べる。

「さあ、レインお嬢様——」

「触らないで！」

レインは拒絶を露にし、相手の手を振り払った。

「迎えなんて、頼んでいないわ、クラウンマーチ。あたしは自分の足でここへ来た。帰るときも自分で帰るわ。あなたはお祖父さまの僕<sup>しもべ</sup>なのだから、お祖父さまの面倒だけ見ていればいいのよ！」

激情を露わにして、レインは声を張り上げる。

今までの落ち着いた姿からは想像できないほど、取り乱している。

しかし、クラウンマーチは、憤るレインに対しても冷徹な態度を崩さない。

「そのお祖父さまからの、ご命令でございます。今すぐに、あなたを連れ戻すようにと」

奴がそう言った直後だった。

レインの表情が苦痛に歪み、体が前のめりに崩れた。

原因は、一目瞭然だった。

彼女のみぞおちに、クラウンマーチの拳が深く突き刺さっていた。

クラウンマーチは、気を失ったレインを抱き上げ、物みたいに乱雑に肩に担ぐ。

「お前、レインに何をしゃがる！」

その光景が、俺の中に凄まじい怒気を沸き上がらせた。

「主の命令です。レインお嬢様を屋敷へ連れ帰れ。死にさえしなければ、手段は問わないと」

冷ややかな声で淡々と述べる。クラウンマーチは誰にともなく頭を下げ、去ろうとした。

「令嬢がご迷惑をおかけしました。急ぎますので、これにて失礼」

「待てこの野郎！ レインを離せ！」

背を見せるクラウンマーチに、俺は殴りかかる。

しかし、その拳は、あっさりと躲された。

そして隙の生じた俺の後頭部を、クラウンマーチが空いた手で掴む。

そのまま、強く下へと押された。

俺の額が勢いよく、地面に叩きつけられる。

赤い煉瓦が砕け、顔がめり込む。

頭蓋骨が割れるかと思うほどの激痛が走り、そのまま俺は、地面に倒れ込んだ。

「弱い犬ほどよく吠える。まったく、五月蠅くてかないませんね」

「あう……。お兄ちゃ……」

消え入りそうな声が側で聞こえた。

リノオールが俺を心配して、近付いてきたらしい。

「何をしているのです、出来損ないが！ あなたも帰るのです。私の手を煩わせるな」

その優しい女の子に、クラウンマーチは罵声を浴びせる。

リノオールは、しばらくその場で立ち尽くし、泣きそうな声を上げ続けていた。

「こいつは大丈夫だ。ご主人様と一緒に行きな」

ショーンが宥めたため、決心して、クラウンマーチに従って歩きだした。

二体の人形の足音が、遠くなる。

やがて聞こえなくなり、通りに静寂が訪れた。

俺は地面に突っ伏したまま、怒りに体を震わせていた。

「ちくしょう、レイン……。やっと、会えたのに……」

みすみす、彼女を連れて行かれてしまった。

額に受けた痛みや衝撃よりも、何もできなかったという事実のほうが、俺に辛く、苦痛をもたらしていた。

## 三章 エニルダ邸潜入

### 作戦会議

「んがー！ 腹立つ！ あの人形も腹立つ、俺も腹立つ！ お前にも腹が立つー!!」

時はその日の夕刻。小さな自宅の狭い室内にて。

昼飯にと買ってきた、好物の極厚ハムの挟まったサンドイッチを<sup>むさぼ</sup>貪りながら、俺はいきり立っていた。

せっかく人形師狩りをやっつけてから、気分よく食べようと思っていたのに、今となっては、まったく味わえない。

既にパンが堅くなってパッサパサ。青物もしなびてしまって、もう最悪だ。

ふざけた人形野郎の暴拳にも、ふがない俺にも。

とにかく、何に対しても怒りが治まらない。

なのでその怒りを、とりあえず近場にいたショーンにぶつけていた。

「病人に当たるな！ 俺あ、熱があるんだよ、患者の前では静かにしろい！」

当のショーンは現在、長時間の野外活動がたたって、疲れが溜まって熱を出し、頭に氷を載せてベッドに寝込んでいる始末だった。

「ノイエ君、少し落ち着きなさい。額の怪我は大したことないとは言え、頭に血を上らせるのは良くないよ」

俺の額に包帯を巻いて手当てした後、ずっと倒れたショーンを看病しているスノー医師が注意してきた。

医師に諭され、俺は少し冷静さを取り戻す。

しかし、頭はいっこうに冷える気配がない。

「何なんだよ、あのクラウンマーチとか言う奴は！ やりたい放題やっていきやがって！」

「いやあ。普段は彼も非常に温厚な、いい人形なんだけどねえ」

「いい奴が、女の子のみぞおちに一撃食らわせるかよ!？」

「そ、それはまあ。そうかもしれないけど……」

「レインはあいつのせいで、身の危険を感じているんじゃないのか？ だから、ショーンにリノオールを頼むなんて言いだしたんだよ」

あの時の、必死なレインの顔が頭から離れない。

彼女はきっと、あいつに家で、酷い目に遭わされているんだ。

それでリノオールだけでも無事なところへ逃がそうと……。

なんて、いじらしい。

同時に、その元凶になっている奴が憎らしくて仕方がない。

「何とか助けないと。俺がレインを守るんだ、絶対に」

「お前、やけにあの娘に入れ込んでるじゃん。一目惚れか？」

熱で苦しいくせに、野次馬根性丸出しでショーンはからかってくる。

「前に話しただろう。七年前に、家の前で偶然会って、俺に生きる道っていうか、すべきことを教えてくれた女の子がいたって」

「ああ。確か、俺が高熱出して死にかかった時だったっけ？ じゃあ、あの娘がそうなのか」

俺は頷く。

「レインは悩んでいた俺を救ってくれた。だから今度は、俺が助ける番だ」

決意を口に出し、自分自身に活を入れる。

「スノー先生、エニルダの家ってのは、どこにあるんだ？」

すぐにでもその家に殴り込んで、レインを連れ出したい気持ちでいっぱいだ。

「行っても無駄だと思うよ。エニルダ氏も、人形師だ。ここ一連の人形師狩りの事件を警戒して、屋敷の警備が厳重になっている」

スノー医師は首を横に振る。

「クラウンマーチが、常に屋敷を見回っているんだ。門前にはいつも監視の人形が置かれていて、人の気配を察知すると、すぐに彼に知らせるんだよ。屋敷を訪れた人間の善し悪しを判断するのは、クラウンマーチだ。僕は医者——招かれる人間だから平気だけれど、君はきっと不審者扱いされて、門前払いだ」

「また、あいつに邪魔されるのか……」

あの、澄ました顔が思い出されて、腹が立つ。

だが、一度は無様にやられたものの、その程度で俺が敗北を認めると思ったら大間違いだ。

「だったら殴り込んででも、レインを助け出すまでだ」

俺は側の壁に立てかけていた仕込み杖を手を取った。

手当をしてもらった後に、外の人形の山から探し出して取り戻した、正真正銘、本物の俺の武器だ。

ぐっと、拳を固める。掌の中に、杖と一緒に決意も握り込んだ。

「彼女を救うためなら、俺はどんな障害だって乗り越えてみせる。たとえ目の前に毒の川が立ち塞がろうとも、泳いで渡る覚悟はできてんだよ！」

「おお、カッコいいこと言うねー。ノイエ君ってば」

ションとスノー医師は、意気込む俺に拍手を送りつつも、白けた笑いを浮かべていた。

「俺だったら、橋架けて渡るけどね。泳ぐだなんて、原始的な」

「僕は、船を使うかな。毒に中<sup>あ</sup>てられちゃ、元も子もないし」

二人して、人を小馬鹿にした発言を……。

嫌な大人の見本みたいな奴らだ。俺は怒りで肩をプルプル震わせた。

「人が真剣に言ってんのに、横からつまらん茶々を入れるなー！」

「ごめんごめん。でも、落ち着いて。暴力行使はよくない」

平和主義者、スノー医師は俺を宥めてくる。

「ともかく明日、エニルダさんの往診に行くから、僕が様子を見てくるよ。彼女の状態もちゃんと確認して、君に伝えるから。それでいいでしょう？」

その案に難色を示したのは、俺ではなくショーンだった。

「何だと、てめー！　ここで倒れて苦しんでる患者がいるってのに、ほっぽりだして別の奴のところに行く気か！」

「君はいつものことだし、安静にしていればすぐによくなるでしょう。僕には他の患者さんも、たくさんいるからね、君一人にずっと構ってられないんだよ」

「酷いお言葉！　そうやって何人もの患者を手込めにしては捨ててきたんだな！　悪徳医者め！　俺はもうお前なしじゃ、いられない体になっちまってんだぞ、責任とれー！」

「人が聞いたら誤解を招くような言い方をするのは、やめてくれないかな!？」

滅茶苦茶に怒鳴り散らすショーンに、温厚なスノー医師も、いささか憤り気味だ。

俺は、やかましく喚くショーンの額に、新しい氷袋を載っける。

ショーンの体温で、氷がじゅわっと、一気に溶けた。

「熱が上がって錯乱しているだけだ。冷やせば元に戻る」

言った通り、熱が引くとともに、ショーンは大人しくなった。

「スノー先生。先生の助手として、俺も連れて行って貰えないか？」

落ち着いたところで、俺も冷静に考え、もう一度スノー医師に頼む。

どうしても、納得がいかないのだ。このまま人任せにして、待つなんて。

「レインが無事にいるのか、自分の目で、ちゃんと確かめたいんだよ。迷惑はかけないから、頼む！」

必死で頭を下げるが、スノー医師の反応は<sup>がらひ</sup>芳しくない。

「いや、それも難しいね。クラウンマーチは、エニルダ氏が招いた人間以外は、断固として歓迎しない。うちの病院の助手ですら、入らせてもらえなかったんだ、無理だろうね」

やっぱり駄目なのか。

心が折れそうになった時。

「だったら、こっそり忍び込めばいいだろうがよ」

我に返ったショーンが放つ、突飛な言葉。

俺は驚いてショーンを見る。

「忍び込むって……。どうやって」

「ほれ、あれ使え」

ショーンが指さしたものは、部屋の隅に置かれた、黒い大きな箱型の鞆。

「人形を運ぶときに使うトランクだ。大人ひとりくらい、余裕で入れる」

つまりは、俺がトランクに入って、スノー医師にこっそり屋敷内へ運んでもらえばいい、と言う方法らしいが。

「でもこれ、バレたら逃げ場はないぞ。いきなりこんな物を持ち込んだら、誰だって怪しむだろうし」

良い案だとは思ったが、開けて中を見られた瞬間、全て終わり。

大きな難点は否めない。

「そこは運次第……と言いたいところだが、少し工夫すればいい」

ショーンは俺たちを近くに呼び寄せ、耳元でゴニョゴニョと考えた作戦を話してくる。

その全貌を聞いて、俺は俄然、乗り気になった。

「いいそれ！ 絶対に成功するぞ！」

「だろう？ 俺の計画は完璧だからな！」

「ほ、本気かい？ 君たち……」

逆にスノー医師は、とっても不安そうだった。

「それしか方法がないんだ。協力してくれ、スノー先生」

「お前の演技次第だ。期待してるぜ」

俺たちの熱気に包まれた視線に根負けして、スノー医師は諦め混じりの息を吐きつつ、しぶしぶ承諾した。

## 欺き潜入

翌朝。

ガラガラと重そうに、大きなトランクを押しながら、スノー医師はレンガの道に行く。

辿り着いた場所は、町の東の外れにある、大きな屋敷。

家の大きさもさながら、高い塀に囲まれた中庭、その敷地の広さにも驚かされる。

その屋敷が、人形師エニルダの住まいだ。

庭への入り口には黒い鉄格子の大きな門扉があり、その前に、一人の男が立っている。

その男の前まで、スノー医師はトランクを転がしていった。

「ようこそいらっしゃいました、スノー先生」

「おはよう、クラウンマーチ。お邪魔するよ」

来客を待ち構えていた、憎らしい エージェント・ドール 代行人形 クラウンマーチ は、スノー医師を歓迎して門を開いた。

スノー医師がこの家を訪問するときは、いつもクラウンマーチが門前に立っていて、その間は、物音に敏感な見張りの人形は機能していないのだという。

見張り用の人形には、客と不審者の区別がつかないからだそうだ。大事な客を不快にさせる行

為を、この人形は許さない。

接客の仕方もされ方も、お互い慣れたもので、スノー医師は何事もなく、堂々と中へ入ろうと歩きだした。

だが、突如としてクラウンマーチに呼び止められる。

「……先生、お待ちください。先日と、お荷物の大きさが違うようですが」

ギクッとして、スノー医師は立ち止まる。

「ああ、えっとね。いつも使っている鞆が壊れちゃって。手元にこの旅行用のトランクしかなかったもんだから」

「重いでしょう。中までお持ちしましょうか」

「いや、底に車輪がついてるんだ。転がしていくから平気だよ。ここまでだって、一人で持ってきたんだしね」

はははと笑い、何とか受け流そうとする。

しかし、クラウンマーチはトランクが気になるらしく、なかなか引き下がらない。

「それにしても、大きいですね。……人間が一人くらい、簡単に入れてしまえそうなほど」

「ええっ！ ……そっ、そうかな!? いやいや、そんなものは決して入ってないよー？ いつもの鞆の中身を入れ替えてきただけだから。医療道具が少し、入ってるだけなんだからね!? もうスカスカだよ、スカスカ！」

「先生。顔が汗だくですが、どうかなさいましたか」

「もう夏だからね！ いやー！ 今朝は特に暑いなー！ 君はいいねー、汗掻かなくて！」

「先生。何か私に、隠し事でもなさっているのではありませんか？」

「何を言うんだい、君と僕との間に隠し事なんてあるわけないだろう。あは、あはははは……はは」

止めの嘘くさい笑い。

これによって、クラウンマーチの疑心は最高潮に達してしまった。

「……この荷物、中をあらためさせていただいて、よろしいですか」

「えっ！ そ、そんなことしなくたって。怪しいものなんて、何も入ってないよ 本当だってば！」

必死でトランクを庇うスノー医師。

だから、否定の方法が、既に怪しいんだってば。

「ならば、見ても構わないでしょう。主の身の安全をお守りすることが、私の使命なのです。もし、この中に不埒な輩でも入っていたならば、主が危険に晒されるかもしれません。少しでも不安な要素は、取り除かなくては」

「……やむを得ないな。いいよ、それなら、気が済むまで見るといい」

スノー医師は諦めた様子で、投げやりにトランクを差し出した。

俺の緊張は最高潮に達し、激しく心臓が高鳴る。

「では、失礼いたしますー」

淡々とした動作で、クラウンマーチはトランクを開く。

中は聴診器や注射器など、簡単な医療道具が入っているだけで、ほとんど空に近かった。

「どうだい、これで満足かな？」

「……確かに、いつものお荷物しか入っていませんね」

さらりと返す、クラウンマーチ。

相変わらず無表情だったが、当てが外れて、少し困惑しているようにも思えた。

「ほらね、言ったとおりだろう？ 僕はあまり、自分の荷物を人前に晒すのは好きじゃないんだ。今度からは、そんなに疑わないでおくれよ」

「はい、申し訳ありませんでした。それでは、中へお入りください」

トランクを閉め直し、スノー医師に返すと、クラウンマーチは恭しく彼を門の向こうへ招き入れた。



引き続き、トランクをゴロゴロ転がしながら、スノー医師はエニルダ邸の玄関に向かって、美しい花の咲き乱れる庭園の中をゆく。

医師の顔は、げっそり頬がこけて、汗だくだった。

これからが診察はじめだというのに、まるで一日が終わったのかと思うほど、疲れきった顔。

しかし、その顔からは汗だけでなく、難解な試練を乗り越えた達成感も浮かび上がっていた。

道中。立ち止まったスノー医師はハンカチを取り出し、顔を流れる汗を拭く。

一息ついた後、ゆっくり歩きながら俺のほうに目配せし、一瞬、片目を閉じて見せた。

「幸運を祈る」と言う、スノー医師の親切な合図だ。

俺は庭に敷き詰められた草花の茂みに身を潜めつつ、小さく頷いて合図を返した。

ショーンの提案した作戦はこうだ。

スノー医師にわざと、人の入っていきそうなトランクを持って行かせる。

クラウンマーチが怪しみ、トランクに釘付けになっている間に、俺はクラウンマーチの背後からこっそり、エニルダ邸の敷地へ入り込む。

見張りの人形はわずかな気配にも反応してしまうそうだが、クラウンマーチはそこまで感度の高い人形じゃないらしい。

だからこっそり忍び込んでも、気付かれない可能性が高かった。

奴の裏をかき、隙を狙って中に入るには、奴だけが門前に立っている、その時が最大のチャンスだったのだ。

トランクは奴の注意を引かせるための、ただのダミーだ。

もちろんそれだけではなく、俺が屋敷から脱出する際、中に入ってスノー医師にお持ち帰りいただくためにも必要になる。

一度、中身を確認したトランクならば、帰りは何が入っていようと怪しまれることはない、というのが、ショーンの読みだった。

作戦通り、あのバカ人形は、俺たちの策略にはまり、わずかな医療道具しか入っていないスカスカのトランクに注意を奪われ、あっさり俺の進入を許した。

気持ちいいほど、見事に奴を出し抜いてやったぜ。

ざまあみろ。バーカバーカ。

スノー医師が庭を通過し、家の中へ入っていく姿を見届けたクラウンマーチは門を閉める。見張りの人形を門前に設置すると、スノー医師の後を追って家の中へと入っていった。

俺の存在には、相変わらず気付いていない。

奴の姿が視界から消えた後、俺は気配をなるべく消し、身を屈めて茂った草に隠れながら、建物のほうへ壁伝いに進んだ。

エニルダ邸の裏手に回る。

向かって一番右端にある部屋が、スノー医師がいつも荷物を置かせてもらっている場所なのだそう。

医師がその部屋の窓を開けておいてくれたので、難なく入り込めた。

人様の家に窓からお邪魔するような人間に成り下がってしまうとは。

今更ながら、個人的にかなり良心の呵責を感じてしまう。

だが、俺は自分の罪悪感を一気に振り払った。

俺は悪事を働くわけではない。

ほんのちょっと、レインが無事にいるか、確認するだけ。

本当に、それだけなのだから。

普通の手順では家の中に入れてもらえないんだから、仕方がない。悪いのは、あの人形野郎だ。

と、自分自身に言い聞かせながら、室内に降り立ち、辺りを見渡す。

そこは小さな物置部屋だった。

白い壁、真四角の空間。作りかけの人形の部品が、山積みになっている。

スノー医師のトランクは、その一角に置いてあった。

足音もさせずに、静かに歩みを進めながら、俺はそっと部屋を出る。

物置部屋の外は、長い廊下だった。

赤い絨毯が一直線に敷かれた、薄暗いが高貴さの漂う廊下。

両方の壁際に、一定の間隔を開けてずらりと並んで立っている人影に、一瞬驚く。

それは非常に精巧に作られた、蠟人形だった。

かつてあったという、大陸全土を巻き込んだ戦争。その時代の、兵士を模したものらしい。

古めかしい装飾の衣服を身にまとい、<sup>くさりかたびら</sup>鎖帷子や防具を身につけている。

腕や足には白銀の籠手に脛当て。頭には兜。手には槍や剣を握って、番人に相応しい風貌で、生真面目に直立している。

古風でお洒落な趣味なのだろうけれど、そいつらが等間隔に並んだ姿は、俺の目にはかなり不気味な光景に映った。

スノー医師からの情報によると、この部屋を出て左に向かった先が、この家の主人エニルダの寝室だそうだ。

それ以外、他に部屋はないのだと言う。

なので、レインの部屋があるとしたら、ここより右の通路の先だろう。

俺はその方角へと歩きだした。

しかし、ほんの数歩、進んだだけのその場所で、思わず飛び上がりそうな恐怖体験をすることになる。

突然、背後から、何かが俺の足にぶつかり、しがみついてきたのだ。

「――!!」

辛うじて悲鳴をあげることは根性で押し止めたが、心臓はものすごい勢いで高鳴っている。

恐る恐る、俺は体をよじって背後の足元を見た。

そして、足に張り付いているものを見て、脱力した。

「おにいちゃん！」

「り、リノオール……！」

そこにいたのは、赤い髪の子供の女の子。

レインの作った代行人形、リノオールだった。

「びっくりさせるなよ。心臓が止まるかと思ったぞ」

俺から離れたリノオールは、じっと、向き合った俺の顔を見上げていた。

突然、室内に現れた俺を訝しんでいるのかと思いきや、そうでもなさそうだ。

しばらくすると、泣きそうな顔をして、聞いてくる。

「おにいちゃん、あたま大丈夫？」

俺の額に巻かれた包帯が、痛々しかったようだ。

頭に手を当て、笑って見せる。

「ああ、見た目ほど酷くないんだ。大丈夫だよ」

それでも、リノオールはまだ、心配そうだ。

「あのね。あたまを強く打つとね、バカになるってレインが言ってたよ。おにいちゃんのおたま、平気？」

「そんなの平気平気。これ以上バカになりようがないから」

自分で言って、少し惨めになった。頭が悪いのは事実だが。

つーか心配するところが違う気が。まあいいけどさ。

「おにいちゃん、レインに会いに来たの？」

「うん。あんな別れ方したから、心配でさ」

レインは無事なのだろうか。あれからちゃんと目を覚ましたのか。

殴られた箇所に後遺症はないか、とか、リノオールから色々と聞き出したかったのだが。そんな暇はなかった。

「じゃあ、行こ！」

急に俺の手を掴み、リノオールは走り出す。

「えっ、ちょっと、どこへ!？」

「レインのお部屋！」

彼女は俺をレインのいる部屋に連れていってくれるらしい。

現在のありのままのレインを、俺自身の目で見て、確かめろということなのか。

俺は手を引かれるがまま、リノオールの向かう先へついて行った。

## 秘密のかくれんぼ

薄暗い、不気味な廊下を突き進み、二、三ほど扉の前を通り過ぎた。

その先に姿を見せたドアの前で、リノオールは立ち止まる。

どうやらこの部屋が、レインの私室らしい。

だが、お忍びでこっそり侵入した俺が、いきなり女の子の部屋を訪れるなんて、どう考えてもまずいだろう。

「レイン、部屋にいるのか？」

小声で尋ねると、リノオールは、ふるふると首を横に振る。

「ううん。レインは、おじいさまに呼ばれて、いないの」

そうか、いないのか。

残念なような、安心したような。妙な気持ちだ。

「すぐに戻ってくるよ。中に入ろう」

「そ、そうだな。ちょっと、見るだけなら……いいよな」

別に下心があったわけじゃないんだ。

ただの、好奇心というか冒険心というか。

やっぱり気になるじゃないか。

好きな女の子が、どんなところで生活しているのか。とか。

と言うわけで。

その先はそれほど躊躇もせず、俺はリノオールと共に、レインの部屋への扉を開け放った。

中は結構、広かった。

中央に木製の丸い机と椅子が二脚、置いてある。

部屋の端には、薄い布の天蓋に覆われたベッド。

反対の端には、一つの壁面を覆い尽くすくらい大きなクローゼットが置かれていて、その上部や周辺に小さな子供くらいの大きさの、たくさんの人形が敷き詰めて飾られていた。

「綺麗な人形だなー。全部、レインが作ったのかな」

「ちがうよ。レインが小さかったときに、おじいさまがレインのために作ったんだよ」

なるほど。

彼女がこの町から出ていくよりも前から、ずっとここにある人形なのか。

そう思えないほど、綺麗に掃除や手入れがされている。

この人形たちが作られた頃のレインは、きっと祖父にも可愛がられて、大切にされていたに違いない。

今は、どうなのだろう？

あんな尋常でない連れ帰り方を見せられては、とても現在、この屋敷で厚遇を受けているとは思えなかった。

「おじいさまのご用事、終わったかな。レイン呼んでくる？ おにいちゃんのこと教える？」

リノオールはそわそわしていた。

レインが戻ってくる時を、心待ちにしているらしい。

だが、俺は長居をするわけにはいかない。

「いや。それより、お願いがあるんだけど」

俺はしゃがみ込み、彼女と目線を合わせる。

「なあに？」

「俺がここに来たってことは、内緒にしてほしいんだ」

「ないしょ？」

リノオールは首を傾げる。

俺は大きく頷き、人差し指を立てた。

「レインには絶対に、言わないでほしいんだよ。俺と君との秘密だ」

「うん、ひみつ！」

素直に、かつ嬉しそうに、リノオールは頷いてくれた。

直接、姿を見ることはできなかったが、レインは無事みたいだ。

少なくとも寝たきりになっていたり、動けないような状態ではない。

これ以上長居すると、進入がばれてしまうかもしれないし、今は引こう。

こっそりトランクに隠れて、スノー医師が帰るのを待つことにしよう。

そう決めたのも束の間。

こちらへ向かって、誰かが廊下を歩いてくる足跡が。

「あ、レインが戻ってきた」

リノオールの声に反応し、俺は慌てて立ち上がる。

廊下に出れば、レインと鉢合わせる。このままでは、こっそり部屋から抜け出せない。

「やべっ。どっかに、隠れないと……」

とりあえず、レインに見つからないように、しばらく身を隠すしかない。

「かくれんぼ？ リノオールもやる！」

隣で一緒になって、リノオールがはしゃいでいる。

それに構う余裕もなく、俺は辺りを見渡す。

隠れられるところと言ったら……。

やっぱり、あそこしかないか。

俺とリノオールは、一目散にクローゼットのほうに駆けだした。

● ○ ●

ガチャリと、扉の開く音。

少し確保できた細い隙間から、俺は部屋の様子を見る。

ドアの前には、レインが立っていた。

その立ち姿は、昨日とほとんど変わったところもなく、至って元気そうだったので安心した。

レインは小さく息を吐き、中央の机の側にやってくる。

腕に鼻を擦り付け、衣服の臭いを嗅ぎだす。

「……お祖父さまの部屋に行くと、いつも薬臭くなるわね」

そう呟いて。

流暢な動きで、首元に結ばれたリボンを解き出す。

「――！」

俺は全身を硬直させて固まった。

さらにレインは、ブラウスのボタンを上から順に、外し始める。

服を脱ごうとしていた。着替えをするつもりだ。

もちろん、ここは彼女の自室なのだし。服を着替えたって、何もおかしくはない。

おかしいのは、その部屋に忍んで、コソコソとその様子を見ている俺なんだが。

これはまずいんじゃないだろうか。万が一、この状況で見つかりでもしたら、俺は覗きの変態野郎確定だ。

せめて見ないようにしようと努めるものの、どうしても気になって彼女から目が離せない、と言う体たらく。

あっという間に、レインはブラウスもスカートも脱ぎ捨て、白く薄い、ワンピース状の下着姿になっていた。

俺は高鳴る心臓の音を押しえるのに必死だった。

色白の鎖骨が、胸元が、太股が眩しすぎる。

さらにその格好のまま、クローゼットの方へ歩いてきた。

それも当然と言えば当然だ。着替えの新しい服は、クローゼットの中にあるわけだし。

だが、こちらへ来られると、俺的に非常にまずい。

うまく隠れているつもりだが、クローゼットを開けてゴソゴソとその場を漁られると、気配で見つかる可能性が高い。

とにかく見つからないように願いながら、俺はじっと息を殺し、できるだけ体を小さくして強張らせた。

レインが、クローゼットの扉を開く。

「……きゃあ!!」

直後、小さく悲鳴を上げた。

心臓が飛び上がりそうだった。

しかし、見つかったのは俺ではない。

扉を開くと同時に、レインめがけて飛びかかったものがいた。リノオールだ。

「……リノオール!? こんなところで何をやってるの！」

「かくれんぼ! えへへー、見つかったー！」

「かくれんぼ？」

「おにいちゃんと、やってたのー！」

「お兄ちゃんって、……ノイエ君のこと？」

さっき内緒って約束したのに。早くもバラしおって!

頭のいい彼女のことだから、感付くんじゃないかと冷や冷やしたが。

「……そっか、前に一緒に遊んでもらって、覚えたのね」

どうやら勘違いをしてくれたみたいで、危機一髪、助かった。

開いたクローゼットから新しい衣服を取り出し、素早く着替えたレインは、一息ついて椅子に腰掛ける。

リノオールも、もう一つの椅子に、ぴよこんと座った。

「……リノオールは、ノイエ君やショーンさんのこと、好き？」

おもむろに、そんな話を切り出す。

「うん! おにいちゃんたち、すきー! でも、レインのほうが、もっとすき！」

リノオールの返事を聞き、レインは微笑みながら、遠い目をする。

「良い人たちだったな……。でも優しすぎて、少し怖かった」

ふと、レインは呟く。

その言葉の意味が、俺にはよく分からなかった。

「どうしてノイエ君は、あんなに上手な嘘が吐けるのかしら？」

嘘……？

何だろう、それは。

俺がいつ、レインに嘘を吐いたって言うんだ。

こんな状況でなければ、問い質してみるところだが、今はその真相には近付けそうもない。

しばらくして、ふらりとレインは立ち上がった。部屋の外に出ていこうとしたようだったが、リノオールが笑いながら呼び止める。

「レイン、まだだよ」

「まだって、何が？」

「かくれんぼ。まだおにいちゃん、見つかってないよ」

うわあ、せっかく勘違いしてくれていたのに。

思いっきり具体的な発言をしおって、このちびっ子め。

「それって、どういう？ ……まさか、この屋敷にいるの!？」

レインも流石に、感付いてしまった。

かなり驚いている様子だった。

リノオールはレインに対して、人差し指を立てて見せた。

「ないしょ、ひみつ！」

秘密にするのが遅いわ！

レインは少し立ち尽くして、何かを考え込んでいた。

「クラウンマーチに見つかっては、大変だわ」

慌てたように、部屋の外へと駆けていった。リノオールも、ついていく。

部屋は無人となった。俺はとりあえず、安堵の息を吐く。

俺はクローゼットの上部と天井との隙間――たくさん並べられた人形の奥から、顔を覗かせた。

人形の背後に埋もれながら、横たわって隠れていたのだった。

人形に紛れて隠れるなんて、人形師狩りみたいでなんだか抵抗があったが、背に腹は代えられなかった。

しかし、俺の侵入がバレてしまった以上、長居はできない。

早くトランクの中に隠れて、スノー医師に連れ出してもらわなくては。

俺はクローゼットから飛び降り、素早くレインの部屋を後にした。

## 四章 裏切りと脱出

神を<sup>ほうとく</sup>冒瀆せし者たち

何事もなく、スノー医師のトランクが置いてある部屋に到着。

とりあえず彼が戻ってくるまで、無造作に積み上げられたガラクタの中に身を潜めることにした。

しばらく待っていると、診察を終えたスノー医師がやってきた。

彼は滑り込むように部屋に入り、挙動不審に辺りを見渡す。

そして小声で、声を掛けてきた。

「……ノイエ君、いるかい？」

俺が返事をしようとした矢先。突然、部屋の中に別の声が響いた。

「スノー先生」

「うわあっ！ な、なんだい？ クラウンマーチ」

スノー医師は飛び上がって驚く。その背後にいたのは、あの憎らしい代行人形だ。

「お帰りの前に、ご主人様がぜひ、見せたいものがあると」

クラウンマーチは、車椅子を押していた。

腰掛けている人物は、寝間着姿の老人。

枯れ枝みたいに、しわしわで痩せ細っているが、白い髪と髭がとても達者な男だった。

この男が、レインの祖父であり、世界で初めて「代行人形<sup>エーゼンハント・ドール</sup>」を作ったという天才人形師。

エニルダ・セーヴィラか。

いまや人形師が必須とする唯一無二の学問、人形学を世に提示し、人間が人形の魂を作れるという可能性を実証し、現実のものとした。

業界では超有名な、まさに奇跡の人だ。

見た目は老いぼれて見る影もないが、いかにも偉人らしい貫禄<sup>かんろく</sup>を、全身から放っている。

こいつらの登場は、最悪のタイミングだった。

俺とスノー医師は、表情に焦りを浮かべる。

もし、二人がこのまま、医師が家を出るまで見送る、といった流れにでもなってしまったら。

取り残された俺は、自力で屋敷を出なくてはならなくなる。

そんな、難解な展開の予感がした。

「すまないね、手を止めさせてしまっ」

そんな俺の苦悩なんて知る由もなく、しわがれた声で、エニルダはスノー医師に語りかける。

スノー医師も、焦りを悟られないように愛想笑いで返す。

「いいえ、エニルダさん。それで、僕に見せたいものとは……？」

エニルダが懐から、すっと取り出したもの。

小さな瓶だった。

中には、ぼんやりと青白い、炎のようなものがゆらめいている。

「これは……」

スノー医師の目つきが変わった。

「昨日。警察の遺体置き場へ赴いて、とってきた」

エニルダの、髭に覆われた口元が緩んだ気がした。

「人形師狩りが殺した、人形師の魂だよ」

俺は眉を顰める。

人形師狩りが殺した人形師。

うちのご近所さん、ラドクリフ氏のことじゃないのか。

その遺体から、魂を抜き取った？ 何のために。

というか、できるのか、そんな真似が。仮にできたとしても、そんなの、やってはいけない行為ではないのか。

レインが昔、言っていた。

この世のあらゆるものには魂が宿っているが、自然が作り出した魂を、人間の手でどうにかしようという考えは、禁じられた所行なのだと。

人の魂だって、例外ではない。

「ただ殺して棄て置くだけなんて、もったいないからね。この魂にも、わしの人形作りの材料になってもらおうと思ってな」

その言葉に、耳を疑う。

とてもじゃないが、信じられない。

高名なる人形師の放つものでは、決してあるまじき妄言だ。

「あなたの作る代行人形に込められている魂は、全て人間のものですからね」

そんな人形師に、ニヤリと笑いかける白衣の男。

突然の変貌。

俺は目さえも疑った。

あのスノー医師が、こんなにも邪悪な笑い方をするなんて――。

「君も知っての通り、わしは人形師として腕を振るうと同時に、人形を進化させる研究を続けてきた。そして人形に宿る魂を育て、人間同様に成長させることが可能だとする学問、人形学を世

に提唱した」

エニルダは、物静かに語る。

その手が震えているのは、老いのせいだけだろうか。

「だが。それはわしにとっては、ほんの絵空事だったのだよ。世間に注目されたいがために作り出した、空想の物語だったのだ。人形に魂なんて宿るはずがない。まして、それを人間同然に育てるなんて、実際には不可能だった。事実、わしには自らの手で人形に魂を宿らせるなんて、一度たりともできなかったのだから」

「でも実際、人形に魂は存在したみたいですね。そして、その魂を元に、最近の人形師たちは、本格的に本物の代行人形を作り始めている」

スノー医師が口を挟むと、エニルダは苛立った声を上げた。

「人形学を、学会で発表など、しなければよかった。どいつもこいつも、しつこく人形の進化を追いかめ、わしにできなかったことを、わしの広めた知識で成し遂げようとする。実に、けしからん話だ」

エニルダの手が、さらに震える。

これは、もはや老いからくるものではない。

怒りが、この老人の手を震わせるのだろう。

「わしが導き出した人形学の理論を利用するだけの、二番煎じ以下の連中に先を越されるなど、あってはならぬ。人形の魂を生み出すもの、育てようとするものを、わしは決して許しはしない」

「それであなたは、人形師狩りを作って、町中の人形師を殺して回るように命じたのでしたね」

「見せしめだよ。これ以上、わしを越えようなどと、考えさせないためのね」

俺は幻滅し、脱力した。

人形師狩りを使って、町の人形師を殺して回っていた真犯人は、レインの爺さんだったのか。

正直に言うと、驚愕はそれほどなかった。

やっぱりそうなのか。

という感想が、多くを占めていたせいもある。

● ○ ●

実は、エニルダ邸に来る前。

その可能性を示唆して、俺に助言をしてくれた人間がいた。

シヨーンだ。

「あの人形師狩りが、自分の意志で行動しているとは思えない。間違いなく、何者かの指示によって動かされているんだ。そいつこそが間違いなく、この事件の黒幕であり、人形師狩りを作った人間だ。俺は、人形師エニルダが怪しいと睨んでいる」

人形師狩りが時報の鐘の音とともに身を引いた点からも、裏で誰かが奴の行動を制限し、操っている事実は否定できなかった。

その「誰か」とは、エニルダではないかと、シヨーンは疑っていた。

クラウンマーチみたいな暴力的な人形を作る人形師ならば、人形師狩りみたいなおぞましい殺人鬼だって、生み出してしまえるのではないか。

「だから、エニルダには気をつけろよ。下手に首を突っ込むと、お前も命を落としかねないぞ」

言われた通りの現実に直面してしまった。

人形師の勘とは、侮れないものだ。

● ○ ●

「人形師狩りを作り出せたことは、本当に運のいい偶然だった。奴のおかげで、自分の手を汚さずとも、邪魔な人形師達を消していった」

エニルダは、さも楽しそうに笑う。

こいつが殺人鬼の黒幕だと言う事実だけならば、俺も納得して素直に受け入れられただろうが……。

「わしがいつまでも、奴という<sup>みの</sup>蓑の中で安全に隠れていられるのは、君のおかげだよ、スノー君。君が奴の犯行の痕跡を、検屍の度に抹消してくれるお陰で、限りなく完全犯罪に近い形で、事件を起こすことができる」

「お役に立てて光栄ですよ、エニルダさん。ですが、僕が隠蔽<sup>いんぺい</sup>する必要など、ほとんどありませんでした。人形師狩りの犯行は、いつも完璧でしたから」

「そうとも、完璧だ。人形師狩りとわしとの接点が全くない以上、この町の警察ごときに、わしの計画の全貌は、絶対に見破れまい」

なんだ、この会話は。

まさか、スノー医師まで、エニルダとグルだっていうのか

そこまでは、ショーンでさえ予測がつかなかった事実だ。

「ですが最近、人形師狩りの正体に気付き、罠を仕掛けてきた輩<sup>やから</sup>がいますね。いちおう目を付けてはいますが、放っておくのは危険かと」

「ほう。そのような優秀な人間が、この町にいるのかね」

「その彼——ショーン・アルペイト君もまた、人形師なのですよ。人形師狩りは彼の策略にはまり、彼の殺害に失敗してしまいました。そのせいで警察にも、人形師狩りが人形であるという事実や、殺しの目的が知られてしまったのです」

スノー医師は、昨日の出来事を密告する。

この男、善良な医者フリをして、味方だと見せかけて、その実、俺たちを逆に監視していたのか。

すべては、エニルダのために。

「ふむ、なるほど。どのような完全犯罪も、ちょっとしたところから綻<sup>ほころ</sup>びが生じるものだな。——そのことで、信頼の置ける君に相談があるんだが」

エニルダが、少し考えるようにして切り出す。

「何でしょうか？」

「人形師狩りが人形師を殺す理由。それが知られた以上、わしが生きてると怪しまれるな」

「それは、確かに。代行人形を作ろうとする人形師が殺されているというのに、それを既に作り出しているあなたが未だに狙われないというのは、あまりに不自然ですね」

「うん。だから、わしはとりあえず、人形師狩りに殺されようと思う」

突然、おかしい発言をするエニルダに、スノー医師は流石に困惑を隠せていなかった。

「それはいったい、どういう……？」

「さっき紹介したろう？ わしの孫娘、レインを」

「ええ。昨日も偶然、お会いしました。素敵なお嬢さんでしたね」

「あの娘、わしより先に本物の代行人形を作り出しよった。恐ろしい才能だ」

年老いた、濁った瞳が鋭く光った。

殺意を感じるほどに。

「……彼女も、殺すおつもりで？」

「最初は、そのつもりで呼び戻したのだ。だが、考え直した。あの娘はわしの孫だ。わしの血を引いているのだから、代行人形を作れて当然である。これから先、研究を完成させたとしても、それはわしの才能を受け継いだ当然の結果として、歴史に名を残す偉業となる。わしの名誉が汚される事態にはならない」

そして、目尻に大量のしわを寄せ、おぞましく笑う。

「それに、あの娘の才能をもってすれば、わしにも本物の代行人形が作れるのではないだろうか」

こいつが何を言いたいのか。未だに分からない。

だが、よからぬことを考えているなという予感、ひしひしと伝わってきた。

スノー医師も、少し動揺した様子で、こめかみから汗を流している。

「スノー君」

「は、はい」

「わし、あの娘の体を貰おうと思う」

「は……!？」

「つまりだね。わしは自分の体から自分の魂を抜きだし、レインの体に入る。わしの体は死んだも同然。その抜け殻は人形師狩りに殺されたということにしておけばいい。そしてわしはまた、若い新しい体で代行人形の研究を続けるのだ。あと何十年もな」

「では、レインさんの魂は」

「他の人形に移し替えるか、それともそのまま――。可哀想だが、それもまた運命だと、思ってもらうしかない」

――何を考えてやがる、この変態ジジイ。

レインの体を乗っ取るだと？ ふざけたことを。

彼女は、この爺さんの陰謀を知っていたんだ。

自分の身に迫っている危険を。

だから、時間がないと焦っていた。

だが、そんなことが許されるわけがない。

「……なるほど、素晴らしい！」

非人道的で、愚かな行為にもかかわらず、スノー医者は笑いながら拍手を送った。

気が狂っているとしか思えない。

「自らの魂を用いての、奇跡の大実験と言うわけですね！ なんという奇抜さと豪快さ！ やはり天才は考えることが違う」

「君ならば、きっと賛同してくれると思ったよ。今夜にでもそれを実行に移そうと思うのだが、ぜひ君にも協力してもらいたい。さすがに、自分で自分の魂を抜き取ることはできないからね。どうかな？ スノー君」

「喜んで、手伝わさせていただきますよ！ ですが僕一人では、いささか不安ですね。……そうだが、僕の思想に共感してくれている同志がいるのです。その者たちも助手として、あなたのお力になりたいと言っています。ぜひ招待しても？」

「ああ、君の同志ならば歓迎しよう。呼びたまえ」

「ありがとうございます。僕の望みは、あなたの思想や欲望を理解し、その結論がどこへ向かうのを見届けること。それをこんなにもすぐ近くで実現できる幸福に、感謝いたします」

深々と頭を下げる。こんなに嬉しそうなスノー医師を、初めて見る。

これが、人の無惨な死に様を嘆き、悪を許せないと言っていた人間の本性なのか。

頼りになると思っていた味方が、急に敵に回ってしまった。

ショックが大きい。損失もでかい。

医師の裏切りに戦慄を覚えていた矢先、クラウンマーチが周辺を警戒し始めた。

「どうしたね、クラウンマーチ」

「お話し中、すみません。妙な気配が近くから。邸内に、不埒な輩が入り込んでいるようです」

まずい、見つかったか。

思いもよらない密談に聞き入っているうちに、警戒心が散漫になってしまっていた。

俺の乱れた気配を、察知されたのだろう。

だが、場所まではまだ特定されていない。

逃げ仰せるチャンスはあるはずだ。

「始末できるかね、クラウンマーチ」

「お任せください。逃げ場という逃げ場を塞ぎ、どこまででも追いつめて見せましょう」

「ジェイネスたちを使うといい。あれで逃走路を潰していくのだ」

「承知しました」

クラウンマーチは懐から小さな呼び鈴を取り出し、チリンと鳴らした。

その甲高い音が、こだまする。

すると廊下で、ガシャン、ガシャンと金属が擦れ合う音が聞こえ、この部屋の入り口付近で止まった。

俺は物陰からそっと、視線を向ける。

そこには信じられない光景が。

廊下に飾ってあった兵士姿の蠟人形たちが、そこに整列して立っているじゃないか。

「――ジェイネス？」

スノー医師は蠟人形たちに警戒しつつ、興味深そうに見ていた。

「この屋敷を守護する、代行人形たちだよ。家中にある飾りものの蠟人形に、人間の魂を入れてあるだけの簡易なものだがね。言葉も感情も持たず、ただひたすら進入者を追いつめていくためだけに存在する。質より量に重きを置いた連中さ」

エニルダの声が止むと共に、クラウンマーチが腕を振り上げ、声を張り上げる。

「さあ、行くのです欠陥品ども！ 進入者を家の中に閉じこめるくらい、あなたたちにもできるでしょう！」

その声に反応して、蠟人形の兵士たちはゆっくりと、廊下の向こうへ歩いていった。

家中の出口という出口を塞ぐつもりか。

先手を打たれ、完全に逃げ道を断たれた。

だが、それは逆に、立ち向かう決心を固めるためには、丁度よかったかもしれない。

ここまで多くの真実を目の当たりにしながら、何もせず、おめおめと逃げると言うのも、少し気が引けていたのだ。

クラウンマーチを打ち負かし、エニルダとスノー医師を捕らえて、警察に突き出す。

それくらいはやらないと、気が済まない。

意気込んで、奴らの前に飛び出そうとした時。

後ろ手に腕を捕まれた。

振り返ると、驚いたことに、ガラクタの隙間にリノオールがしゃがみ込んでいた。

いつのまに、この部屋に紛れ込んできたのか。

その理由は、背後の壁にあった。

人間がひとり通れるくらいの、四角い真っ黒な穴が、ぽかんと開いている。

抜け穴か！

リノオールは俺を引っ張り、穴へ誘導する。

俺を逃がしてくれるって言うのか。

せっかくの親切、その手を振り解くのも酷だし、迷っている暇もない。

リノオールに手を引かれ、俺は気持ちを切り替え、穴の中へと入り込んだ。

## 地下迷宮のジェイネス

抜け穴の向こうには、石の階段が伸びていて、下へ下へと、続いていた。

階段を降りきった先は、石造りの薄暗い通路。

ずっとついているのか。最近、誰かがつけたのか。

壁に取り付けられた燭台に灯る明かりが、行く手をほんのりと照らし出してくれていた。

「おにいちゃん、こっち！」

とはいえ、こうやってリノオールに誘導してもらわなければ、どこへどう進めばいいのか分からない。

この通路は薄暗いだけでなく、脇道も多い。迷路のように入り組んでいる。

「すごいな、この屋敷。こんな地下があるなんて……」

視界のほとんど効かない空間。ビクビクしながら、俺は歩みを進める。

リノオールは夜目が聞くのか、暗闇でもお構いなしに軽い足取りで、まっすぐ歩いていく。

「おじいさまの研究室とか、牢屋とか。たくさんのお部屋があるんだよ」

牢屋とか。個人の邸宅には、まずない代物だな。

容易く人間を殺して、魂を抜き取る悪しき所業を行う男が使っているものだ。

色々と、恐ろしい使用方法を想像してしまう。

「出口につながる道も、いっぱいあるの。お兄ちゃんを、外につれて行ってあげるからね！」

リノールの機転の利いた親切には感謝、感謝だ。

でも、この誘導が、この小さな女の子の考え出した案だとは、考えにくい。

黒幕は、レインか。

彼女がリノールに指示を出して、俺を屋敷から逃がそうとしてくれている。

そう考えるほうが自然だ。どっちにしても、感謝する。

行く先には、変わらない景色の石造りの道が、延々と続いている。

この地下迷路の全貌も現在地も、自分で把握することは、もはや不可能だ。今はこの子を信じて、行けるところまでいっただけだ。

薄暗い空間は、燭台の明かりだけでは、遙か前方を見渡すことが困難になっている。

視覚に頼れないせいか、逆に、聴覚がやたらと研ぎ澄まされていく。

そうして敏感になった耳が、遙か遠くで響く、異質な音を聞き取った。

ガシャン、ガシャンと、金属が堅いものにぶつかる音。

一定間隔で、ずっと鳴り続けている。

その音の聞こえる間隔が、俺の足が地面を踏みつけるものと同じだと気付いた時、体中を戦慄が走った。

あれは足音だ。

さっきの、鎧を纏った蝸人形——ジェイネスとか呼ばれていた奴らの鉄靴てっかの音に間違いない。

俺が地上から逃げ出したと気付いて、ついに地下にも入り込んできたのか？

相変わらず聞こえてくる、堅い足音。

一つではない、複数だ。

やたら近くで聞こえているのが気になる。

目の前は十字路になっている。

リノオールはその交差した通路を右へ曲がろうとしていたが、俺は彼女の腕を引き、いったん立ち止まった。

壁に張り付き、進行方向を慎重に覗き見ると、その先で合流している通路を例の人形兵士が、淡々と横切っていく姿が、影絵みたいに壁面に映し出された。

俺たちの存在には気付かず、まっすぐ通り過ぎてくれたみたいで、鉢合わせは免れた。

安堵の息を吐く。

「気をつけて進まないとな」

俺は常に、リノオールの行こうとしている先を警戒しつつ。慎重に歩みを進めた。

しかし。前ばかり気にして、ゆっくり進んでいるわけにもいかない。

背後から、じわりじわりと。

規則的な足音が近付いていた。

後ろからも、奴らが迫って来ているのか。

万が一、追いつかれて、挟み撃ちにあってはまずい。

俺たちは周囲を警戒しつつも、歩みを早めた。

時折、進行方向の前方を通過していくジェイネスを躲すくらいは、それほど難しい動作ではなかった。

あいつらの行動は単純だ。

不審者にぶつかるまで、まっすぐに歩き続けているだけだから、人の気配を探ったり、先回りして罠を張るような器用な真似はできないらしい。

にもかかわらず、後ろから聞こえる一つの足音だけは、明らかに俺たちに的を絞って、追いかけてきているのだ。

そいつは俺たちを見失うことなく的確に、滞りなくついてくる。

素早く通路を曲がっても、撒くことができない。

何だ、あの正確さは。

一体だけ、尾行に長けた優秀なジェイネスがいるとでもいうのか。そんな反則的な。

暗がりの中、ひたすら人形に追いかける。

それはかなり怖い体験だった。

やがて、リノオールが進まんとする道は、長い直線に入った。

脇道も何もない、完全な一本道。

その道をひたすら進むわけだが、相変わらず、後ろからは足音がついてくる。

もしも、リノオールが道を間違えていて、この先が行き止まりだったとしたら。

完全に逃げ場はなくなる。

そいつに捕らえられることを危惧しているわけではない。

たかが武装した蠟人形。倒すくらいなら俺にもたやすいことなのだが。

あの装備は周囲の石壁にぶつかれば、ものすごい音を立てて反響するだろう。

それせいで、この居場所を他の奴に知られてしまう可能性が高い。

狭い通路では満足に剣も振れないし、この空間で戦おうとするのは、得策ではない。

「リノオール、本当にこの道でいいのか？」

「うん！ ちゃんと外にでられるよ！」

自信満々だ。本当なら、いいんだけど。

信じていないわけじゃないが、不安は拭えない。

そして、その不安が現実のものに。

突き当たってしまった。

なにもない、石壁に。

「行き止まりだぞ！」

なんてこったい。立ち止まるしかない。

しかし、背後からの追っ手は全く歩みを止めない。

ガシャガシャと、足音が早くなる。

そして、姿を現した。

燭台の明かりを反射して、不気味な光沢を放つ蠟人形、ジェイネス。その手には白銀の剣を握り、こちらへ向けて構えている。

「くっ……」

やるしかないか。

俺は腰に装着していた仕込み杖に手をかけた。

「おにいちゃん、だめだよ！」

なぜか、その腕をリノオールにつかまれ、妨害される。

「ええっ！ 何でだよ!？」

やらなきゃ、やられるだろうが。

いったい何を考えているんだ、この子は。

突然の不意打ちに困惑し、隙を作ってしまった。

ジェイネスは剣を突き立てて、俺めがけて突進してくる。

俺はほとんど身動きがとれず、リノオールを庇って目を閉じた。

キーンと、高い、澄んだ音が通路に響く。

人間の肉を切る音ではない。俺自身、痛みもないし。

ゆっくり目を開くと、ジェイネスは俺の側を通り過ぎ、行き止まりの壁に向けて、剣を突き刺していた。

俺が唾然としていると、その壁がギギギと鈍い音を立てて、向こう側に開いていく。

「か、隠し出口……？」

その先から入り込んでくる眩しい光に、目が眩む。

俺はリノオールに腕を引かれて、外に出た。

そこは赤い煉瓦の敷き詰められた、人気のない路地。

俺の住む町、ロノステラの見慣れた風景だ。

ほんの少し見なかっただけなのに、とても懐かしく感じる。

不思議と心が安らいだ。

体を撫でる風が、心地よい。

深呼吸し、肩の力を抜いたのも束の間。

ふと見れば、さっきの蠟人形まで、外に出てきているじゃないか。

俺は身構えた。だが、そいつは俺の前に手を突きだし、制止の体勢をとった。

そしてゆっくりと、顔に手をかけた。

すると蠟でできたその無表情な顔が、バリバリと音を立てて剥がれ出す。

奇妙な情景。その奥からでてきたものに、俺はまたしても、驚愕した。

「れ、レイン!？」

蠟でできたマスクの中から出てきた顔は、美しい美少女のそれだった。

彼女が首を振ると。長い髪がさらりと流れ、濡れた顔に張り付く。透明な汗の滴が辺りに飛び散り、光に反射して、宝石みたいに美しかった。

レインは手際よく甲冑を脱ぎ捨てる。

身軽になると体を伸ばし、深呼吸をした。

そして、啞然としている俺に微笑みかけてくる。

「この出口は、お祖父さまも知らない秘密の場所なの。ここから逃げれば、安全だわ」

「……ど、どうして君が。こんなことを？」

「ジェイネスは、他のジェイネスがいる場所にはやってこないの。だからあたしがあなたたちの後をずっとあの格好でついていれば、本物のジェイネスに追いかけることはないってわけ」

わざわざ蠟人形に変装して。ここまで俺たちを追いかけてきたのは。

追っ手に悟られないように、俺たちを守りながら、ここまで誘導するためだったのか。

俺を無事に逃がすために、先手先手を打って。

その手際の良さも、さながら。

慎ましくも豪快な行動力に感嘆した。

気持ちが<sup>たかぶ</sup>昂る瞬間だった。顔が熱くなる。

「ありがとう」と、恥じらい混じりに礼を述べた。

「お礼を言わなくちゃいけないのは、あたし。リノオールから聞いたわ。……あたしのことを、心配して屋敷まで来てくれたのでしょうか？ あんな人形たちがいる危険な場所に、命がけで忍び込んでくれて」

レインは俺の目の前に立ち、下から顔を覗き込んでくる。

「とても嬉しかったの。来てくれて、ありがとう」

そして、にっこりと笑った。

言われると、嬉しいはずの言葉。

それが、今の心がいない俺には、鋭い刃物のように突き刺さる。

「ごめん。本当なら、俺がレインを助けなきゃいけないのに。助けてもらってばかりだ」

「そんなの、あなたが気に病むことじゃないわ。本当に優しいのね、ノイエ君は」

愉快そうに、レインは笑う。

「そんな優しさを持っているあなただから、何が何でも助けたいと思ったのかしらね」

彼女の言葉は、俺の心を強く打った。

俺は意を決し、彼女の肩を掴んだ。

「レイン、一緒に逃げよう！ ここにいたら殺されるぞ！」

レインは一瞬、驚いて固まったが、すぐに寂しげな笑みを浮かべた。

「知ってしまったのね。お祖父さまの本性や、これから、しようとしていることを」

やっぱり、彼女は知っていたのだ。自分の尊敬する祖父の正体を。

「あんな奴の側に、いてはいけない。ひとまず、うちへ行こう。ショーンに相談すれば匿ってくれるし、何かいい知恵を出してくれるはずだ」

レインは目を伏せ、足下にくっついていてる女の子に、目を向ける。

「なら、リノオールだけでも」

まだ、そんなことを言っているのか。俺は少し、苛立った。

「……君は、あいつの言いなりになるのか？ あんな奴のために、自分の命を、人生を犠牲にするつもりなのか？」

祖父を偉大な人形師として尊敬する気持ちは分かる。

たとえ、その行いのほとんどがペテンであったと分かっているとしても、今まで思い描いてきた強い感情を消してしまうなんて、きっと難しいだろう。

でも、命を捨てる必要なんて、レインにはないはずだ。

しかし、彼女は静かに首を横に振る。

「そんなつもりは、初めからないわ。でも、お祖父さまを、あのまま放っていくわけには、いかないのよ。あたしが逃げたところで。あの人はどこまでも追いかけて、あたしを探して見つけ出すでしょう。元を絶たなくちゃ、何の解決にもならないの」

宝石のように美しい紫の瞳が、強い決意に輝いていた。

「だから、あたしの手で、お祖父さまを殺すわ」

その鋭い言葉に、俺は思わずレインから手を離して。一步、後ずさっていた。

「身内の罪は、身内が責任を持たなきゃね。でもそんなことをすれば、次に罪に問われるのはあたしでしょう？ 捕まればリノオールの面倒を見られなくなる。だから、ショーンさんのような立派な人形師に、この子を頼もうと思って、昨日は町の中を探し回っていたのよ」

俺は、彼女と再会した時のことを思い出す。

それだけの覚悟をもって。

彼女はあの路地にいたのか。

その決意が気高くも美しく、脆く儂く感じた。

「君は、身内の罪を背負って、何もかも捨てる気なのか？」

「自由や潔白という名の犠牲は、避けられない。でも、命を捨てる気はないわ。周囲から罪人と非難されても、生きてさえいれば、次の道は開けるはずだから。精一杯、考えて悩んだ結果なのよ。これがあたし一人のできる限界であり、最善なの」

レインは寂しげに微笑む。

「お祖父さまにはクラウンマーチや、あのお医者さんの先生みたいな強力な味方がいるから、あたし一人では真っ向に戦っても、勝ち目はないもの。警察に頼ろうにも。お祖父さまと人形師狩りが共犯であるという事実を証明できるものがない以上、力にはなってもらえないでしょうし。だから、あたしが隙をついて、あの人に止めを刺すのが、いちばん確実な方法なのよ」

そう告げるレインの手は、少し震えていた。

「あたし、お爺様が大好きよ。あたしが人形師として生きていくために必要なものを、全て与えてくださった。本当なら、殺したくなんてない。人としての道を踏み外してしまった罪を、生きて償ってほしい。でも、あたしには説得できるだけの力がないの……」

「そっか、よく分かった」

レインの告白を聞き終え、俺は、少し安心していた。

彼女が絶望に敗れ、諦めて何もかも捨ててしまったわけではないという事実が、はっきりした

。

この娘は、昔から何も変わっていない。

回転の速い頭脳であらゆる可能性を考慮して吟味して、挫折することなく最善の道を選んで、進んでいこうとする。

常に、前を見ている。光の射す場所を、探し続けているのだ。

ただ、それが非効率に見える原因は、きっと手駒が少なすぎるからなのだろう。

「レイン。もう一度、考え直してみないか？」

レインを見つめて、俺は笑う。

「今度は、一緒に戦う味方を計算に入れて」

「一緒に……？ 味方……？」

レインは眉を顰める。

「君の考えた計画は、自分一人で遂行するための、精一杯のものなんだろう？ でも。他に協力する人間がいれば、もっと別の方法をとることも可能なはずだ」

そうすれば、レインの望み通り、エニルダに生きて罪を償わせる方法だって選べる。

レインが、その身を犠牲にする必要なんて、なくなるんだ。

「それは、そうだけど。ノイエ君、まさか……」

レインにも、俺が言いたいことが、だんだん分かってきたらしい。

「君のやろうとしていることを、君の思った通りに実現するために、俺にも、手伝わせてほしいんだ。今度こそ、君の助けになりたい」

それが俺の、ずっと昔からの願いだったんだ。

「でも。そんな危険なことを、いきなりあなたに頼むなんて、あまりにもおこがましすぎるわ。本当に、命懸けなのよ？」

レインは困っている。戸惑っている。

きっと、俺が信じるに足る人物であると、確信が持てないからだ。

「君が、俺のことを信用してないのは、辛いけど分かっている。でも俺は、君に嘔吐いたりなんか、絶対にしていないから。信じて欲しいんだ、俺のことを！」

彼女が抱くような疑いなんて、何一つない。

俺がレインを助けたい。力になりたいという強い思いに、嘘も偽りもない。ここに誓う。宣言する。

レインは俺の目を見て、きょとんとしていた。そして首を傾げる。

「あなたが、嘘を吐いているって……？ あたし、その件はリノオールにしか話さなかったのに、どうして知っているの？」

しまった。感情に任せて、余計なことを口走った。

「うっ、いや、それは……」

汗を垂れ流し、目を泳がせ、言い訳を考えるが、何も浮かんでこない。

「……ひょっとして、ノイエ君。あの時、あたしの部屋にいた？」

レインが勘付いた。少し頬を赤く染める。悟ってしまったか。

あの時、彼女が何をしていたかなんて、本人が一番、よく分かっているはずなのだから。

俺がその部屋の中において、一部始終を知っていたと分かれば、俺の素行を疑っても無理はない。

「えっと、その……。ごめん！ で、でも見てないから、俺は絶対に見ていないから！」

嘘ばかりだ。でも、そうでも言わないと、信頼がますます、なくなる。

「見ていないって、何を？」

「な、何をって……」

そんなことを、俺の口から言わせる気が、この娘は。

「顔が真っ赤よ、ノイエ君」

「いや、だから。それはだな……」

ひょっとして、全てを知っていて、俺をからかって楽しんでる？

そんな気さえしてくる。

俺がしどろもどろしていると、レインは吹き出して笑い出す。

「そんなに動揺しなくたって。ノイエ君って、本当に面白い」

そのまま笑い飛ばした。これ以上、俺を苦しめる詮索をする気は、ないみたいだ。とりあえず、胸を撫で下ろす。

「……あなたがあたしに嘘を吐いていないのならば、きっとあなたは、勘違いをしているのね」

レインは寂しげに呟く。

だから、いったい何の話？

気になるが、聞く間もなく、レインの話のペースに吞まれる。

「あなたが悪い人じゃないって、最初から分かってる。あなたを疑っているわけじゃないのよ。でも、だからこそ、あなたの力を借りるわけにはいかないわ」

「どうして!?!」

レインが俺を拒む理由が、皆目分からない。俺は少し声を乱して、尋ねる。

「もし、あたしに協力者がいたとしたらって、それを前提に別の方法も考えたわ。でも、それを実行するためには、どうしてもクラウンマーチや人形師狩りと戦って、倒さなくてはいけないの」

それは納得だな。

あいつらさえいなくなれば、あの老体や医者の一や二人、何とでもなりそうだ。

「でも」と、レインは続ける。

「あなたには無理よ。無抵抗に、人形師狩りから逃げ回っていたくらいなもの」

俺の額の包帯に手を触れ、表情を歪める。

「この頭の怪我、クラウンマーチにやられたのでしょうか？ あれに突っかかって行って、命があっただけでも運がいいわ。あいつは特別、戦闘能力を強化されて作られた人形だから」

ははん、なるほど。そういうわけか。

俺はレインに、ただの無鉄砲で弱っちい奴だと思われている訳だな。

超ショック！

確かに、格好悪いところしか見られてないし、助けてもらってばかりだし。

弱小者に見られていても、仕方がないかもしれないが。

「だから、やっぱりこの問題は、あたしが何とかします。あなたは、リノオールを連れて逃げて」

レインはとにかく、弱い俺を逃がそうと躍起になっている。

俺はどう説明して自分の印象を改善しようかと、悩んでいた。

その刹那。

「逃がしはしませんよ、不屈き者！」

地下通路の中から声がした。

飛び出してきたのは、細身の剣を握った、執事姿の代行人形。

俺はレインたちを引き寄せ、クラウンマーチから距離をとった。

## 再戦クラウンマーチ

「剣を納めなさい、クラウンマーチ！」

その姿を凝視し、レインは強く怒鳴る。

「困りますね、お嬢様。勝手な真似をされては」

そんなレインを、相変わらず冷淡で無表情な顔で、クラウンマーチが睨む。

しかし、表情とは裏腹に、体の奥底から沸き上がってきている怒りや苛立ち、そして殺気は、全く隠されていない。

それをレインも感じ取ったのか、目の前の<sup>エージェント・ドール</sup>代行人形に、今までにないほど怯えた表情を見せた。

「逃げて！ ノイエ君！ でないと殺されてしまうわ！」

だが、俺はその場から動かない。

「俺は、もう逃げないよ。逃げる必要なんて、ないからな！」

そしてゆっくりと、仕込み杖を手に持ち、構えた。

そんな俺を見て、クラウンマーチは嘲るように鼻を鳴らす。

そして、リノオールを横目で睨みつける。

「この出来損ないを連れて、ここまで逃げ延びられたことは褒めて差し上げましょう。ですが、私からは絶対に逃れられませんよ」

この、上から目線の偉そうな物言い、態度。

最初に会ったときから大嫌いだったが、今となっては笑ってしまいそうなほど、滑稽で哀れな姿に見えた。

「お前はリノオールを、出来損ないだと罵ってばかりだな」

「当然です。本当に、不完全な出来損ないの人形なのだから。完璧な代行人形、完全なる存在とは。私のような者のことを言うのです！」

自己主張をしながら、クラウンマーチは剣を振りかざしてくる。

俺はその剣先を、自分の杖で受け止める。

ガキン！ と、金属と金属がぶつかる音。

昨日みたいに、無様に真っ二つ、なんて悲劇は起こさせない。

俺の杖は特注なのだ。

「本当に完全なら、不完全なものを嫌悪する必要なんてないはずだ」

力を込めて、奴の剣を押し返す。

後ろへ飛びずさったクラウンマーチは、初めて表情を歪めた。

「どういう意味ですか、それは」

「お前も、お前の作り主も、不完全な存在だから、自分より勝った存在を妬んでいるだけってこと。人形師エニルダは、本物の人形の魂を作れない。だから魂を作れる他の人形師を妬んで殺す。お前はそんな主人によって高性能な人形に人間の魂を詰めて作られただけの、まがいもの。だから本物の代行人形であるリノオールを軽蔑するんだ。自分の威厳を守るために」

クラウンマーチのこめかみが痙攣した。

奴が振りかざしてくる剣。それを受け止める俺。

打ち合い、打ち合い。火花が散る。

「黙れ！ 私も、私の主も。選ばれた完璧な存在！ 侮辱することは許さない！」

怒れる、ニセ代行人形。

冷静を欠いたがむしゃらな動きで、俺に飛びかかってくる。

俺は杖を水平に持ち、両端を持って外側へ引っ張った。

すると杖が伸びた。のではなく、鞘の部分が抜けていく。

中から出てきたのは、よく研ぎ澄まされた、細身の刃。

「認めろよ、出来損ないはお前のほうだって！」

鞘が全て抜けきると同時に。

俺は踏み出す足に力を込める。

そして、奴のがら空きの懐に潜り込み。

斬る。

肩から腰にかけて、執事服が斜めに裂ける。

人間だったら、血が吹き出していただろう。

傷口は、それだけの深さに達している。

人形とて、どうしようもないほどの致命傷のはずだ。

「バカな、この私が……。あり得ない。完璧である、究極の存在である、私があっ……！」

敗北を否定する、叫び。

それが、クラウンマーチの最期の言葉となった。

「本気になった俺に勝てると思うなよ。欠陥品」

クラウンマーチだった `もの、は、後ろに身体をよろめかせ、地下通路の出入り口に頭を突っ込み、仰向けに倒れた。

やがてピクリとも、動かなくなる。

完全に停止した様子を見届けて、俺は剣を鞘に戻した。勝利の一息。

顔を上げると、リノオールを抱きしめたレインが、大きく目を開いていた。

「クラウンマーチを、倒すなんて……」

「おにいちゃん、強いんだね！」

リノオールの目が輝いていた。

「こう見えて、剣術だけは自信があつてさ」

俺はにんまり、笑ってみせる。

「俺、頭が悪いから、人形は好きだけど、シヨンみたいな人形師にはなれそうもなかったし。じゃあ自分には何ができるのかって。いろいろ考えてるうちに、こいつに行き着いたんだ」

まあ、たまたま学校の剣術授業で初めて剣を握り、特に何もしなくても他の生徒を全員打ち負かしてしまった経験から、これだ！ とピンときて剣の腕を磨くようになった。

きっかけなんて、そんなもんだったが。

「どう、ちょっとは見直してくれた？」

俺が、弱っちい奴じゃないってこと。

今の戦いっぷりで、分かってもらえたはずだ。

尋ねてみると、レインは頬を赤らめた。

「……うん。格好よかった」

「そ、そう？」

あまりに素直な反応に、こっちが照れる。

「って言ってもさ。今の俺があるのは、レインのお陰なんだよ」

「あたしの？」

レインは不思議そうに顔を向けてくる。俺は頷く。

「昔。レインが俺に、自分にできることを突き詰めて探せって教えてくれたから、俺はここまで強くなれたんだ」

七年前。あの時のレインの言葉が、今の俺を作ったんだ。

その出来事を感謝している気持ちが、ちゃんと伝わるといいんだが。

「あの、そのことなんだけれど。ノイエ君、あたしね……」

レインは困り果てた、複雑そうな顔をして、俺に何か言おうとした。

だが、その先の言葉を、最後まで聞くことは叶わなかった。

突然、辺りにパチパチと何かを叩くような音が響き渡り、俺達の会話は中断された。

## 人形師狩りとの取引

レインはリノオールを側に寄せ、周囲を警戒する。

俺も仕込み杖を構え、辺りの様子を伺う。

響く音は、周囲の石壁に反響していた。その音の出所は、どこなのか――。

耳を澄ませると、クラウンマーチの倒れている隠し通路の奥から聞こえてくる。

「いやあ、見事な腕っ節だったな。いいもん見せてもらったぜ」

岩壁に反響して、響く声。

それを聞いて、俺は何かを叩く音が拍手であると悟った。

そして、その音を発し、声を放ったそいつが――。

昨日、嫌というほど俺を追いかけ回した、腹の立つ `あいつ、だと気付いた。

「人形師狩りか どこにいやがる！ 出てこい！」

まだ、厄介な奴が残っていた。

人形師エニルダのもう一体の手駒――人形師狩り。

奴も、この近くにいるかもしれないと、よくよく考えれば事前に分かったかもしれない。

奴の存在を今まで失念していたのは、俺のミスだ。

「まあ、そういきり立つなよお。俺様は、お前とやり合う気はねえんだ」

人形師狩りの不気味な笑い声が、石壁の中で響く。

そして、耳を疑う言葉を放った。

「エニルダをとっ捕まえるために、俺様と手を組まねえか？ 悪い話じゃないと思うが」

俺は眉を顰めた。

突然、何を言い出すんだ？ こいつは。

人形師狩りの意図が、全く分からない。

俺が困惑して沈黙する中、人形師狩りは笑い混じりに話を続ける。

「お前さんたちの話は、聞かせてもらったぜ。二人で何とかして、あのエニルダのジジイを捕まえようとしてんだろお？」

「だったら、どうだって言うんだよ」

「それなら、俺様を側に置いておくと非常に有利だぜえ？ 何しろ、俺様はあのジジイの罪の象徴。あいつを警察に突き出す時に、もってこいの証拠材料になるじゃねえか」

それはもちろん、その通りだ。

何しろ、こいつが一連の殺人の実行犯なんだから。証拠品としてこいつを差し出せば、体の作りから、エニルダの人形作りの特徴を見出せるだろう。

だからこそ、分からない。

「お前は、エニルダに作られた操り人形だろうが。何でわざわざ、自分の主人を捕まえるために力を貸そうとするんだ？」

俺達を騙そうと、企んでいるんじゃないのか？

俺がそう疑っても、おかしくはないだろう。

それだけ、奴の言動は理解に苦しむものだった。

「お前さんも、知ってんだろ？ あのジジイの腐れた性格。ある日、俺様は気付いたのさ。あいつ、何もかもが終わったら、全ての罪を俺様に負わせて、証拠も残らないくらいぶっ壊して、まんまと逃げ果せる気だとな」

「……お祖父さまなら、やりかねない話ね」

レインが静かに呟いて、同意。溜息を漏らした。

「だろお？ 俺様はあいつに忠誠を誓って、言われるがままに働いてきたのに。捨て駒扱いなんて、酷い話だぜ。だから、そうなる前に俺様があのジジイを裏切ってやろうと機会を狙ってたんだが、クラウンマーチに邪魔ばかりされてな。さっぱりうまくいかなかったんだ」

同じエセ代行人形でも、人形師狩りよりクラウンマーチのほうが、立場も強さも上なのだろう。

その身分差によって、こいつも随分と苦渋を舐めてきた様子だ。

「だが」と人形師狩りは笑う。

「そんなクラウンマーチを、お前さんはあっさりと倒しちまった。やるじゃねえか。昨日はさんざん逃げ回ってた小僧が、こんなに強え一兄ちゃんだったとは驚きだ。要は俺様、あんたの強さに惚れちまったわけよ。だから、そっちに寝返ろうと考えたわけさ。悪い話じゃねえだろう？ 今なら俺様とあんたが手を組めば、エニルダの味方は、あの狂ったヤブ医者だけだ。追い詰めるなんて、わけないぜ」

勢いに乗って、ぐいぐい押してくる人形師狩り。

「悪いが、お前と手を組むつもりはない」

俺は冷静に、少し考えた末。人形師狩りの誘いを断った。

人形師狩りの提案は、確かに魅力的だ。

今ならば俺達を脅かす強敵はいないし、エニルダを徹底的に追い詰めることも可能だろう。

だが、俺はまだ、人形師狩りを味方だと信じられずにいた。

こいつが、いつ裏切るか分からない危険と不安を孕<sup>はら</sup>んだまま、協力し合うなんて、できない。

気を許した途端、寝首をかかれる可能性だってあるんだから。

「別にお前と協力しなくたって、充分エニルダやスノー先生と戦える。俺には他にも味方がいるんだからな」

家に帰れば、ショーンがもっといい知恵を貸してくれるはずだ。

今の状況を説明したら。きっとショーンだってこいつと手を組むことに反対するだろう。

「エニルダを捕らえる切り札として、お前の存在が有用だっていうなら、自力で取っ捕まえればいいだけの話だ」

俺は人形師狩りを挑発するつもりで。強気でそう切り出した。

そこまではっきり言い切れれば。奴も本性を現すかもしれない。と考えたのだ。

しかし、その後がいけなかった。

「なるほどなあ、そうきたか。流石は俺様の見込んだ兄ちゃんだ。余裕に満ち溢れてやがる。...  
...どうやらこの状況、俺様には、かなり不利なものらしいな」

人形師狩りは少し考えて、そう告げた。

直後。

横たわっていたクラウンマーチが、バツと起き上がった。

俺が切り伏せて。完全に沈黙していたはずなのに。

どうして、今になって――？

いきなりの出来事に啞然としていると、クラウンマーチは素早い勢いでこちらに飛び掛かってきた。

そして、その手にレインとリノオールを引っ掴み、再び隠し扉の奥に跳んで戻った。

レインは小さな悲鳴を上げる。逃げようともがいていたが、クラウンマーチの腕にがっちり捕まれて、身動きが取れない。

「これで兄ちゃんも、俺様には易々と手は出せねえだろう？ 仕切り直しだ。一時間後、もう一度ここで会おうぜえ。それまで、この姉ちゃん達は預かっとくからな。よく考えを整理して来いや！」

「おい！ 待て……」

二人を助けようと動く暇もなく、クラウンマーチはものすごい速さで地下へと消えてしまった。

人形師狩りの気配も、すでにない。

奴の誘いを蹴った判断に後悔はないが、レイン達が連れ去られてしまった点は、大きな失態だった。

追いかけて、中に戻るか。

だが、この迷路の中を一人で走り回っても、迷子になるだけだ。

単独行動では、できることが少なすぎる。

すっかり奴のペースに嵌められてしまった。あまりの悔しさに、歯を食いしばる。

人形師狩りの目的は、俺との交渉だ。

まだその余地があると奴が考えている以上は、きっとレインたちの身の安全も守られているはず。

無事にレイン達を助けるためには、しばらく奴の言う通りにするしかない。

そのためにも、ショーンに協力を頼もう。そして何か、いい案を出してもらおう。

俺は味方を求め、急いで自分の家へと走り出した。

また結局、一人きりでここに戻って来る羽目になるなんて、その時は想像もできずに。

## 更なる裏切り

「ショーン、いるか!？」

勢いよく、自宅のドアを開く。

家の中は、もぬけの殻だった。

今朝のショーンは熱も下がって、部屋の中を歩きまわれるくらい回復していた。

だがまさか、外に出掛けているなんて、思いもしなかった。

元気であっても、ほとんど外出なんてしない奴が、この非常時に限って、どういう風の吹き回しだ。

「ったく。この大変な時に、どこに行きやがった！」

ショーンを探しに行かないといけない。

その前に。俺は寄り道して、自分の部屋へと向かった。

これからの大事に備えて、願掛けをしようと思いついた。

机とベッドだけで、ほとんどの面積を占めている、狭い俺の部屋。

その机の隅に、ちょこんと座っている、男の子の姿をした小さな布人形を手を取った。

こいつは、ショーン・アルペイトという人間が生まれてはじめて作った人形であり、ノイエ・

アルペイトと言う人間が、生まれた頃からずっと大事に持ち続けてきた、人生を共にしてきた人形なのだ。

お守り代わりに側に置いているだけで、とても勇気が湧いてくる。

剣術の試合や試験など、ここぞというときには、いつも側に置いて、勇気を分けてもらっていた。

すると不思議と、いつもピンチを切り抜けられたのだ。

これから俺がしなくちゃならないことは、とても勇気と度胸のいることだから。

今回も、こいつの力を借りようと思ったわけだ。

俺は人形を小さな袋に入れて、大事に腰へ結びつけた。

そして気合いを入れ直し、ショーンを捜すため、家を飛び出した。

● ○ ●

町の路地という路地を、くまなく探して回る。

しかし、いっこうにショーンらしき姿は、影も形も見あたらない。

どこかで行き倒れているかも、と思い、足下も入念に見て回ったが、屍のごとく転がっている気配もない。

あまりの発見率の悪さに、焦りを覚えてきた頃。

「やあ、弟君。そんなに急いでどこへ？」

そこへ通りかかったのは、のんきにパトロール中のナオミ警官だった。

「ナオミさん、ショーンを見なかったか？」

「自分は見えてないっすよ。どうしたんすか、血相を変えて」

俺の様子から、只事ではない状況を察知したのか。

「まさか、アルペイト兄の身に、何か？」

怪訝そうに尋ねてくる。人形師狩りに襲われたと、想像したのかもしれない。

彼女を見て、俺はふと、考える。

最悪、ショーンが見つからなくても、日々、人形師狩りを捕らえようと尽力している警察なら、事情を話せば、協力してくれるんじゃないだろうか。

レインはエニルダと人形師狩りの間に接点がないから、警察には動いてもらえないと言っていたが。

説明してみるだけの価値はあると思う。

「……ナオミさん。相談があるんだけど」

事情を話そうとしたが、直前で思い留まった。

「いや、でも、あんただと、ちょっと心配だな」

俺は腕を組んで、目の前の女警官に難色を示す。

「何が心配なんすか。一人で勝手に話を進めないでほしいっす」

俺の態度が気に入らなかったのか、ナオミ警官は不服そうだ。

「あんた、スノー先生のこと好きだろ」

ズバリと尋ねると、ナオミ警官は顔を真っ赤にして、首やら手やら、ブンブン振りだした。

「ななな、何を言い出すっすか！ たたた確かに、スノー先生は立派な方ですから、自分は非常にそそ尊敬しているっすけども！ すす好きだなんて、そんな畏れ多い」

凶星かい。

日頃のこいつの態度から、もしやとは思っていたが、確実に惚れている。

だとすると。

スノー医師の正体をこいつに話すのは、危険かもしれないな。

警察だろうが何だろうが、<sup>しょせん</sup>所詮は人間。

自分が好意を持っている人間なら、たとえ悪人であっても目を<sup>つぶ</sup>瞑って見逃してしまう。

なんて可能性も考えられる。

「……じゃあもし、その尊敬している先生が、悪いことをしていたとしたら、あんたは捕まえる覚悟があるか？」

不安だったので、尋ねてみる。

するとナオミ警官は我に返り。

腰に手を当て、でかい胸を張る。

「自分、公私混同はしない主義っす。いくら尊敬する憧れの御人であっても。犯罪に手を染めるとあらば、絶対に許しはしないっすよ！」

おお、頼もしいお言葉。

ナオミ警官の中では、出世欲のほうが、色恋沙汰よりも優先されているらしい。

そんな彼女を、俺は信じることにした。

「分かった。じゃあ、俺の話聞いてくれ。……人形師狩りに殺しをさせている犯人が分かった」

ナオミ警官の目が血走り。くわっと大きく見開かれた。

「犯人は人形師エニルダと、奴と手を組むスノー先生なんだよ」

「んなっ……！」

突然、意外な真実を暴露され、ナオミ警官は混乱しているらしく、しばらく目が泳いでいた。

しかし、人形師狩りの正体を知ったときのパニックぶりに比べると、かなり落ち着いたもので。

「弟君。ここでその話はちょっと……」

冷静に周囲を警戒しながら、声を潜める。

「署に来てほしいっす。詳しい話は、そこで」

その真剣な態度を見て、俺は安堵した。

この途方もない話を信じてくれる人がいたことが、非常に嬉しかったのだ。

思えば、初めてかもしれない。

この女警官が頼りになる。と心から感じたのは。

俺は自分の見てきた、聞いてきた全てを伝えるために。

ナオミ警官について警察署へと向かった。

● ○ ●

まったく。これだから、女なんて奴は信用がならない。

公私混同はしないでとか、ぬけぬけとほざいでおいて。

仕事が命と見せかけ、結局、男を取る。

狡猾で卑怯な生き物だ。

レイン以外だけど。

と言うか、この女警官だけだけど。

「やあ、ノイエ君。あの屋敷から抜け出せたなんて、すごいね。君」

ロノステラの警察署に連れられて来て、重苦しい雰囲気漂う建物の中に入ってみれば。

寛いだ姿のスノー医師が、にこにこ笑って手を振っていた。

俺は反射的に腰の仕込み杖に手をかけようとしたが、すぐに身動きがとれなくなる。

「動かない方が身のためっす。大人しくしなさい」

ここへ俺を連れてきたナオミ警官に、背中に猟銃の銃口を突きつけられる。

真面目くさった顔して、この女警官……。

俺を騙したわけか。

「あんた、何考えてんだよ！」

俺は彼女に向けて、大声を張り上げていた。

「彼女は僕の志に賛同してくれる、数少ない同志なんだ」

ナオミ警官の代わりに、スノー医師が口を開いた。

俺は横目にナオミ警官を睨みつけ、怒鳴りつけた。

「最低だな、あんた。さっきと言ってることが違うじゃねーか！」

だが、それを制止するように、スノー医師は口の前で指を立てる。

「これ以上は、騒がないで。大人しくしてくれるかい？ 君のお兄さんの命を助けたかったらね」

医師のすぐ足元。

床に倒れ込んでいる男――ショーンに気付き、表情を歪める。

「しょ、ショーン！ どうしたんだ、お前！」

ショーンは真っ青な顔をして、ぐったりと横たわっていた。

呼吸も弱々しく、かすかに痙攣を起こしている。

スノー医師はそんなショーンを見下ろしながら、にこにこ笑っていた。

その手には、謎の液体が入った注射器が。

何か、やばい薬でも打たれたのだろうか。

こいつは行動で示してきたのだ。

これ以上の抵抗は、ショーンの命を危険に晒すことになる。

歯を食いしばり、やむなく、俺はその脅しに従うしかなかった。

「ちょっと、予定が狂っちゃったね。まさか君に全て知られてしまうとは。一般人はあまり巻き込みたくなかったんだけど」

スノー医師は肩を竦めて、微笑んだ。

「でもバレたからには、君を野放しにしてはおけない。邪魔をされると困るからね」

「だけど」と、スノー医師は品定めでもするように俺を見て、言った。

「君のすばしっこさや秀でた剣術は、とても使えると評価しているんだ。敵に回すと厄介だけど、こちらの戦力になるのであれば申し分ない。だから選ばせてあげるよ。ここでじっと終わりを待つか。それとも、僕らの仲間になってその手腕を揮うか。話し合おうよ」

ふざけた二択を強いてくる。

そんなこと、選ばせてもらわなくたって、俺の答は決まっている。

「どっちも嫌だね。俺は絶対に、お前らの企みを止めてやる！」

「うん。そう言うだろうと思ったよ。でも、話くらい聞いてくれたっていいだろう？ まあ。それでも嫌だって言われたら、もう身の保証はできなくなっちゃうけどーね」

スノー医師は、不気味に笑った。

白衣の懐から、何かを取り出す。

その手には、手術で使うメスが。

鋭い刃先が、俺の頬に触れる。

俺はじっと息を殺し、なすがままにされながらも、逃げ出す機会を窺っていた。

## 五章 真実の代行人形

### 血塗れの逃走劇

「ったく、あのイカれた医者。思いっきり切り裂きやがって……」

全身に、メスでつけられた切り傷。

服はあちこち細かく裂かれ、しみだした血で染まっている。

その痛みと戦いながら、俺は町の路地を小走りしていた。

警察署を飛び出してきたことに、後悔はない。

自分で決めたことだし、それが最善の方法だったんだから。

だがこの先、味方は望めない。

たった一人で恐ろしい陰謀の渦の中へ飛び込まなくてはならないと思うと、言いようのない不安がこみ上げてきた。

それでも、レインを無事に救い出し、解放するまでは、どんな者からも逃げるわけにはいかないのだ。

俺の足はまっすぐ、エニルダ邸に続く地下通路の出入り口へと向かっていた。

やがて辿り着くと、黒いマントに全身を包んだ、人形師狩りが待ち構えていた。

「おかえりなさい、ダーリン。必ず戻ってくると信じてたわあ」

奴のなまめかしい物言いに、俺の口の端が、思わず<sup>っ</sup>攣り上がる。

こいつを信用しているわけじゃないが、俺には、もう後がないのだ。

それに、こいつとなら、互いの利益を尊重した上で、利用しあうことができるんじゃないだろうか。

そう考えたから、俺はこの場所へ戻ってきた。

人形師狩りの言っていた、取引きとやらをするために。

俺は奴に向かって、爽やかな笑顔で手を振った。

「やあ、待たせたねハニー。寄り道していたら遅くなってしまったよ」

「あらあら、血まみれじゃない。すっかりいい男になっちゃって。あたしと言うものがありながら、浮気した罰ね」

「まったくだよ。ちょっと善い相手だと思って無防備に手を出すと、こういうことになる。反省しているところさ。やっぱり僕には君しかない」

「まあ、お上手ね。と、言うことはあ。あたしのお願い、聞いてくれる気になったってこと？」

「その通りさ。ぜひ協力して、エニルダ達の罪を暴こうじゃないか」

「嬉しいわダーリン。じゃあ決まりね、さっそくあたしと一緒に敵地へランデブーしましょ」

「ああ。そうしたいのはやまやまなんだけど。実は今、とっても気になっていることがあってね。そのせいで、他のことがさっぱり手につかないんだよ」

「気になることって何かしら？」

「この辺りにとても美しいお嬢さんが二人ほどいたはずなんだけど、姿が見えないんだ。どこに行ったのか知らないかな？ 彼女たちが安全だと分かれば、僕はすぐにでも君とランデブーできるんだけどねえ」

「もうっ、かわいい娘を見かけると、すぐにこれなんだから！ あの二人ならあ。クラウンマーチがエニルダのところへ連行していく手筈になっているわ。あたしがそうするように仕向けたの。分かった？」

「へええ、よく分かったよ。君は僕とランデブーよりも、あの世での永住をご所望のようだね。ハニー」

「待ってダーリン、あたしに物騒なものを向けるのはやめて！ あたしたちの作戦を成功させるためには、必要なことだったのよ。エニルダには、この作戦を気付かれないように、ギリギリまで別のものに集中してもらっていなくちゃいけないんだから」

「なるほど。彼女たちを囷に使うってわけだね。君の華麗な作戦は反吐が出るほど素敵だ」

「分かってもらえてうれしいわ。さあ、あたしたちもエニルダのところに急ぎましょう」

「その前に。一つ言い忘れていたよ、ハニー」

「何かしら？ ダーリン」

俺は目を据わらせ、ハニーの首筋に、刃を突きつけた。

「レインたちに、もしものことがあったら、お前をぶった斬って燃やすからな。覚悟しとけ」

「いやーん！ ダーリンったら怖い!!」

鳥肌が立ちそうな。茶番じみたやりとりはもう終わりだ。

俺は人形師狩りと手を組み。と言うより、脅しつけて。

エニルダ邸の地下へと、再び足を踏み入れた。



そこは、地下の一角に作られた広い部屋。

数個のランプの頼りない明かりに照らされた不気味な空間には、天才と称された人形師が長い人生をかけて作り上げてきた、精魂込められた人形たちが並べられている。

側には、人形師が違法の髓を凝らして集めてきた、人間の魂を詰めた瓶が、標本のように飾ってあった。

ここは人形師エニルダの工房だ。

その中央。大きな作業台の側。椅子に腰掛けるエニルダと、その隣に立つスノー医師の姿が。

そこへ、誰かが足音もなく入ってきた。

そいつの姿を見て、エニルダは嬉しそうな声を上げる。

「おお、クラウンマーチ。ようやく戻ったか」

「ご主人様、遅くなって申し訳ありません」

やってきたのは、クラウンマーチだ。

相変わらず無表情で、その顔には何の感情もない。

薄明かりに照らされた無機質な面影が、余計に不気味に見える。

「レインお嬢様を、お連れしました」

奴の両腕にはそれぞれ、レインとリノオールが担がれている。

両手両足、そして口に縄でさるぐつわ猿轡を噛ませ、二人は動きを封じられていた。

レインは捕らえられながらも、反抗的な強い眼差しで自分の祖父を睨みつけている。

リノオールは泣きそうな顔をして首だけ動かし、不安そうに辺りを見回していた。

「これで実験が始められるな、スノー君」

「ええ。喜ばしいことです。そうだ、紹介しておきましょう。我々に協力をしてくれる同士たちです」

スノー医師がエニルダに紹介したのは、警官服姿の二人の人間だった。

一人は言うまでもない、ナオミ警官だ。もう一人は男の警官。帽子を深々とかぶり、根暗そうに俯いている。

その二人の来訪者を見た、エニルダの瞳が怪しく光る。

「彼らが、君の言う同士なのかね」

「驚かれましたか？ 警察の者が犯罪に荷担するだなんて」

スノーの問いかけに、エニルダはゆっくり、首を横に振った。

「いいや。正義というものは、簡単に悪に染まる。そんな裏切りは遙か昔から、当たり前に行われてきたのだ。今更、意外だと感じる必要もあるまい」

そして椅子から立ち上がり、レインの元へ歩み寄る。

「さあ、始めよう。今のわしが終わり、そして新たなわしが生まれる。今日はその記念すべき日だ！」

エニルダの枯れ枝みたいな手が、レインに触れようとした。

その時、俺は物陰から飛び出した。

「お前の悪巧みは、そこまでだ。人形師エニルダ！」

そして中央に歩み寄りながら、ゆっくり剣先をエニルダに向ける。

「君は……誰かね？」

俺を見て、エニルダは首を傾げる。

「ノイエ・アルペイト。さっき話した、人形師シヨン・アルペイトの弟です。我々の崇高な計画を邪魔しようとする愚か者ですよ」

スノー医師は奴に説明する。

俺は二人を、殺気を込めて睨む。

「僕も結構、派手に切りつけたつもりだったんだけどね。傷口が浅かったみたいだ。もっと深く、急所でも抉<sup>えぐ</sup>っておけば良かったかな？」

俺を傷つけ、血塗れにした張本人の嘲笑。

切り口からの血はすでに止まり、滲み出ていた血は俺の肌の上で乾いている。

その様子を、とても残念そうな顔で見ている。

「お前の実験とやらは、もうお終いだ。絶対に、レインの体を奪わせたりはしない！」

俺が本気であり、かつ、実験を妨害できる間合いにまで入ってきた事実<sup>じじつ</sup>に気づき、スノー医師は警戒を顔に浮かべ始めた。

「君たち、エニルダさんの護衛を」

仲間の警官たちに指示を出す。

二人の警官はエニルダを守るように、奴の両脇に立った。

「ふむ、なるほど。君は命も惜しまず、レインを助けにきたと。……つまり、レインに惚れているのだね。無理もない、美しい娘だから」

エニルダは、余裕の態度を見せる。

じっくり俺を見て、冷静に観察している風だった。

「君は私のせいで、レインを自分のものにできなくなることが許せないのかな？ だったら心配はいらないよ。わしはその自由に動く若い体で、人形の研究さえ、できればいいのだ。それ以外のもの――たとえば、女の生殖機能や、男の欲情をそそる、閨房の語らいといったものには、まるで興味がない。必要なときに、レインの体は君にあげよう。好きに遊ぶといい」

エニルダは、淡々と自分の考察を述べる。その顔からは、何の感情も見取れない。

俺の中に、嫌悪感と怒りが沸き上がった。

「黙れ、この<sup>ゲス</sup>下種が！ レインを物みたいに扱うな！」

「ふむ、気に入らんかね。最近の若者は気難しくて困るな」

白い顎髭を撫でながらそう言うエニルダは、ちっとも困っているようには見えない。

ただ、気怠そうな、面倒そうな雰囲気醸しだし、俺を見ている。

やがて、匙を投げた様子で肩を竦めた。

「若造の望みなんて考えても、わしには埒があかない。はっきり言いたまえ、君はいったい、どうしたいのかね。どうすればわしの邪魔をせず、ここから身を引いてくれるのだ？」

「何もするな。お前はお前として、これからも生き続けるんだよ！ 死ぬことも、別の人間になりすますことも許さない」

「何だ、生きろと言うのかね。てっきり、わしを殺しに来たのかと思っていたが？」  
意外そうに目を見開く。俺は首を横に振った。

「違うね。だって、あんたには――」

「ちゃんと生きて、罪を償っていただくかなくてはいけませんからね」

俺に代わって、真実を告げる声。

その男は、エニルダの首筋にメスを突き立てて、笑っていた。

「そうでしょう？ エニルダさん」

スノー医師の発言を合図に、奴の背後に構えていた二人の警官が、一斉にエニルダに警棒をつ

きつける。

「お縄につくっすよ！ エニルダ・セーヴィラ！」

一人は言うまでもなく、やる気満々のナオミ警官。

「まあ、そう言うこったな」

もう一人は、警官に変装したショーンであった。

「どういうことかな、これは」

周囲を見渡し、自分の置かれた現状を悟ったエニルダは、初めて、声色を乱した。

「スノー。貴様、裏切りおったな。……なんと卑怯な」

「おや、心外ですね。僕が卑怯者だなんて、あなたが一番よくご存じかと思っていましたが」

誰に向かってメスを向けようと、スノー医師の笑顔に変化はない。にこにこ顔だ。

「あなたのような汚らしい罪人を捕らえるためならば、手段なんて選ばない。僕はそういう人間なんですよ」

エニルダが驚愕し、憤怒するのも無理はないだろう。

俺だって、この男の口から全てが語られるまで、一連の出来事の真意に、全く気付けなかったのだから。

## 狂乱者たちの素顔

「実はね、僕は警察組織に属している医者なんだよ。この町で起こっている人形師連続殺害事件の真相を掴むために、素性を隠して密かに調査をしていたんだ」

数時間前。警察署で捕まっていた時。

警戒する俺に向かって、スノー医師は淡々と語った。

「そして人形師エニルダが怪しいと睨み、彼の懐に入り込んでいたんだ。ちょっと頭のおかしな、医者フリをして。驚かせてごめんね？」

「……そんな話を急に聞かされたって、納得できるわけないだろう！　そこでぶっ倒れてるショーンは、どう説明するつもりだ！　お前が、何かやったんじゃないのか!?!」

そんなにコロコロと態度を変えられては、こいつの何を信じていいのか分からない。

俺は自分の目で見ただけを信じる。

そう決心し、スノー医師に噛みついた。

だが直後、自分の目すら信じられなくなる出来事が起こった。

「あー、やっと薬が効いてきたー！」

勢いよくショーンが起きあがって、気持ちよさそうに伸びをした。

俺は意味が分からず、口を開け放つしかできなかった。

「ショーン！　お前、無事なのか？」

「おお、ノイエ。いやー、まいったぜ。体の調子が良くなってきたから、ちょーっと散歩に行こうかと思って家を出た途端に気分が悪くなってな。倒れていたところを、運良くスノーに助けられて、さっき疲労回復の薬を注射してもらったところだったんだ。お陰ですっかり快調さ！」

ショーンのすこぶる元気な声に反応して、俺は無意識に、奴の頭を殴っていた。

「いてーな。いきなり、何すんでい！」

「うるせー！　紛らわしい格好で治療受けてんじゃねーよ！」

騙されて腹が立つし、困惑は残っているが。

「まあ、そういうことなんだけれど。信じてくれるかな、僕の話」

結果からして、俺は頷くしかなかった。

このイカれた医者言葉が真実だと、受け入れざるを得なかった。

「……分かったよ、あんたを信じる」

俺がそう言うと同時に、スノー医師は手振りで指示を出す。

ナオミ警官が、俺から銃を放した。

一息つく。

とりあえず、こいつらが俺の敵ではないのだとは、理解した。

だが、呑気に安心している場合でもない。

「あんたが警察の人間だっていうなら、早くエニルダを捕まえてくれ。急がないと、レインの身が危ない」

事態はさっきまでと、何も変わっちゃいない。

スノー医師も俺に同意して、頷く。

「分かっている。でも、あの実験の話は、僕にとっても急だったものだから、とても焦っているんだよ。なんせ、彼を捕らえるために必要な、一番肝心なものが、まだ用意できていないのでね」

腕を組む。スノー医師の表情は深刻そうだった。

「彼——エニルダ氏と人形師狩りとの間に、人形師を殺すための指示や命令といった、やりとりが行われたという証拠が見つけれないんだよ。それどころか、今までに一度も、彼らが接触した形跡がない。そのため、彼を逮捕に踏み切れないんだ」

その話は、レインも問題視していた。

エニルダを法の裁きから守っている、唯一かつ強固な壁。

だが、俺は握っている。その壁をぶち壊す、確実な方法を。

「その証拠、俺が用意するよ」

俺の言葉に、スノー医師は眉を顰める。

「何か、確固たる証拠でもあるのかい？」

俺は強く頷いた。

「なら、君に託したい。今夜、エニルダ氏が魂を移す実験を始めるまでに、彼と人形師狩りとの接点を、見つけ出すんだ。もちろん極秘でね」

スノー医師は、最後の決め手を、俺に託してくれた。

「証拠を掴んだら、エニルダ邸の地下室にある工房に来てくれ。それを合図に、僕たちも行動する」

地下通路の地図を渡された。

それを眺めていると、こめかみから汗が滴り落ちてくる。

「責任重大だな」

自分から言っておいて今更だが、徐々に緊張が走る。すごいプレッシャーだ。

だが、嫌な感じではなかった。退くより進むほうが、はるかに良いに決まっている。

俺の気持ちは、とことん前を向いていた。

「大変な役目を、君一人に任せなければならず、申し訳ないと思う。――僕にできる力添えは、せいぜいこれくらいだ」

突然、スノー医師はメスを構え、素早く振り回した。

その直後。俺の体中の皮膚が切れ、血が滲みだした。

一見、驚くほど血塗れに見えるが、一つ一つの傷は深いものではない。痛みも軽かった。

「見た目ほど、体にダメージがないように斬った。その傷を僕が負わせたと分かれば、我々の間に協力関係があるなどと、勘繰る者はいないだろう」

俺がスノー医師たちのところから、攻撃を受けながらも逃げ出した、というシナリオを作るための下準備だ。

医者ならでわの、本格的な装飾だと感心した。

「頼んだよ、ノイエ君」

俺は強く頷いて、走り出したのだった。

全てを終わらせられる場所へ、辿り着くために。



「さて、ノイエ君。全てを明かしてしまった以上、後戻りはできないよ。……ちゃんと、見つけてきてくれたらうね？」

「ああ、もちろんさ」

俺はスノー医師に笑い返した。すでに、準備は万端だ。

「警察の諸君。善良なる人形師にそんな物騒なものを向けて、いったい何をしようというのかね」

何も知らない間抜けな人形師は、自信満々で哀れな被害者を演じている。

その仮面をはぎ取るべく、スノー医師は口を開く。

「あなたを逮捕させていただきます。魂学の技術を悪用して、人間の魂を弄んだ罪。そして人形師狩りを使って人形師たちの命を奪い、町の平和を脅かした罪で」

「罪とな？」

意味が分からないと言わんばかりに、エニルダは首を傾げる。

「人間の魂を使って代行人形を作るという、違法的所行は……いたしかたない、認めよう。だがそれも、死んだ人間から抜き取ったものだし。彼らとて、決してわしが殺したわけではない」

サクサクと抵抗の言葉を紡ぐ。

こうなったときのために、あらかじめ用意してあった、劇の台本みたいな台詞だ。

「わしが人形師狩りとやりに殺しを命じたという、決定的な証拠があるのかね？ わしはそんな恐ろしい殺人鬼、会ったことはおろか、見たこともない。君たちがどれだけ空想ごとを並べてわしを中傷しようと、わしにそれほどの罪があるとは思えんな」

そう、それが奴の強みなのだ。

だが、言い換えれば、奴にはそれだけしか、言い逃れする術がないわけだ。

「まったく、気分が悪い。今日のところは、お引き取り願おう。クラウンマーチ、この人たちを外につまみ出しなさい」

屋敷の主らしく、エニルダは当たり前に従者に命令を下す。

だが、その当然を打ち破ったのは、従者のほうだった。

「そのご命令はきけませんよ。ご主人様」

非情なその言葉に驚愕し、エニルダは目を細める。

「何だと？ なぜきけぬのだ、クラウンマーチ」

「なぜならあ」

クラウンマーチは自分の頭を掴み、首を横に回し始めた。

ゆっくり半周させると、後頭部が前方に姿を現す。

「俺様は、クラウンマーチじゃないからですよお、ご主人様あ！」

束ねられた長い白い髪を解き、中央から左右にバツと分ける。

その中から出てきたのは、後頭部の地肌に手書きで描かれた、ニヤリと笑う不気味な顔。

人形師狩りの顔だった。

「くっ……！」

明らかに、エニルダの表情が歪む。

怒りと焦りを混同させた。複雑な歪み。

人形師狩りはレインとリノオールを連れて、俺の背後に飛びずさった。

「残念だったなあ。クラウンマーチは、この兄ちゃんが倒しちまったよ。この体は、俺様だけのものだ！」

機嫌良さそうに、人形師狩りは、へらへらと笑う。

「なるほど、そういう絡繰りからくでしたか」

その奇妙な人形の姿を見ながら、スノー医師は楽しげに語る。

「クラウンマーチの体には、彼と人形師狩り、二つの魂が入っていたのですね。それが交互に表に出てきて、各々するべき命令を遂行していた。一一殺しの指令はクラウンマーチに出しておけば、人形師狩りにも伝わっていた。だからあなたは人形師狩りに会わずして、的確に操ることができていたのですね」

スノー医師は、納得の視線を向けてきた。

俺は自分の役目を無事に果たし、満足して彼に頷き返した。

「この人形は、非常に重要な証拠品ですね、エニルダさん。――あなたの最低な罪を、証明するためのね！」

スノー医師の、極上の笑顔。

今までで一番、幸せそうな顔だ。

「おのれ、どこまでも人をこけにしおって！」

エニルダは、怒りに表情を歪める。

机の上に置かれていた、小さな鐘を激しく振り鳴らした。

地下空間に響き渡る、鐘の音。

それと同時に、周囲に陳列されていた、武装した蠟人形たちが、いっせいに動き出した。

「わしが今までに人間から抜き取ってきた魂は、ほとんどジェイネスとして起動している。統率のとれた蠟人形の兵士たちは強いぞ!? たかが数人の人間ごときが、勝てると思うな！」

それは自惚れでも強がりでも、ハッターリでもなかった。

単体ならば、それほど驚異ではなかっただろうが、室内をぐるっと囲む、数十体ものジェイネスたちが与えてくる威圧感は相当のものだった。

「んなっ！ こ、これを全て退治するっすか!?!」

ナオミ警官は、真っ先に気圧されている。

「ありあわせの体に魂を入れて。強靱な軍団を結成、か。ずいぶんとお手軽な代行人形の製法だな」

彼女と背中合わせに立ち、警棒を構えるショーンは、表情をひきつらせながらも、悪態を吐く余裕はあるようだ。

「代行人形にとって最も重要なのは、いかに素晴らしい魂に成長できるかということである。器など、それなりに役に立てば何でもいいのだよ。成長する見込みのない魂なら、尚更な」

「なるほど。人形学の提唱者が言うんなら、その通りかもな」

エニルダは俺たちを指さし、腹の底から声を張り上げ、命令した。

「ゆけ、ジェイネス！ こいつらを生かして出すな」

それを合図に、剣を振りかざし、襲いかかってくるジェイネスたち。

そこにいた全員が戦闘態勢をとり、蠟人形たちの攻撃に備える。

スノー医師は相変わらず楽しそうに、メスを振ったり投げたりの交戦。

へっぴり腰のナオミ警官とショーンは、とりあえず警棒を振り回しての防戦。

中でも一番、気合いが入っていたのは、人形師狩りだった。

「へっ、おもしろえじゃねえか！」

十八番の短刀を構えて、人形の群れに自ら飛び込んでいく。

あっという間に、数体のジェイネスを斬り倒した。

しかし、俺がクラウンマーチを倒した時に斬りつけた傷が深いせいか、満足に体が動かさならしい。

ぎこちない動きで、次々とジェイネスが振りかざしてくる剣を捌くのも、辛そうだ。

人形師狩りは舌打ちした。

「おい、兄ちゃん。早く加勢しろ！ この壊れかけの体じゃあ、俺様は本気出して戦えねえ」

俺はレインたちの猿轡を解き、戦いに参加しようと立ち上がった。

だが、レインに腕を捕まれ、止められる。驚くほど強い力だ。

「行っちゃ駄目よ、ノイエ君。これ以上、あなたを危険な目に遭わせられないわ」

レインは必死で、俺を引き止めようとしている。

泣きそうな顔。いつもの冷静で落ち着いた姿からは想像できないほど、興奮していた。

俺はレインの背中を擦り、落ち着かせる。

「俺は君を助けるためなら、何でもしたいんだ。今の俺がいられるのは、七年前に俺の中から迷いを取り除いてくれた君のお陰なんだから。今度は俺が、レインの力になりたいんだよ」

静かに、俺の素直な気持ちを伝える。

レインは、じっと俺の顔を見ていた。

そして、力を抜いて、ふっと微笑んだ。

「……羨ましいなあ。あなたに、そこまで想ってもらえる人が」

「何を言ってるんだ？ 君のことだよ、レイン」

俺が想い続けている相手は、今も昔も、この少女だけ。

レインだけなのに。

どうしてそれを、他人事みたいに言うのだろう。

「違うわ。あなたの想い人が、あたしであるはずがないわ」

レインは首をゆっくり否定的に振り、衝撃的な言葉を吐き出す。

「だってあたし、あなたのことなんて、全く知らないんだもの」

一瞬、彼女が放った言葉の意味が分からず、俺は固まった。

「どういうことだ？ 再会した時、久しぶりって……。昔、会ったことがあるって、言ってくれたじゃないか」

困惑しながらも、何とか言葉を紡ぎ出す。

レインは悲しげな顔を俯かせ、俺の顔を見ようとはしなかった。

「――騙していたの。ごめんなさい。本当は、昨日があなたと初対面。ずっと前に会ったことがあるなんて。真っ赤な嘘、デタラメ。知っているフリを、してただけなの」

「どうして、そんなこと……？」

「リノオールのためよ。あたし、小さい頃はこの町に住んでいたけれど、友達や親しい人なんて

一人もいなかったから。あの子を託せる誰かを見つける必要があったの。嘘をついてでも、知り合いを作っておきたかったのよ」

俺を見て、いたずらがばれた、子供みたいな顔をして、レインは笑いを含んだ口調で、語り続ける。

「あたしがそういう演技をするとね、たいていの人は身に覚えがなくても、話を合わせてくれるの。それでうまく相手の記憶を操作して、甘えたり、少し我儘を聞いてもらったり。前から、よくやってきた方法なのよ」

レインほどの美人なら、声を掛けられて喜ぶことはあっても、怪しんだり訝しむ奴は、限りなく少ないのだろう。

この娘とお近付きになりたい。相手から声を掛けてくるなら、相手の提示する設定に乗ってやってもいい。と考える下心のある連中を騙すための、画期的な手法。

詐欺まがいな方法だが、別に被害者は何かを騙し取られるわけではない。大きな被害を被<sup>こうむ</sup>るわけでもない。

苦情を訴える者も、いなかったらう。

そういったやり方で、リノオールを無事に逃がすために、彼女は偽りの記憶を、相手に押し付けようとしていたのか。

今回、その相手に選ばれた者が、偶然、俺だったのだ。

「でもあなたは、他の人たちと何かが違った。本当に私を知っているみたいで、とても親身になってくれるし、一生懸命、助けてくれた。だから最初は、あたしが逆に騙されているんじゃないかって、警戒したくらいよ」

彼女が自室で、リノオールに話していた内容の真相は。

俺が嘘つきだと言われていた理由は、そのためだったのか。

「でも、だんだん違う気がしてきた。あなたが本気なんだって、とてもよく分かったから。……それで思ったんだけど、あなたは、きっとあたしと他の誰かを勘違いしているんじゃないかしら？ あなたには昔、あたしと同じ名前の恩人さんがいたのだと思うわ。けど、それはあたしじゃないわ。あたしみたいな嘘つきのために、危険を冒しちゃいけない。ちゃんと、本物の恩人さんを見つけて、その人を守ってあげて。ね？」

レインは俺を説得し、言い聞かせようとする。

俺はしばし、脱力していた。

彼女は、俺の待ち続けていたレインじゃないのか？

いいや、そんなはずはない。俺の中の記憶は、確信している。

「一七年前。俺が出会ったレインという子は、人形学についてとても詳しい、賢い女の子だった。人形が相手でも、何の分け隔てもなく、人間にするように接することができる、心の優しい女の子だった。リノオールという人形の魂を生みだし、その日が人格を持った記念日だと言って、喜んでいた」

レインの額に、青筋が浮かんだ。怯えた形相で、俺の顔を見上げている。

「どうして、知っているの？ あの日一町を離れることになったあの日のことを。あたし、人にそんな話なんてしなかったわ。一人で静かに、リノオールの記念日を祝ったのよ」

「うん、そうかもしれない。でも、昔の俺は君と出会ったんだよ。分からなくて当然なんだ。こんなにも姿が、変わってしまっているんだから」

彼女はとても頭がいい。

だから、俺の正体にも、すぐに気付いてくれたのだろうと、勝手に思い込んでいた。

でも、それが間違いだった。

彼女は俺を覚えていなかった。その現実は悲しいが、偶然であっても、こうして出会えて、深く関わられたことで、思い出してもらえるきっかけができたのだ。

その運命を、嬉しく思う。

俺は腰に結びつけていた袋を取り外し、レインに渡した。

「これ、預かっていてくれないかな？」

受け取ったレインは、ゆっくり袋を開け、中のものを取り出す。

こいつを託したことは、俺にとって、最後の賭けだった。

そして俺は、賭けに勝った。

「.....あたし、この子、知ってるわ。この町を離れる直前に、町の片隅で会った。とても落ち込んでいたの。お兄さんが死んでしまうって。怖いって。だから、励ましてあげた一一」

レインはハッと驚愕し、俺を見上げた。

その目には、涙が滲んでいた。

「まさか、あなたは……？」

よかった、思い出してくれたみたいだ。

そして、理解してくれた。

「そいつ、大事に持っててくれるかな」

安心して、俺は微笑む。

「俺の、昔の体なんだよ」

そう告げて、仕込み杖を握りしめ、俺は人形と人間の入り交じる、混戦の場へと駆けていった。

## 人であらざる人の道

気がつけば、地底の人形工房は、おもちゃ箱をひっくり返した子供部屋のような有様になっていた。

床を埋め尽くすように横たわり、転がる人形たち。

足の踏み場もない、静寂の空間。

俺はその中心に。ひとり佇んでいた。

「ばっ、バカなあっ！ わしの、ジェイネスたちが……」

静寂を打ち破ったのは、老いた愚者の悲痛な声。

愚かなる人形師エニルダは、椅子に腰掛けたまま、頭を抱えて絶叫している。

奴には信じられなかったのだ。自分が作り出した人形の軍団が、たった一人の人間に全滅させられるだなんて。

「い、いくらなんでも、人間にこんな真似ができるとは……」

「そうだなあ。ノイエは元々、俺に負けず劣らず、体力なんか人並み以下の弱一い子供だったんだよ。本来ならこんな激しい戦い、できるはずもないような。――だが、魂の強さが、あいつの身体を変えたんだな」

エニルダの側に避難していた、ショーンが口を挟む。

「あんたは確か、世界で一番最初に、完璧な代行人形を作りたかったんだよな。そのために、先を越されないよう、才能ある人形師たちを殺していたそうだが。……もう、とっくに手遅れだぜ、そんなの」

ショーンは、嫌味に笑う。エニルダは体を震わせ、横目にその笑みを見つめる。

「俺の弟はな。七年以上も前に完全な人形の魂を作って、今まで成長させてきたんだ。――自分の体の中でな」

エニルダの目が、飛び出しそうだった。

「ま、まさか。そんなこと、あり得ん！」

「あり得ないことなんて、あるかい。あんた、さっき言ったぜ。大事なのは優れた人形の魂であり、器なんて何でもかまわないと。――人間の体に、人形の魂が入っていたって、人形学的には何の問題もないはずだが？」

わななき、震える口。

その中から、エニルダは不器用に息を吐き出した。

「何と言うことだ。既にそこまで、代行人形は進化していたというのか。わしがいくら急いでも、決して追いつけないところまで。そこに最初に辿りつくのは、わしだったはずなのに……」

不可能。手遅れ。

それを認めた瞬間、エニルダの体から、抵抗する気力が抜けきった。

ナオミ警官によって、枯れ枝のような手首に縄が掛けられるまで、そう時間はかからなかった

。



その日の夕刻。

エニルダ邸の玄関先にて。

息を失ってがっくりと項垂れた、人形師連続殺人事件の犯人は、出世の希望に満ちあふれた、最高にご機嫌な女警官によって、連行されていった。

犯人に作られ、利用されていた人形師狩りはと言うと。

今回の事件の重要証拠として、警察に身柄を確保されるそうだ。

スパイ警察スノー医師と、奴の修理を依頼されたシヨンによって、どこぞかへ連れて行かれた。

軒先に残り、俺は石段に腰を下ろしていた。

隣では、幼い少女の姿をした代行人形が、ちょこんと座り、足をぶらぶらさせ、何事もなかったように鼻唄を唄っている。

その唄を心地よく耳に受けながら、しばらくの間、何もかもが終わった余韻に浸っていた。

すると背後から、人の気配が。

それで我に返り、まだ全てが終わっていないことを思い出す。

「昔、あなたが言っていたお兄さんって言うのは、シヨンさんのことではなかったの？」

背後の人の、静かな問いかけ。

「俺、あいつをそんな風と呼んだことないんだ。俺がお兄さんと呼ぶ相手は、世界でたった一人——」

俺は空を見上げ、答える。

「ノイエ・アルペイトだけなんだよ」

「その人は。……本物の、ノイエさんは？」

「君と別れた数日後、死んだ。熱が下がらなくて、肺炎をこじらせて。あっという間だった」



あれは、七年前のあの日。

レインと別れて、数日後の出来事。

「お兄さん、お兄さん、死なないで」

俺はノイエ・アルペイトの枕元で、必死に呼びかけていた。

黒い、灰色がかった髪の毛、小さな痩せ細った男の子が、顔を真っ赤にして、苦しそうにベッドに横たわっていた。

診察していった医者言葉が、頭の中でぐるぐる回る。

――覚悟だけは、しておいてください。と。

何となく分かっていた。お兄さんはもう、助からないと。

そう思っていたのは、俺だけではなく、側にいた病弱そうな少年――ショーンも、決意を固めていた。

「なあ、お前。ノイエの体を使って、代行人形になる気はないか？」

一足先に高熱の苦しみから解放され、体調を持ち直していたショーンは、まだ気怠そうにしながらも、俺にそう言った。

「代行人形に……？」

尋ねると、返ってくる頷き。

「ノイエの命は、もう保たない。けどこのまま死んで、みんなから忘れられていくなんて。大人になれないなんて、悲しいじゃないか」

顔の割に大きな、分厚い眼鏡の奥で、ショーンは泣いていた。声が震えている。

「今、お前の魂をノイエの中に入れれば、理論上、肉体は死なないはずなんだ。そのまま成長を続けて、いつかは――」

大人になる。

ノイエ・アルペイトという人間が天寿を全うし、歳老いて天に召されるその時まで。

生きた証を、生き様をこの世に刻むことができる。

「本当に、そんなことができるの？」

「ダメもとで、やってみてもいいだろう。無理なら、それまでだったということだ」

「お兄さん……、僕……」

不安に襲われる俺に、お兄さんは最後の力を振り絞り、笑ってくれた。

「……俺の代わりに、生きてくれるか？ 幸せに、なってくれるか？」

俺が頷いた姿を、お兄さんは見てくれていただろうか。

いや。その時にはもう、命は尽きていたかもしれない。

それでも、語りかけずにはいられなかった。

「僕、生きるよ。お兄さんの代わりに」

代行人形とは、作り主に代わって事を成す為に作られた人形。

主人にできなかったことを、代わって遂行するための存在。

彼が生きられないというのなら。

俺が代わって生きる。

大切な、大好きなお兄さんの未来を紡ぐ。

それが、俺がお兄さんにしてあげられる、唯一の役目なのだ。

俺は決心し、シヨーンはすぐに腕を振るった。

そうして、初めての試みは成功し、俺は人知れず、ノイエ・アルペイトとなった。

● ○ ●

「――君が。俺の成すべき役目を教えてくれたから、俺は今の道を選べた。だから、ずっと感謝していた。もう一度、会ってお礼がしたかった」

俺は背後の人に言った。ありがとう、と。

「違うよ。選ばうと思って選べる道じゃ、決してないよ」

背後の人の美しい声が、耳のすぐ側で聞こえた。

「あなたの強さが、主人を想う気持ちが、奇跡を生んだの」

レインは、俺の背中にそっと、体を寄せてきた。

俺は自然と、頬が綻ぶのを感じた。

たとえ、人形じゃなくたって。

大好きな人に抱きしめられるのは、やっぱり嬉しい。

<了>

## あとがき

本作を最後までお読みいただき、ありがとうございました。

人形に魂が宿る、という題材は、筆者が小説的なものを書き始めた中学生の頃から取り組んでいる、いわば永遠のテーマの一つです。

ピノキオやお菊人形などから始まる、魂を持つ人形と人間が織り成すストーリーに、昔から魅力を感じ続けてきたのです。

それを一つの形としたのが、この作品。

西洋風な世界観を舞台に繰り広げられるファンタジーと、謎が謎を呼ぶ、どんでん返し連発のミステリー要素を練り込んだ、ある意味著者の好きなもの詰め合わせ放題の作品となりました。

一般的なライトノベルとは毛色の違う、少し童話に近い雰囲気を出してみました。

ご期待に添えたかは分かりませんが、楽しんでいただけたなら幸いです。

著者にとって、自作小説の電子書籍発行は、この作品が最初になります。いちおうデビュー作、になるんでしょうかね？

制作にあたって参考にさせていただいたサイト様や、電子書籍作成ソフト製作者様、書籍販売サイト様など、ここには書ききれませんが多くの方々の知識や技術をお借りして、この作品は世に出ることができました。とても感謝しております。

そして表紙イラストを引き受けてくださった、ハルソラ様。初めて人様にイラストの依頼というものをさせていただいて、不安も多かったのですが、文章だけの分かり辛い注文を見事に形にして、素晴らしい絵を描いてくださいました。

自分が欲しくても得られなかった才能をお持ちの方は、もはや尊敬に値する偉人以外の何者でもありません。これからのご活躍も期待しております！

また、この作品が少しでも業績に貢献できれば幸いです。本当に素晴らしいイラストを、ありがとうございました！

この先も、著作の体裁が整い次第、順次作品を販売していく予定です。

無料作品は各投稿サイトでも公開しています。

様々な電子書籍販売サイトに顔を出しておりますので、またどこかで見かけたら、ちょっと手を伸ばして頂けると嬉しいです。

幹谷 セイ

## 人であらざる人の道～はじまりの代行人形～

幹谷セイ 著  
ハルソラ イラスト

発行日 2017年10月10日  
価格 無料  
発行 みきやbooks

作品紹介サイト

みきやbooks  
<http://seimpia.webcrow.jp/mikiyabooks.htm>

Facebook  
[Facebookページ](#)

この物語はフィクションです。実在の人名、地名等はいっさい関係ありません。

当書籍はデジタル著作権管理 (DRM) フリーですが、文章内容、イラスト共に各作者が著作権を保

有しております。

純粋な読書鑑賞以外の用途での無断使用、改変、自作発言、その他著作権を侵害する行為は固くお断りいたします。

人であらざる人の道～はじまりの代行人形～

<http://p.booklog.jp/book/117561>

著者：せい。

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mikki0723seim/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/117561>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト